

大原第一遺跡

～緊急発掘調査報告書～

1977

箕輪町教育委員会

大原第一遺跡

箕輪町教育委員会

序 文

昭和51年度から3ヶ年にわたって、当町福与地区に団体営土地改良事業が実施されることになったが、この地は地域内に大原、黒津原など縄文期の遺跡包蔵地が含まれ、既に把手付土器、土笛等が耕作による地表擾乱によって発掘されており、天竜川左岸の舌状台地の中でも注目すべき大遺跡包蔵地と予想されると、日本考古学協会員友野先生の指摘される地域である。

幸いに国、県、町の理解の下に緊急発掘が行なわれることになり調査団の組織にかかり、團長に友野良一先生、調査員に柴、中村、赤羽、荻原、小池、丸山の諸氏等、有力なメンバーに依る編成がなされたわけである。加えて補助員に伊那北高歴史研の諸君、郷土博物館の歴史クラブ員、地元福与地区から参加された作業員のみなさんによって調査が行なわれたのであるが、これに先立つて発掘地点を選定するための地表採集と確認が團長を中心に二月中に行なわれ地点が確定したわけである。

そして発掘に当っては、発見された遺物をドットマップ方式によって水平、垂直の位置を地層断面と関連づけて記録するという試みを実施したこと、その日の調査状況をその日のうちに整理してプリントし、翌日の昼休みに時間をとってそれを中心として学習会を開くという試みを実施にうつして、従来の当町の発掘では見られない方式を採用したのが今回の緊急発掘調査の大きな特色となっている。

調査の結果は本報告書でご覧いたいきたいが、53年度には続けて大原地区の南の部分の発掘が予定されているので、これまた大きな期待を持つところである。最後に調査団の皆さん、補助作業に当られた皆さんをはじめ関係された方々の御労苦に対し深甚なる感謝を捧げてあいさつとします。

昭和53年3月

箕輪町教育委員会教育長 河手貞則

凡　　例

1. この調査は国県補助事業による緊急の記録保存事業であるため、早急に報告書刊行の義務を有するため、報告書は図版を主体として、文章記述は簡略化した。
2. この調査は、当町福与地区に行なわれる団体営土地改良事業に伴うもので着工前に実施した。本調査は「ドット・マップ」による遺物の分布状態を知る点に主眼をおいて調査した。したがって編集もこれに重点をおいた。
3. この報告書の執筆および図版作製は次のとおりである。担当項目の末尾に執筆者を明記し、その責任を明らかにした。

本文執筆 友野良一 赤羽義洋 小池幸夫 柴 登巳夫

図版及び表作製 赤羽義洋 丸山弥生 萩原 茂 小池幸夫 三沢 恵
西村美保子 竹入洋子 柴 登巳夫

伊那北高校歴史研究部（北条 千葉 中島 酒井）

写真撮影 友野良一 赤羽義洋 萩原 茂 小池幸夫 柴 登巳夫

4. 本報告書の編集は箕輪町教育委員会と発掘調査団があたった。

目 次

序 文

凡 例

目 次

図版目次

第Ⅰ章 遺跡の立地.....	1 ~ 2
第1節 位 置.....	1
第2節 地形と地質.....	2
第Ⅱ章 発掘調査の経過	3 ~ 5
第1節 発掘調査に至るまで.....	3 ~ 4
第2節 周辺の遺跡.....	5
第Ⅲ章 発掘調査の結果	7 ~ 69
第1節 調査結果の概要.....	7 ~ 9
第2節 繩文時代の遺構と遺物.....	10
1. 繩文時代早期.....	10~14
2. 前期の遺構と遺物.....	15~20
3. 遺物集中区と出土遺物.....	21
第3節 奈良・平安時代の遺構と遺物.....	22~41
第4節 その他の遺構と出土遺物.....	42~69
第Ⅳ章 所 見.....	70

挿図目次

図1 位置図	1
図2 遺跡周辺の地形	2
図3 周辺遺跡分布図	6
図4 地型及び発掘区域図	7
図5 基本層序図（C21グリッド北壁セクション）	8
図6 遺構全測図	9
図7 壊穴状遺構図I	10
図8 壊穴状遺構遺物分布図	11
図9 壊穴状遺構図II	12
図10 壊穴状遺構II 出土遺物分布図	12
図11 壊穴状遺構土器拓影	13
図12 壊穴状遺構石器実測図	14
図13 第4号住居址遺構図	15
図14 第4号住居址遺物分布図	16
図15 第4号住居址出土遺物実測図 I	17
図16 第4号住居址出土遺物実測図 II	18
図17 第4号住居址出土遺物実測図 III	19
図18 第4号住居址土器拓影・第1号土塗出土土器実測図	20
図19 遺物集中区石器実測図	21
図20 遺物集中区土器拓影	21
図21 第1号住居址遺構図	22
図22 第1号住居址遺物分布図	23

図23 第1号住居址カマド実測図	24
図24 第1号住居址遺物接合図	25
図25 第1号住居址出土遺物実測図	27
図26 第2号住居址遺構図	28
図27 第2号住居址カマド実測図	28
図28 第2号住居址カマド基部実測図	29
図29 第2号住居址遺物分布図	30
図30 第2号住居址土器接合図	31
図31 第2号住居址土器実測図	32
図32 第2号住居址石器実測図	33
図33 第3号住居址遺構図	34
図34 第3号住居址焼土炭化物分布図	34
図35 第3号住居址カマド実測図	35
図36 第3号住居址遺物分布図	36
図37 第3号住居址土器接合図	37
図38 第3号住居址土器実測図	38
図39 第3号住居址石器実測図Ⅰ	39
図40 第3号住居址石器実測図Ⅱ	40
図41 第3号住居址石器実測図Ⅲ	41
図42 ピット群遺構図	42
図43 東部落込み遺構図	43
図44 マウンド状遺構実測図	44

図45 第1、2、3号住含土押型文土器拓影	45
図46 造構外出土土器拓影I	46
図47 造構外出土土器拓影II	47
図48 グリット出土土器拓影I	48
図49 グリット出土土器拓影II	49
図50 グリット出土土器拓影III	50
図51 グリット出土土器実測図	51
図52 グリット出土石器実測図I	53
図53 グリット出土石器実測図II	54
図54 グリット出土石器実測図III	55
図55 グリット出土石器実測図IV	56
図56 グリット出土石器実測図V	57
図57 グリット出土石器実測図VI	58
図58 グリット出土石器実測図VII	59
図59 グリット出土石器実測図VIII	60
図60 グリット出土石器実測図IX	61

図 版 目 次

- 第1図版 (遺構1)
- 第2図版 (遺構2)
- 第3図版 (遺構3)
- 第4図版 (遺構4)
- 第5図版 視察及び記念撮影
- 第6図版 第1号住居址カマド及びピット
- 第7図版 第2号住居址カマド
- 第8図版 第3号住居址遺構
- 第9図版 遺物出土状況
- 第10図版 出土石器1
- 第11図版 出土石器2
- 第12図版 出土土器1
- 第13図版 出土土器2
- 第14図版 出土土器3
- 第15図版 出土陶磁器

表 目 次

表一 第1号住居址出土土器要目一覧表	26
表二 第2号住居址出土土器要目一覧表	26
表三 第3号住居址出土土器要目一覧表	37
表四 出土石器要目一覧表	66~69

第Ⅰ章 遺跡の立地

第1節 位 置

大原第一遺跡は、長野県上伊那郡箕輪町大字福与386ノ1及び、386ノ2番地に所在する。天竜川東側に南北に連なる小丘状地上に位置する遺跡である。国鉄飯田線木下駅の東南約1kmほどで、西向きのゆるやかな傾斜面にあり、標高は700mで眼下を流れる天竜川との比高は約35mを計る。

(柴 登巳夫)



図1 位 置 図

第2節 地形と地質

箕輪町は、南北に流れる天竜川によって竜西、竜東という二つの地域に分けて呼ばれている。天竜川の右岸（竜西）は、経ヶ岳山麓から東方に流下する小河川、即ち、帶無川・大泉川・深沢川等によって複合扇状地形が形成されている。複合扇状地は砂・砂・粘土・ローム等が相重なって堆積し東方に向かって緩かな傾斜をしている。左岸（竜東）は竜西地帯とは対照的に扇状地や段丘等の傾斜は急で小規模なものである。背後にすぐ山を控え、それより流れ出す河川は小さいが数多くなっている。この小河川によって段丘は刻まれてところによって舌状台地を形成している。又、山からの急な出水の繰り返しにより天井川地形が見える。

大原地帯はこのような竜東地形にあっては広い面を有する方であり、西南に傾斜した地形は古代人の生活の場として最適な所であったと思う。又遺跡近くの扇端部には湧水がわくところがある。これはかなり急な扇状地にしては扇端部ならば考えられることであるが、めずらしいことである。遺跡は標高700m地帯に広がり、天竜川氾濫原との差がかなりある。竜東はほとんどがこのような地形であるが、この小扇状地や段丘上には数十ヶ所を越す遺跡があり、箕輪町では最大の遺跡密集地帯である。

（柴 登巳夫）



図2 遺跡周辺の地形

第II章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまで

本地区は箕輪町福与地籍の天竜川左岸台地の水田および細作地帯で、地区一帯は水田と畠が点在し、排水の悪い湿田が多く、区画も不整形で小区画であり、農業機械の導入にも支障をきたしている現状であった。このような現状を打開するため、箕輪町が事業主体となって、団体営土地改良工事が計画された。昭和51年度から3ヶ年計画で進められるものである。この土地改良事業の計画段階において、当該地区内に埋蔵文化財の包蔵の有無についての分布調査を行なった。昭和51年度分の改良事業予定地区内には該当地は無く、昭和52年度分改良事業地区内に包蔵地が確認されたため、発掘調査の必要がありとの判断で、県教育委員会文化課の指導のもとに発掘調査の計画を進める。昭和52年5月に入り調査団を組織し、5月7月の初旬の2回にわたり調査予定地区を踏査し、調査地区的決定を行なう。日本考古学协会会员友野良一氏を調査団長とする調査団を組織し、7月下旬から記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施する運びとなつたのである。

イ) 調査団

団長	友野 良一	日本考古学协会会员
調査員	中村 龍雄	"
"	赤羽 義洋	長野県考古学协会会员
"	丸山 弥生	"
"	荻原 茂	東京薬科大学学生
"	小池 幸夫	静岡大学学生
"	柴 登巳夫	箕輪町郷土博物館主任学芸員
調査補助員	三沢 忠	立正大学学生
参考与	矢島伝三郎	箕輪町教育委員会教育委員長
	唐沢 義美	" 職務代理
	馬場 哉一	箕輪町教育委員会教育委員
	原 茂人	"
	春日 琢爾	箕輪町文化財調査委員会委員長
	樋口 彦雄	箕輪町文化財調査員
	荻原 貞利	"
	星野 和美	"
	矢沢 喬治	"

	市川修三	箕輪町文化財調査員
	小川守人	"
	堀口貞幸	"
	伊藤一郎	"
	上田一江	"
事務局	河手貞則	箕輪町教育委員会教育長
	唐沢保美	教育課長
	唐沢千洋	社会教育係長
	中村文好	社会教育係主事
	田中正子	社会教育係主事
	柴登巳夫	箕輪町郷土博物館主任学芸員
	竹入洋子	学芸員

四) 発掘調査の経過

調査は、発掘予定地区全体を東西南北にあわせて10m方眼の大グリッドを設定する所から開始し、その間を2mに分け西から東へA・B・C・D列とし、南から北へ20~40列とする。結果的には、A・B列はカットし、18・19列は拡張列となる。(例えば、C-20グリッドと呼称した。) 調査は10m方眼のグリッドの部分50cmを地層断面を観察するために残し、西南の角から1グリッドずつ「チドリ」に発掘を開始し、機械力を全く使用せず全て手掘りで進めた。又、現場での遺物出土状態を細部にまでわたって記録する事に重点をおき、遺物一点ずつ「ドットマップ」を行なった。そのため作業の進行は、きわめて遅く現場での作業は2ヶ月余をかけ、出土資料は5000点近くになり、それ等をまとめて報告書作成にあたった。そして、縄文時代早期から平安時代にかけて数時代の遺構を検出することができ、以下に記した様に多くの成果をあげることができた。

(柴 登巳夫)

第2節 周辺の遺跡

天竜川の東岸に河岸段丘と扇状地とが独特の地形を作り出し、居住性に富む地形を利用し、各所に遺跡の密集地帯が形成されている。箕輪町内は先史より近世に至るまでの歴史上の遺跡に富み、その総数は170ヶ所に及び、上伊那郡内でも屈指の遺跡地帯といわれている。その中で代表的なものを挙げると、上伊那郡唯一の前方後円墳「松島正墓」があり、古くから多数の埴輪片が出土している。(注1) 王墓と天竜川を隔てて対立する台地には、信濃源氏発祥の地といわれる上の平があり(注2) その南には長岡古墳群が位置している。

次に昭和27年からの土地改良工事によって発見された「箕輪遺跡」(注3) 昭和47年県企業局による宅地分譲及び県営住宅団地造成事業に伴う「北城遺跡」(注4) 等は町を代表する遺跡でありそれぞれに特色をもっている。

次に町内の遺跡分布を概観するとき、それを次のように4類に分けて考えることができる。

- 第1類 経ヶ岳山塊の山麓付近に立地する遺跡。
- 第2類 天竜川の西岸の段丘上に列状に並ぶ遺跡群。
- 第3類 天竜川の東岸の段丘上、扇状地上に立地する遺跡群。
- 第4類 低位段丘(沖積面)の遺跡。

福与大原第一遺跡は第3類遺跡群中の一つである。第3類は、天竜川東岸に最高の密集地帯を形成し、それ等は段丘面や、小扇状地に集中している。この中でも長岡地籍と福与大原地籍は古くから多数の遺物を出土している。(注5) 近接する遺跡として北垣外(図3-1)、矢田尻(図3-1)、上金(図3-1)、上の山(図3-1)や黒津原、矢田の各遺跡が上げられる。これ等はほとんど複合遺跡であり、古代人にとって非常に居住性に富んでいたことをうかがうことが出来る。

又、第4類 低位段丘にある遺跡として代表的な箕輪遺跡と天竜川東岸の遺跡関係も無視することの出来ない問題といえる。

注

- (1) 出土資料の代表的なものは箕輪町郷土博物館に展示。
- (2) 上の平城址については、昭和8年刊、長野県史蹟天然記念物報告書所載「上の平城址」市村成入著の報告文にあり。
- (3) 信濃7卷2号に「長野県上伊那郡箕輪遺跡について」藤沢宗平氏の報告書あり。
なお、出土遺物は箕輪町郷土博物館に展示。
- (4) 箕輪町教育委員会による報告書「木下北城遺跡」(林茂樹氏担当)あり。弥生後期の大集落の一画と、中世火葬墓群の発見は注目されるものである。
- (5) 先年この地から上伊那地方では初めてといわれる「土笛」が出土している。

(柴 登巳夫)



- ①大原 ②猿楽 ③北城 ④大清水 ⑤上の林 ⑥藤山 ⑦中山 ⑧並木下
 ⑨王墓古墳 ⑩大出 ⑪五輪 ⑫一の宮 ⑬山の神 ⑭向垣外 ⑮天伯 ⑯上人塚
 ⑰垣外 ⑱内城 ⑲大泉 ⑳宮ノ上 ㉑南城 ㉒北垣外 ㉓矢田尻 ㉔上金
 ㉕福島 ㉖上の山 ㉗御室田 ㉘馬場 ㉙苦谷 ㉚久保下 ㉛番場原 ㉜高室古墳
 ㉝塚畠高根 ㉞久保塚 ㉟中曾根

図3 周辺遺跡分布図

第Ⅲ章 発掘調査の結果

第1節 調査結果の概要

調査の結果、縄文時代早期から、平安時代後期にかけての遺構・遺物が出土した。縄文時代早期では、押型文土器や、それに伴う石器が出土し、この時代のものと思われる竪穴状の遺構がいくつか発見された。押型文土器は90%以上が橢円押型文で、残りが山型文である。

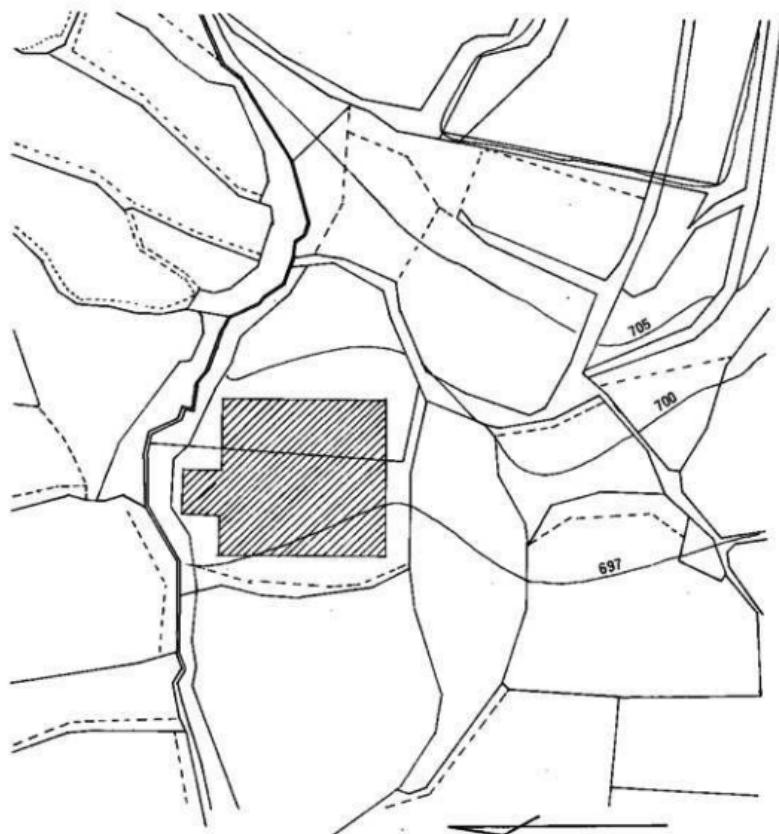


図4 地形及び発掘区域図

竪穴状遺構はいずれも梢円形をしており、壁高もわずかで、プランも不確実なものが多い。石器類では、各種のスクレイパー、鋸形器など特徴的なものが出土している。

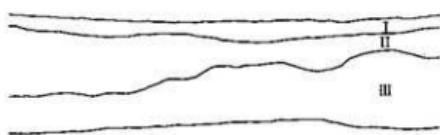
縄文前期の住居址（第4号住居址）が一軒確認される。平面梢円形をしたこの住居址内からは発見例が極めて少ない石器の加工台と、加工した際の剝片が多く出土した。土器は無文の小形のものが2点出土している。

奈良から平安時代にかけての住居址が3軒発見されたが、3軒共に年代が少しずつれており2号址が一番古く、3号址が一番新しい。どの住居址もカマド周辺に遺物が集中しており、当時の生活の痕跡をよく示している。カマドは3号住居址共に比較的良好な遺存状態で、袖部には柱状の礎が立てられカマドを補強している。第3号住居址は、生活中に火災にあったか、或いは住居址をする時に火を放ったかわからないが、多量の焼土と、木炭が検出されている。その他調査区域内からは、ピットの集中群や土括、マウンド状の遺構等も発見された。遺物は総数で4,800点ほど出土し、石器は170点余である。

基本層序

C-21グリットの北壁を基本層序とした。第I層は耕作土で10cm前後であるが、遺構が確認された周辺ではもう少し深くなる。第II層は固い黄褐色土でありこの層は調査範囲の西側の一部に限られ、他の所はこのII層は無い部分が多い。以下III～V層は図のようである。調査面と基本層序としたところに差ができるが一応ここの面を基本層序として進めた。（柴 登巳夫）

層序説明



- 第I層【耕作土層】
- 第II層【黄褐色土層】固い。
- 第III層【黒褐色土層】上部は下部より固い。
- 第IV層【黒色土層】小石を含む、柔かい。
- 第V層【ローム層】砂を含む、水分が多い。

IV

V

図5 基本層序図（C21グリット北壁セクション）

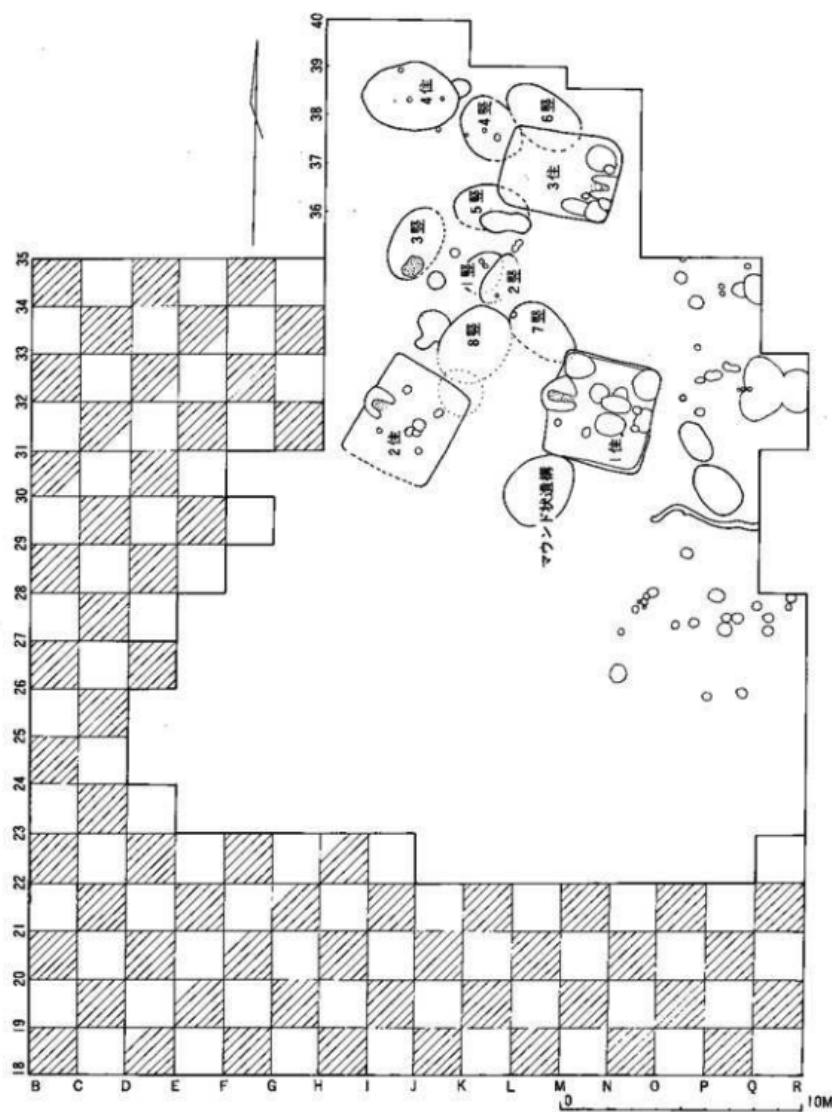


図 6 造構全測図

第2節 縄文時代の遺構と遺物

1. 縄文時代早期

(1) 壺穴状遺構

1～8号の壺穴状遺構は、第1号～第4号住居址にはば囲まれるような場所に位置している。いずれの壺穴もローム層をごく僅か掘り込んでいるだけのためプランは明確ではないが、推定プランから考えると、各壺穴ともほぼ楕円形を呈すると思われる。壺穴の規模は、長径2.0～2.5m、短径1.4～1.6mとやや小さめの1号、2号壺穴、長径2.9～3.4m、短径1.8～2.2mの3～7号壺穴、

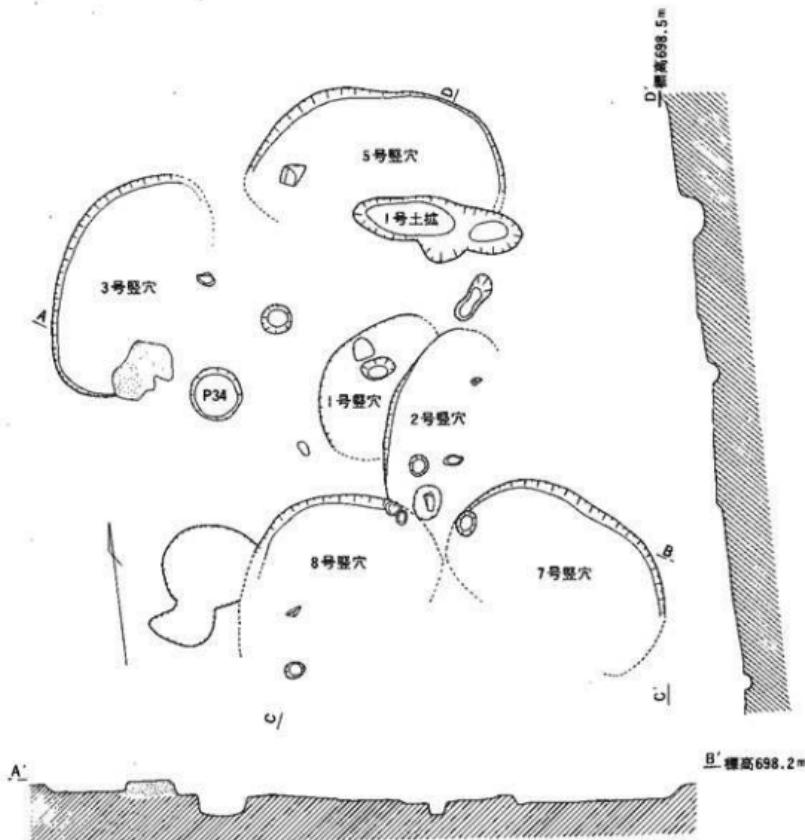


図7 壺穴状遺構図1

それに更に大型の8号竪穴がある。切り合ひからみた新旧関係は、6号は4号よりも古く、また1号は2号、2号は8号よりも古い。5号竪穴は1号土括によって切られている。各竪穴の内部もしくは周辺からいくつかのピットや石が検出されているが、それらが属する遺構、あるいは、それらの機能については不明である。3号竪穴南側からは焼土が検出された。

遺物の出土状態は、第8図・第10図に示す如く、竪穴内及びその周辺に遺物の集中が認められた。各竪穴についてみると、4号、6号には押型文土器が集中しており、特に6号はその程度が著しい。4号からは鍬形鏃も出土しており、これらは縄文時代早期に属する遺構であると考える。5号については、竪穴内に押型文土器が散在し、また竪穴の北西約1.4mの所に押型文土器が集中しており、特殊磨石も出土している。その他の竪穴に関しては、時期不明の土器が多いため各遺



図8 竪穴状遺構遺物分布図

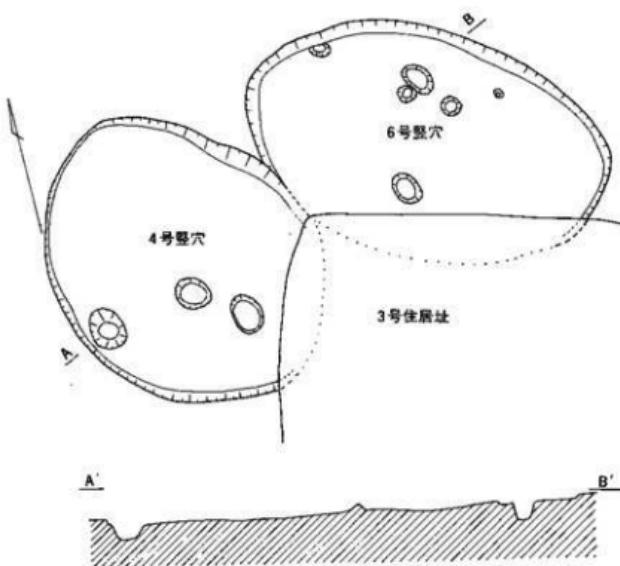


图9 竖穴状遗构Ⅱ

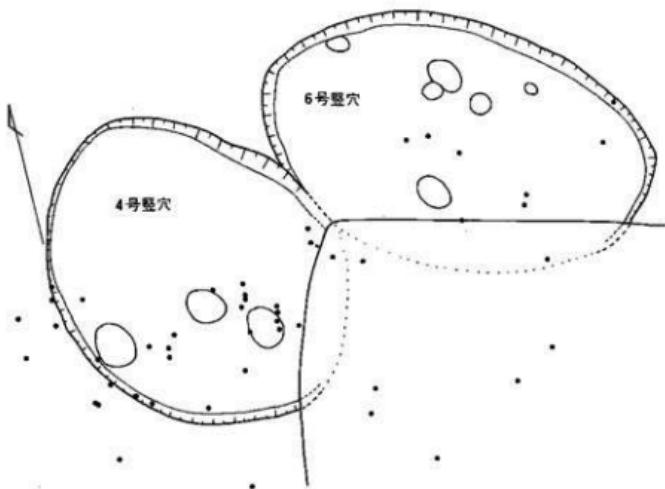


图10 竖穴状遗构Ⅱ出土遗物分布图



図11 竪穴状造構土器拓影

構の時間的推移を考えるのは難しいが、これらの造構付近に押型文土器や縄文中期初頭の土器が多数分布している事実には、注意を要しよう。

(2) 竪穴状造構出土遺物

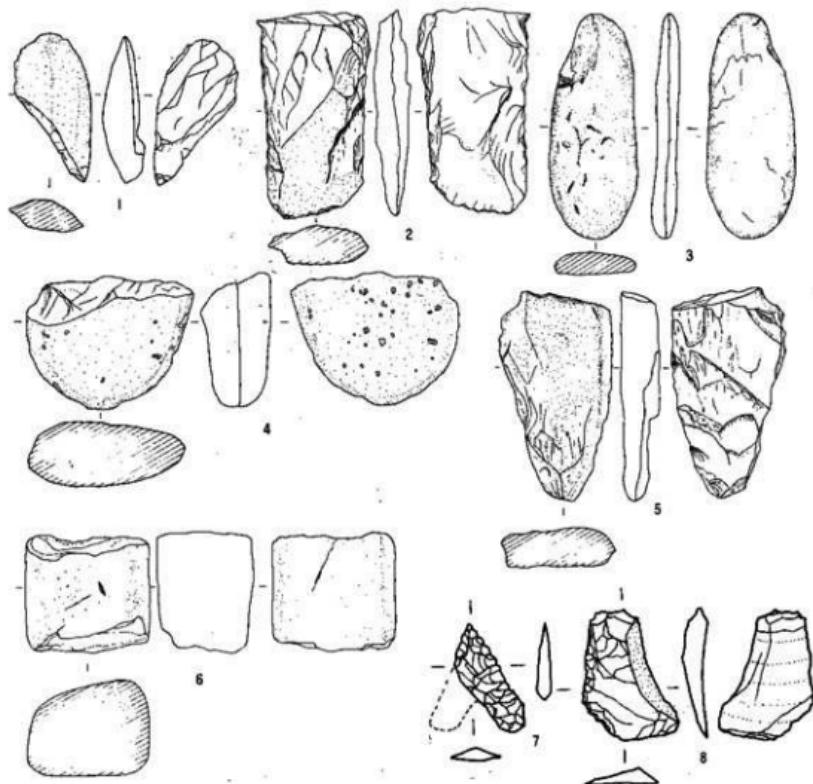
第11図は、竪穴状造構出土の押型文土器の拓影である。

1・4・9・19・26・28は、内部がやや小さい楕円を呈する押型文土器である。1と9は、胎土中に砂粒を含み赤褐色を呈する。26は、砂粒と少量の纖維を含み赤褐色を呈してあり、焼成はよくない。

2・17・18・21・25・27は、凸部がやや大きい楕円を呈する押型文土器である。2は、胎土中に細かい砂粒を含み焼成は中位である。18は、少量の纖維を含み胎土は非常に緻密で黄褐色を呈する。21は口縁部であり、残存部分が少ないのではっきりしないが、波状口縁ではないかと思われる。胎土中に砂粒及び纖維を含み、暗褐色に焼かれている。印刻は全体的に浅い。25も口縁部である。胎土中に多量の砂粒と僅かな纖維を含み暗褐色を呈する。これらは、いずれも印刻の凸間が広い。

7・10は、凸部の大きい偏平な菱形を呈する押型文土器である。7は胎土に砂粒を含み黄褐色を呈す。10は胎土に砂粒と纖維を僅かに含み黄褐色を呈す。7・10ともに焼成はあまりよくない。

11・13・14・30・32・34は、山形の頂部が丸味を帯びてある押型文土器である。13・14・30・32は山形がかなりくすれて波状になっている。これらは焼成は中位で茶褐色に焼かれている。34はその文様から施文原体の長さなどを知りうる。それによると、原体の長さは約20mm、文様の反復距離は約28mmである。胎土中に砂粒を含み、焼成は良く茶褐色に焼かれている。



尺度 1～6は舌、7・8は凸 図12 穫穴状遺構石器実測図

24・29・31・33は、山形の頂部が尖った押型文土器である。24は一単位の山形の巾が高さに比して短く、胎土中に砂粒を含む。29は一単位の山形が非常に大きい。

第12図は、竪穴状遺構出土の石器である。1・4・6は磨石であり、いずれも欠損している。特に6は「特殊磨石」と呼ばれるもので、押型文土器との共存が知られている。2は砂岩製の打製石斧である。欠損しているにもかかわらず重量が140gあり、またやや肉厚であることから、重さを利用して使用された石器であると推測される。7の鉤形鐵は一方の脚部を欠いている。この石器も押型文土器との伴出が知られている。8は、母岩から剥ぎ取ったフレークの片側を加工して刃をつけたチャート製のスクレーパーである。スクレーパーとしては小型の部類に属する。

(小池幸夫)

2. 前期の遺構と遺物

(1) 第4号住居址

本住居址は、第3号住居址の西側、第4号竪穴と隣接するJ-38、K-38グリット付近に位置する。基本層序一層下部でその存在が知られ、プランが確認された。

住居址の竪穴部分は、東西約4.2m、南北約2.8mの階円形で、東壁や、北寄りには、半径約40cm深さ4cm前後の半円形の造り出しがある。この造り出しへは、全面にわたって厚さ20cm程の焼土で覆われていたが、遺物は出土していない。この施設がいかなる機能を有していたかは明らかでない。確認面からの壁高は、北壁で20cm前後、南壁では0~4cmと非常に浅い。これは、地形が傾斜しているために自然營力もしくは人為力（耕作など）によって、土が南西の低い方へ動かされ、壁が削られたためと思われる。竪穴内及び周囲には、大小6つのピットがある。P₁は深さが約17cm、P₂は約11cmと若干の相違があるが、ピットの形や大きさは類似している。P₃は深さ25cmと6つのピットの中でも一番深いが、駆際にあり、P₁、P₂とは多少位置が異なる。ここでは一応P₁~P₃を主柱穴と考えたいが、上屋の構造を想定した場合、この三本のみでは非常に変則的かつ不安定であり、この他にも柱穴もしくはこれに変わる施設があったものと思われるが、速断は避けたい。P₄は竪穴中央や、南寄りにあり、大きさの割に浅く、また厚い焼土で覆われていたことから、炉址であると思われる。

遺物は、図14で示す如く竪穴の東側半分に集中していた。時期不明の土器片が多いため、時期

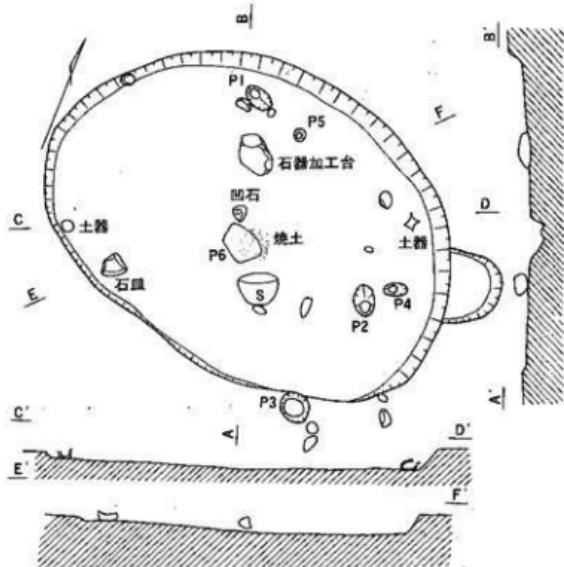


図13 第4号住居址遺構図

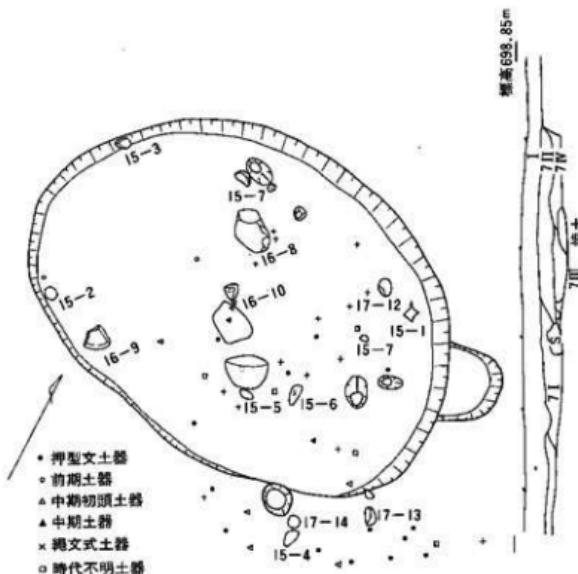


図14 第4号住居址遺物分布図

層序説明

第Ⅰ層 〔褐色土層〕耕作土であり、炭化物・石灰殻をわずかに含む。

第Ⅱ層 〔褐色土層〕フーII層とはほぼ同色。柔らかい。

フーI 〔黒褐色土層〕比較的柔らかい。床に近い所では、細かな焼土粒を含む。

フーII 〔褐色土層〕フーIと同様柔らかい。第Ⅰ層より黒味がかかる。わずかに炭化物、焼土を含む。

フーIII 〔黒褐色土層〕柔らかい。フーIより明るい色である。焼土粒、ロームを少し含む。

フーIV 〔褐色土層〕少し硬い。フーIIより黒い。焼土を含む。

的な偏在を知ることはできないが、床直上より出土した図15-1、2の2個体の土器によって、本住居址が縄文時代前期のものであることが確認された。

図15-1の土器は、東壁際から横倒した状態で出土し、口縁付近には小さな黒曜石塊が3つ、あたかも土器からころがり出たような状態でみつかった。この土器は高さが約11cmで波状口縁をなす。施文は若干の整形痕がみられるのみで、全くの無文である。図15-2の土器は、西壁や、南寄りの壁際から、床面に直立した状態で出土した。口縁部を欠いているが、1と同様の器形をとるものと思われる。図15-3、4、7、図16-11、図17-12、14は磨石である。15-3は砂岩製で僅かに焼けている。15-4も砂岩製であり、両端には敲打痕が認められる。15-7は砂岩製であり、周囲は一部を除きほぼ全周にわたって敲打痕を残している。図14で示す如く、この石器は、北壁寄り及び東壁寄りから出土した二片の石器が接合したものであるが、敲打痕の観察から、一

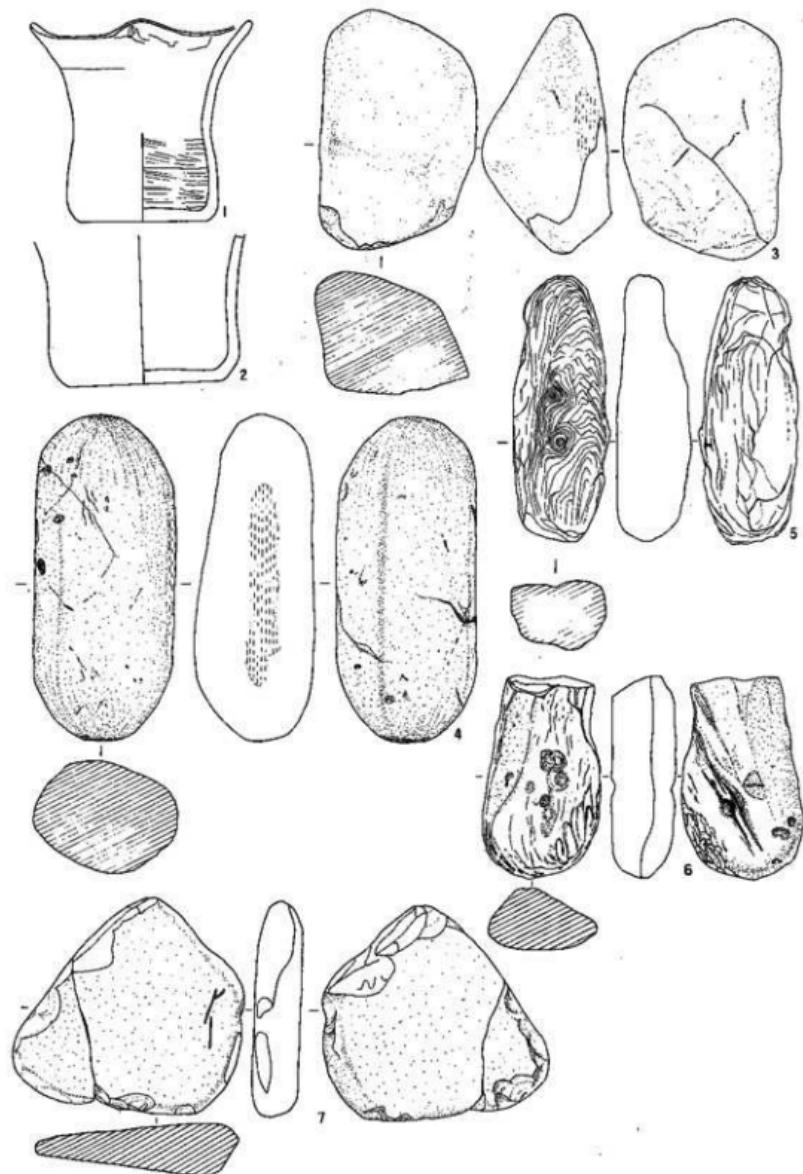


图15 第4号住居址出土遗物实测图 I

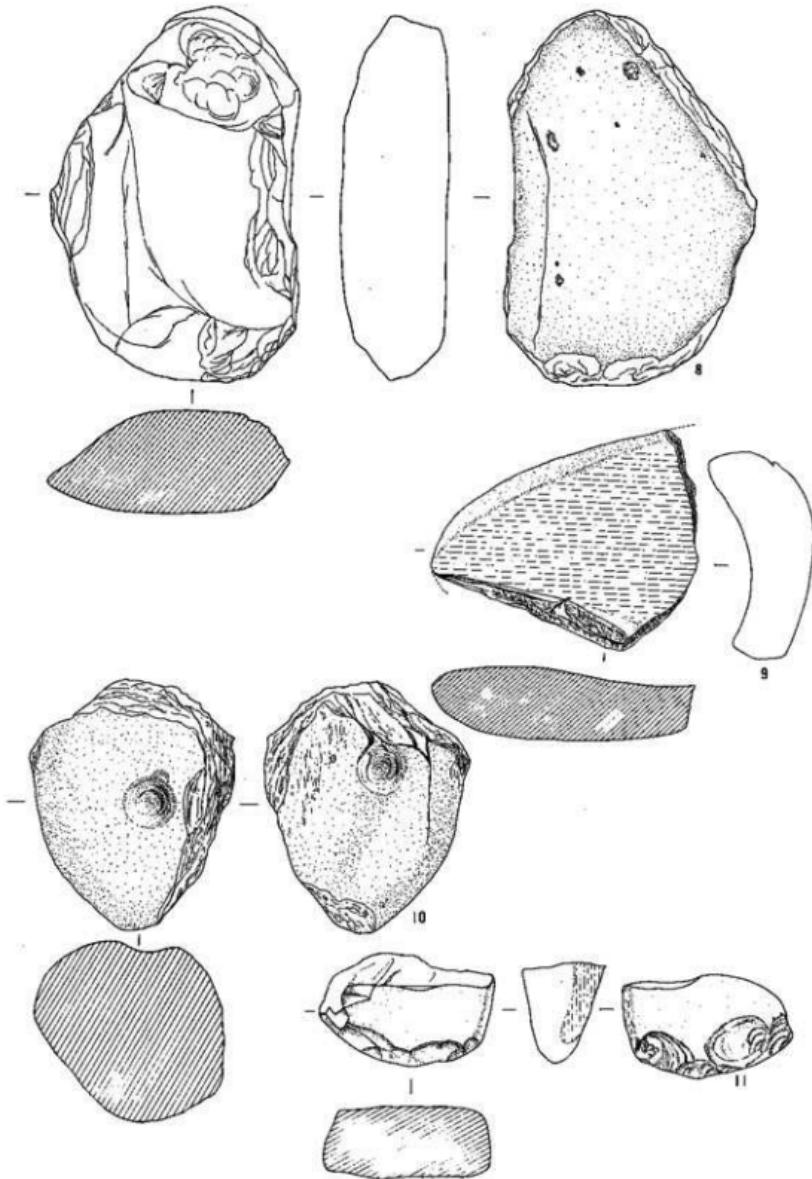


图16 第4号住居址出土遗物实测图 II

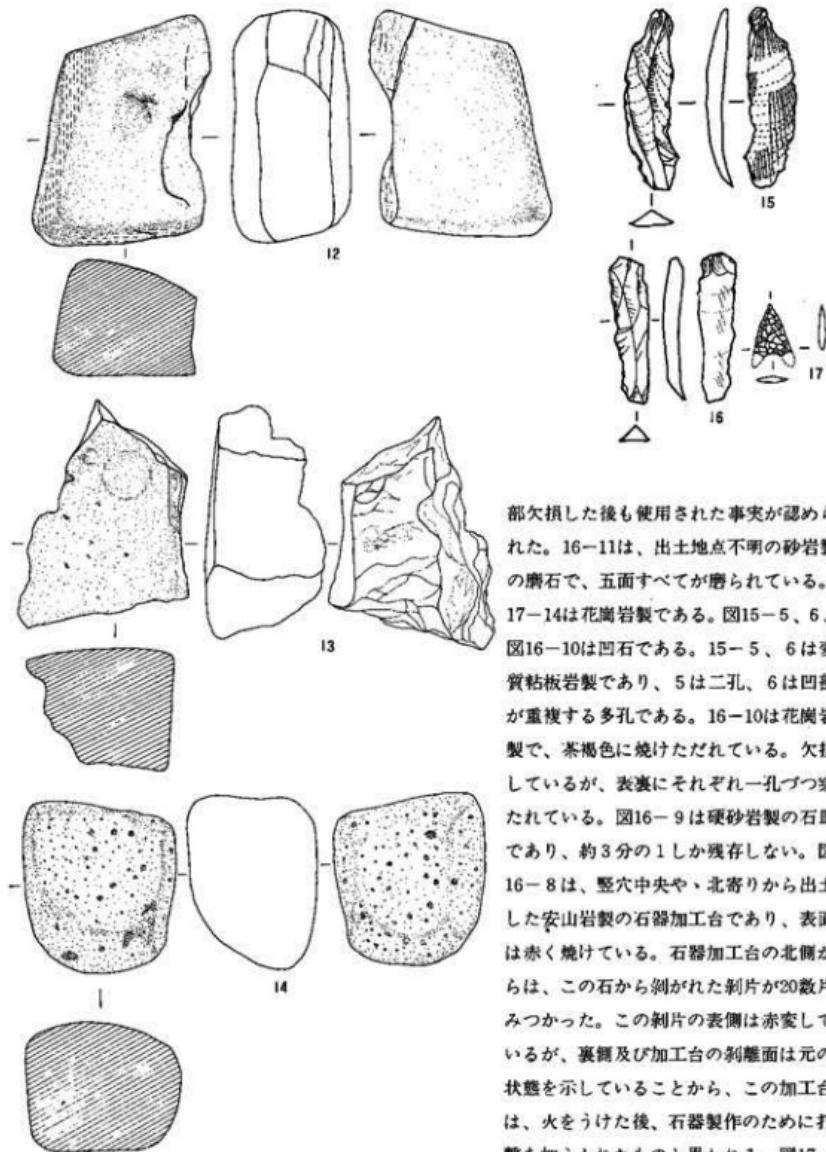


図17 第4号住居址出土遺物実測図 III
尺度 12~14は寸、15~17は分

部欠損した後も使用された事実が認められた。16~11は、出土地点不明の砂岩製の磨石で、五面すべてが磨られている。17~14は花崗岩製である。図15~5、6、図16~10は凹石である。15~5、6は変質粘板岩製であり、5は二孔、6は凹部が重複する多孔である。16~10は花崗岩製で、茶褐色に焼けただれています。欠損しているが、表裏にそれぞれ一孔づつ穿たれている。図16~9は硬砂岩製の石皿であり、約3分の1しか残存しない。図16~8は、豊穴中央や、北寄りから出土した安山岩製の石器加工台であり、表面は赤く焼けている。石器加工台の北側からは、この石から剥がれた剥片が20数片みつかった。この剥片の表側は赤変しているが、裏側及び加工台の剥離面は元の状態を示していることから、この加工台は、火をうけた後、石器製作のために打撃を加えられたものと思われる。図17~17は、黒曜石製の鉤形鏃である。図17~

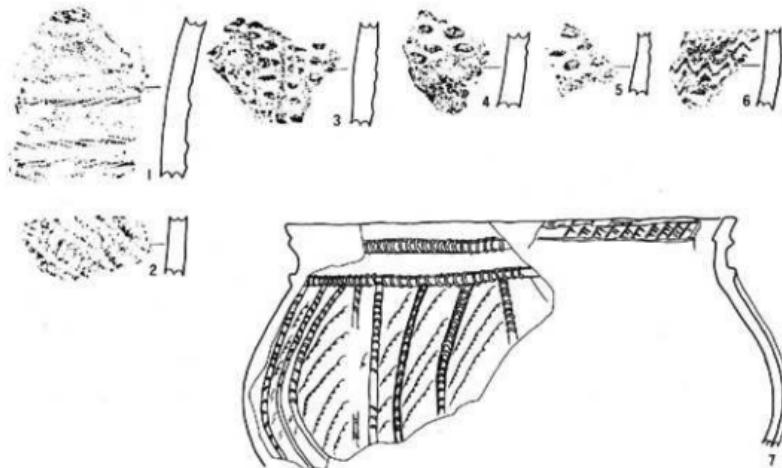


図18 第4号住居址土器拓影
第1号土塙出土土器実測図

15、16は、断面三角形を呈する石刃状の石器で、黒曜石製である。図17-15~17は、他の遺物よりも高い位置から出土しており、周辺から流れ込んだものと思われる。図18-1~6は、4号住居址出土の土器片の拓影である。1、2は縄文前期の土器であり、1は諸磯B式、2は黒浜式に比定できる。3~6は、早期押型文土器であり、東側の竪穴状遺構からの流れ込みと思われる。

なお、本住居址の南東に位置し、第5号竪穴を切っている第1号土塙からは、図18-7に示す十三菩提式の土器が出土している。

(小池幸夫)

3. 遺物集中区と出土遺物

第2号住居址の南T-28グリットを中心として遺物が集中して出土した。この附近を他の区域と区別するために、遺物集中区としてあつかった。調査の過程においては遺構になるのではないかと思われたが、確認するまでは至らなかった。出土遺物のうち石器は図19に、土器の一部を図20に表わした。石器は総数6点で打製石斧4点、石鎌2点である。

図19-1は第14類-dに入り鐵形状を呈した石斧である。全面に細かな調整をして下部に刃部を設け全体に整った形をした石斧である。他の3点はあまり細かな調整をせず一般的な石斧で、弾形を呈している。図19-5・6は共に黒曜石製の石鎌で、6は三角鎌と呼ばれる部類に入る。

図20は出土土器の拓影である。1・2は早期押型文土器で、楕円押型文である。

他は縄文時代中期初頭の土器片で、半截竹管を用いた文様が多い。

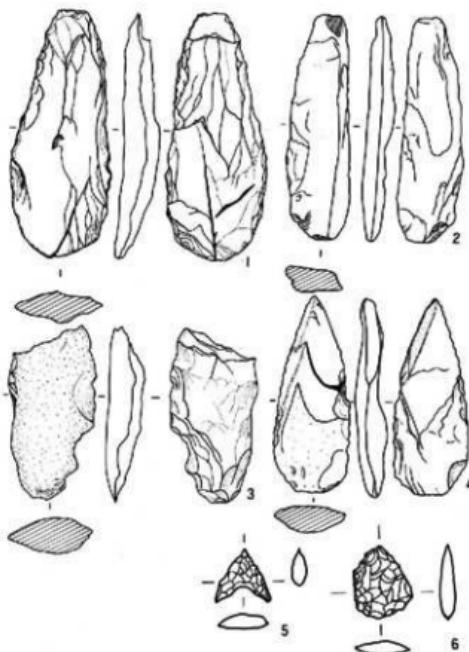


図19 遺物集中区石器実測図

尺度 1-4は寸、5-6はmm

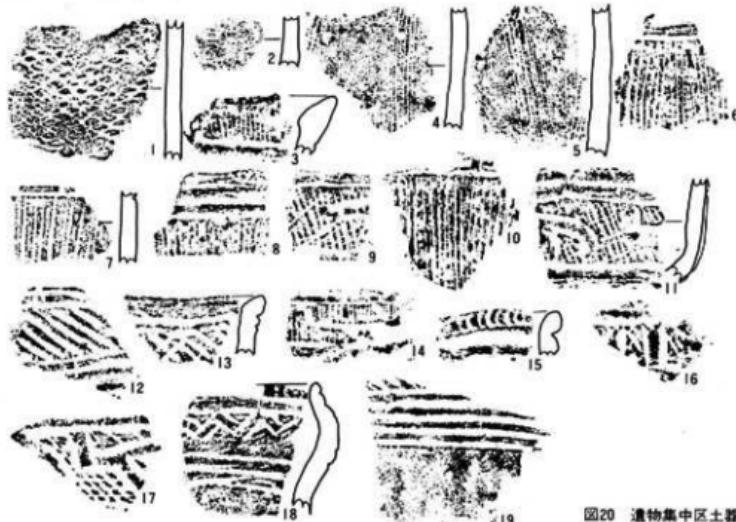


図20 遺物集中区土器拓影

第3節 奈良・平安時代の遺構と遺物

1. 第1号住居址

本住居址は、N-31・32、O-32・32グリット付近に位置している。基本層序II層～III層付近でその存在と平面プランが確認された。竪穴の埋没土は、地形の西側への傾斜に沿って東側から多く流れ込んでいる。(図22)従って、住居址の東壁付近では住居址の覆土と基本層序III層との区別が難しく、恐らく東壁は埋没土の流れ込みによって、その上端が崩壊しているものとおもわれる。また確認面からの壁高は北、東で高く、南、西で低くなっているが、基本層序III層が黒褐色土である事から判然としないところもある。遺物は住居址の覆土を掘り下げる過程で多く出土しており、その大半は土師器の小破片であった。覆土中では、特に遺物の集中する箇所は見られない。床面近くでは遺物はカマドの周辺にやや集中し、刀子(図25-20・21)が、P-3南側の床面より出土している。

住居址の竪穴部分は、東西南北とも約4.4mの隅丸長方形で北西と北東の各コーナー壁際に不整円形の土括P-1・P-2が見つかった。(図21) P-1は、東半分は覆土の中層に多量の焼土が

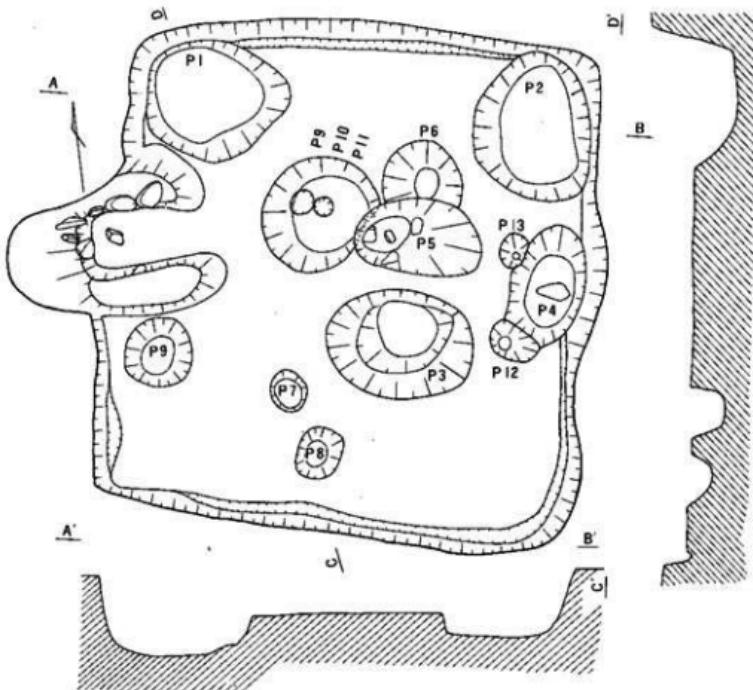


図21 第1号住居址遺構図

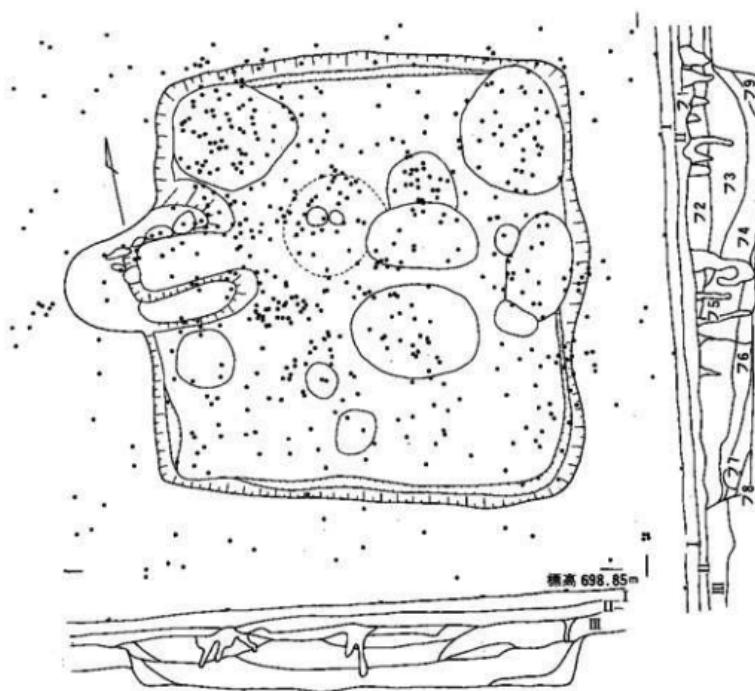


図22 第1号住居址遺物分布図

層序説明

- 第Ⅰ層【耕作土層】
- 第Ⅱ層【黄褐色土層】硬い。
- 第Ⅲ層【黒土層】柔らかい。
- フー1【黒土層】第Ⅱ層よりやや黄色（褐色に近い）。柔らかい。
- フー2【黒土層】
- フー3【黒土層】フー2よりやや硬い。
- フー4【Ⅱより黄色味をおびている黒土層】柔らかい。
- フー5【褐色土層】白い砂状のブロックが入る。かなり硬い。
- フー6【褐色土層】白い砂状のブロックと燒土が入る。
- フー7【ロームブロックを多量に含む黄褐色土層】かなり硬い。
- フー8【黄褐色土層】柔らかい。繊かなロームブロックが入っている。
- フー9【やや黄色味をおびた黒土層】柔らかい。

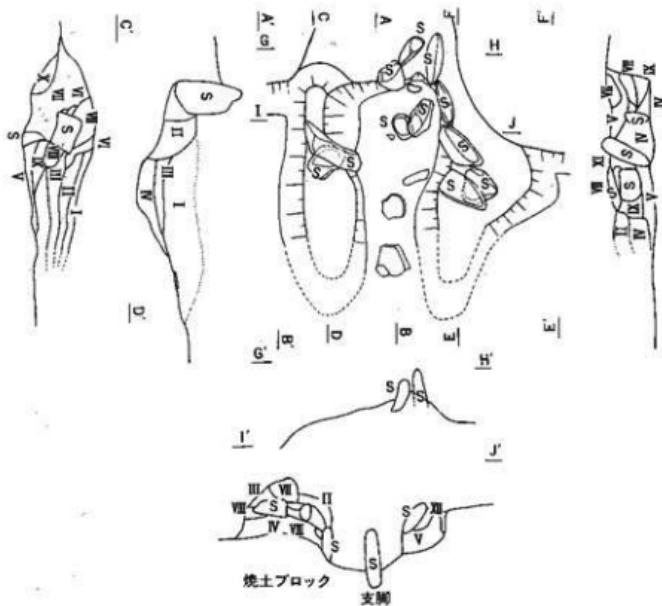


図23 第1号住居址カマド実測図

層序説明 (C'D', E'F', I'J', 水糸レベル標高698.1m)

- 第Ⅰ層 [黒褐色土層] ローム、燒土粒子を少量含む。
- 第Ⅱ層 [黒褐色土層] やや硬い。ローム粒子、ブロックを混入し、燒土粒子を微量含む。
- 第Ⅲ層 [黒色土層] 柔らかい。ローム、燒土、木炭粒を少量含む。
- 第Ⅳ層 [黒色土層] 燃土粒子を微量含む。
- 第Ⅴ層 [褐色土層] 燃土大粒子、木炭少量を含む。
- 第Ⅵ層 [黒色土層] 柔らかく、ハサハサしている。
- 第Ⅶ層 [黄褐色土層] やや硬い。ローム。
- 第Ⅷ層 [黒褐色土層] やや柔らかい。ローム、燒土粒を含む。IIに近似。
- 第Ⅸ層 [褐色土層] 燃土粒を微量含む。
- 第Ⅹ層 [黒褐色土層] 柔らかい。
- 第Ⅺ層 [黒褐色土層] 燃土、ロームを含む。やや硬い。

層序説明 (A'B'水糸レベル標高698.1m)

- 第Ⅰ層 [焼土、木炭混りの黒褐色土層] やや柔らかい。
- 第Ⅱ層 [焼土、木炭を含む黒褐色土層] 燃土は少ない。ボロボロしている。
- 第Ⅲ層 [純焼土層] 暖くカリカリしている。
- 第Ⅳ層 [褐色土層] 熱を受けて軟めて硬い。木炭・焼土を含まない。カマドの底。

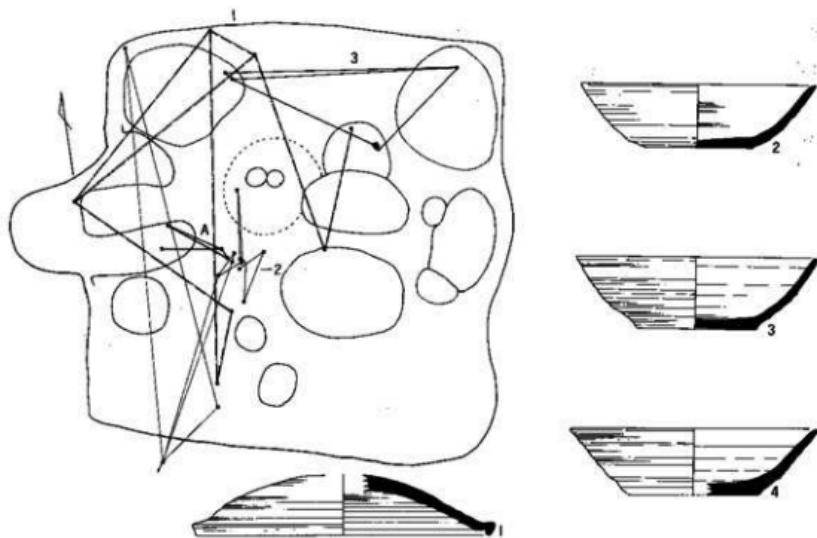


図24 第1号住居址遺物接合図

包含されており、土師器甕の破片が多く出土した。

P-2からは土師器の破片とともに（図25-13）の須恵器の杯が出土し、同じく（図25-10）の环の破片は、P-1出土の破片と接合している。このP-2はこれらの遺物とともに巨大の甕が覆土中に多く包含されていた。焼土ではなく、P-1と対称的である。

住居址のはば中央には施設と思われるいくつかのビットが見つかった。P-3、P-5は共にその覆土の最上部付近に木炭と焼土がのっており、それを掘り下げるとき、P-5の底の2箇所に青粘土が検出された。P-5にはP-6・P-11が重複しており、P-6には焼土が層状に堆積していた。P-6・P-11はともにP-5より時間的に古く、P-6・P-11の上面には貼床がなされていたが、P-11からは押型文土器の小片がわずかに出土したにすぎずこの住居址に付属した施設かは断定できない。このP-11の覆土を穿ってP-9・P-10の小ビットがあった。

東壁際中央にはP-4があり、中央に焼けた甕が置かれていた。このP-4に接して対称的な位置に深いP-12・P-13がある。P-7からは鉄滓が出土している。

カマドは西壁の中央部やや北寄りにあり、その軸線は窓穴の軸線とやや方向がずれている。煙道部ははっきりしなかったが、袖部の先端部を除いて比較的良好な遺存状態であった。遺物はカマドの中央、火床近くから大形破片がやまとまって出土したほか、焚口の両側からも破片ながら集中して出土している。土層断面から観察すると、土層は若干の焼土を含むがロームであり恐らく天井部が崩落したものと思われる。袖部は芯に河原石が用いられており、特に壁際の袖には丸味を帯びた偏平な河原石を使っている。火床中央やや奥には文脚と思われる角柱状の甕が立っており、火熱を受けた状態が観察された。両袖の中央部にはやや掘り凹めた中に角のある柱状の甕

が立てられておりカマドの補強の役を果している。また、礎の周間をロームで固めて、袖の中に埋め込んだ様子もうかがわれる。(図23) 袖部は全体的に、石芯の周囲と、袖の外面をロームなどで固めているようである。火床部は若干掘り凹められており、ロームは焼けていたが、焼土の堆積は殆どなく、Ⅲ・Ⅳ層中に焼土粒子と木炭がわずかに混っているにすぎなかった。

出土遺物は、土師器と須恵器であり、灰釉陶器は基本層序Ⅰ・Ⅱ層を除いて一片も出土していない。土師器では、(図25-1・3・6)の大形の甕、(図25-4)の小形甕、(図25-5・7)の壺があり、須恵器は壺蓋(図25-8)壺(図25-9~12・15)、高台のあるもの(図25-13・14)が出土している。壺の底部は、確認できたものは全ていわゆる糸切り底である。鉄製品としては刀子2点(図25-20・21)、それに鉄津が出土している。

遺物の接合は、例えば(図25-3)はP-1・P-2・P-6付近の床面レベルより上部で出土した須恵器が接合したもので、異ったピット内出土のものが接合している例はない。P-6はP-1・P-2に時間的に先行するようであり、その点からもそれはうなづけよう。カマド付近で接合するものが多く、日常什器を扱っていた場所として肯首されると思われる。(赤羽義洋)

表一 第1号住居址出土土器要目一覧表

図版 番号	器種	法量 cm		色調	焼成	整 形		備 考
		口径	器高			厚さ	主 体 部	
25-1	甕	22.6	15.4	0.6	淡褐色	上	口縁部にヨコナデ 内外側部に縱横方向のハケ目	輪づみ
25-2	甕	14.0	7.2	0.6	淡褐色	中	口縁部ヨコナデ 剥離ハケ目	
25-3	甕	—	5.1	0.9	淡褐色	中	外に縦・横・ナメのハケ目	
25-4	甕	15.6	5.0	0.3	淡褐色	中	内・外ともにヨコナデ	
25-5	壺	15.3	4.8	0.5	淡褐色	上	外に彫目	
25-6	甕	—	2.7	1.7	淡褐色	中	内にハケ目	
25-7	壺	—	1.1	0.6	淡灰色	上	ロクロ	糸切り
25-8	壺蓋	15.6	3.1	0.6	(蓋)淡褐色 (蓋)青灰色	上		
25-9	壺	13.2	4.3	0.5	灰白色	中	ロクロ(?)	糸切り
25-10	壺	12.7	3.8	0.4	赤褐色	上	ロクロ	糸切り 地土中に小豆大の石含む
25-11	壺	12.4	3.4	0.4	青灰色	上	ロクロ	糸切り
25-12	壺	13.0	3.5	0.5	青灰色	上	ロクロ	糸切り
25-13	壺	13.2	4.2	0.4	青灰色	上	ロクロ	高台付 地土中に砂利含む
25-14	壺	—	2.9	0.4	灰白色	上	ロクロ	高台付
25-15	壺	13.6	3.9	0.4	赤褐色	上	ロクロ	糸切り 内・外に暗文あり

表二 第2号住居址出土土器要目一覧表

図版 番号	器種	法量 cm		色調	焼成	整 形		備 考
		口径	器高			厚さ	主 体 部	
31-1	瓶	26.5	34.3	0.8	淡褐色	上	胴部ヘラの整形 口縁部ヨコナデ	輪づみ
31-2	甕	19.0	23.5	0.7	淡褐色	上	内・外にハケ目	
31-3	—	—	3.9	0.5	淡褐色	中	ハケ目	
31-4	—	—	9.1	0.6	赤褐色	中	腹方向のハケ目	
31-5	—	—	5.1	0.7	赤褐色	上	ヘラケズリ	
31-6	—	—	3.9	1.3	淡褐色	上		
31-7	甕	—	3.8	0.9	淡褐色	中		木製底
31-8	—	—	14.4	—	0.6	淡褐色	上	内・外にハケ目
31-9	—	—	—	—	5.3	0.7	淡褐色	上 内・外にハケ目
31-10	—	—	—	—	10.8	0.7	淡褐色	上 内・外にヘラの整形あり
31-11	浅鉢	—	—	7.5	1.1	赤褐色	中 内・外にハケ目	木製底

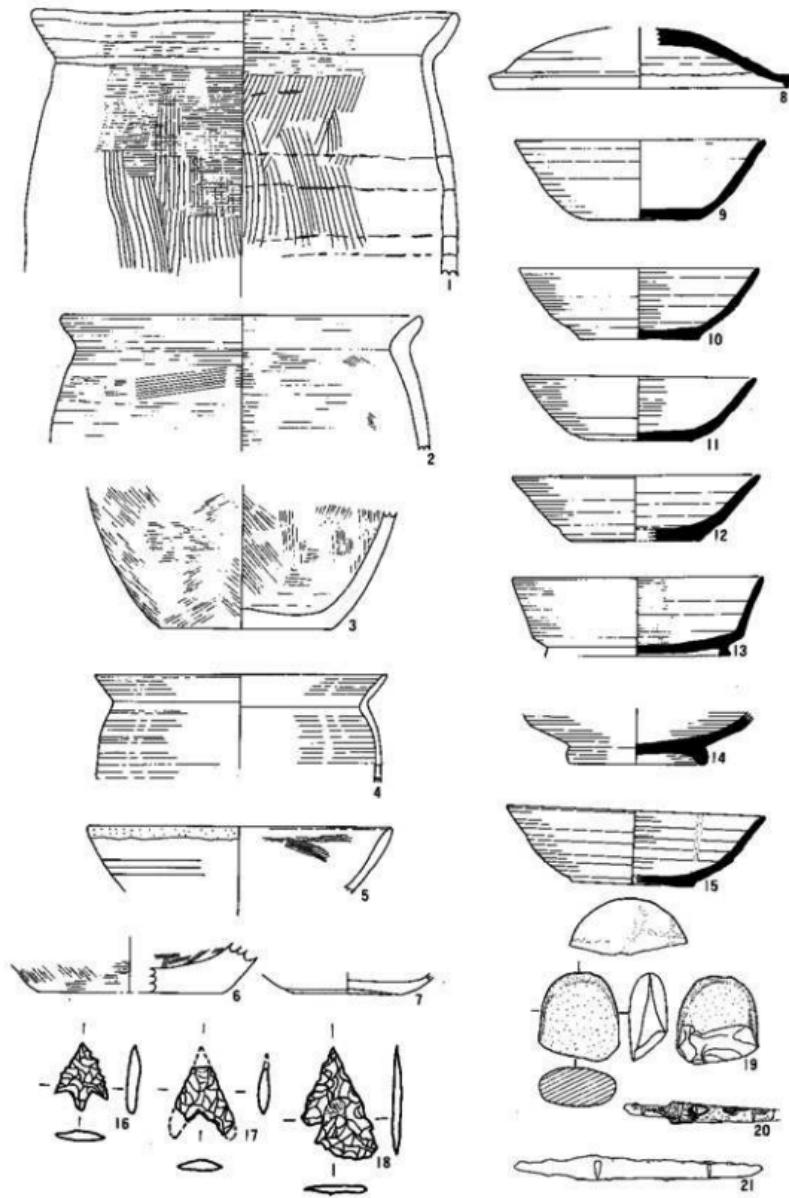


図25 第1号住居址出土遺物実測図

尺度 1~15・19~21は寸、16~18はミ

2. 第2号住居址

本住居址は、第1号住居址の西側、I-31、32、J-31、32グリット付近に位置する。基本層序II～III層でその存在が知られ、大体のプランが確認された。堅穴の埋没土は、第9図の地層断面図をみると北側からの流れ込みがや、多いが、これは北東が高い南西が低い地形の影響をうけたためと思われる。確認面からの壁高は全体的に低く、立ち上がりもゆるやかである。また南壁は、黒土層中に設けられていたためグリットを掘る段階で多少掘りすぎ、はっきりとは確認できなか

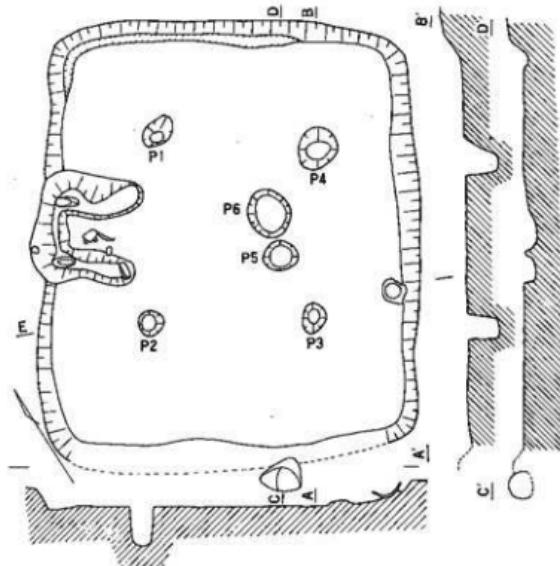


図26 第2号住居址遺構図

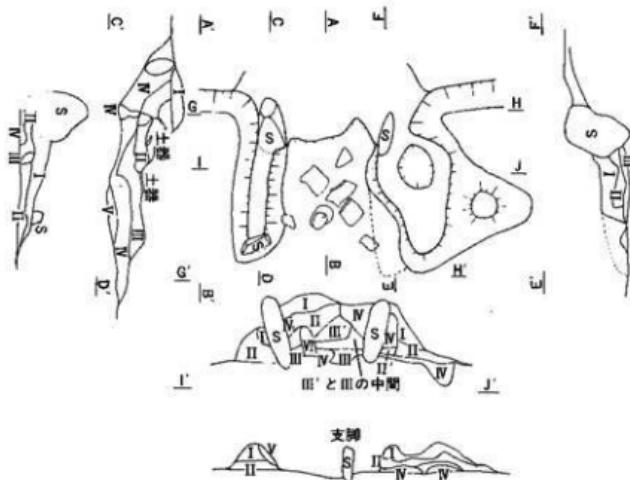


図27 第2号住居址カマド実測図

層序説明

- 第Ⅰ層 [黒褐色土層] 砂質性、IIよりも黒い。
第Ⅱ層 [黒褐色土層] 砂粒含む。木炭粒わずか含む。
第Ⅲ層 [褐色土層] 焼土ブロック、サラサラしている。
第Ⅳ層 [褐色土層] IIIよりも焼土化して赤味を帯びている。木炭混入、ハミス混入、サラサラしている。
第Ⅴ層 [赤色土層] 焼土、木炭混入

層序説明

- 第Ⅰ層 [褐色土層] ローム層、炭化物、焼土ブロックを含む。少し柔らかめである。
第Ⅱ層 [褐色土層] 炭化物、焼土ブロックを含む。非常に硬い。
第Ⅲ層 [褐色土層] 黒味を帯びている。

層序説明

- 第Ⅰ層 [褐色土層] ローム層、炭化物、焼土ブロックを含む。
第Ⅱ層 [褐色土層] 炭化物、焼土ブロックを含む。
第Ⅲ層 [褐色土層] 焼土のブロックを多く混入。
第Ⅳ層 [褐色土層] ローム層を多く含む。

層序説明

- 第Ⅰ層 [褐色土層] ローム層、炭化物、焼土ブロックを含む。
第Ⅱ層 [褐色土層] 炭化物、焼土ブロックを含む。
第Ⅳ層 [褐色土層] ローム層を多く含む。
第Ⅴ層 [焼土層]

層序説明

- 第Ⅰ層 [褐色土層] ローム層、炭化物、焼土ブロックを含む。
第Ⅱ層 [褐色土層]
第Ⅲ層 [褐色土層] 茶色味が強い。
第Ⅳ層 [褐色土層] 黒味を帯びている。
第Ⅴ層 [褐色土層] 少しババサバサしている。

った。II、III層を掘る過程では、東壁付近とカマド付近にや、遺物が集中する傾向があり、床面よりや、上では、カマド付近に土師器の大破片が集中し、接合資料も多い。

住居址の壁穴部分は、東西約4.0m、南北約5.8mの隅丸長方形で、北壁から西壁の隅にかけて、深さ5cm前後の周溝がある。竪穴内からは、大小6つのピットがみつかっているが(図26)、このうちP₁、P₂、P₄は、いずれも深さが40cm前後、またP₅は30cmと深く、配列も規則的であることから主柱穴であると思われる。第1号住居址には、北西と北東の各コーナーの壁際に、多くの遺物が出土した2つの土括があり、第3号住居址にも、東壁のカマドの両脇に多くの遺物の出土を見る土括があるが、本住居址にはそれらに対応する施設は認められない。竪穴中央や、東寄りには、

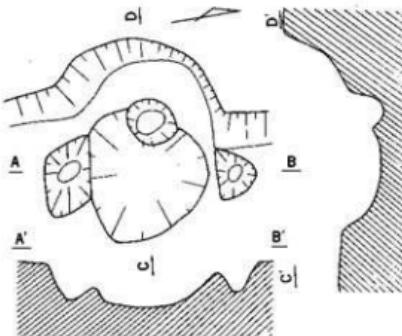


図26 第2号住居址カマド基部実測図

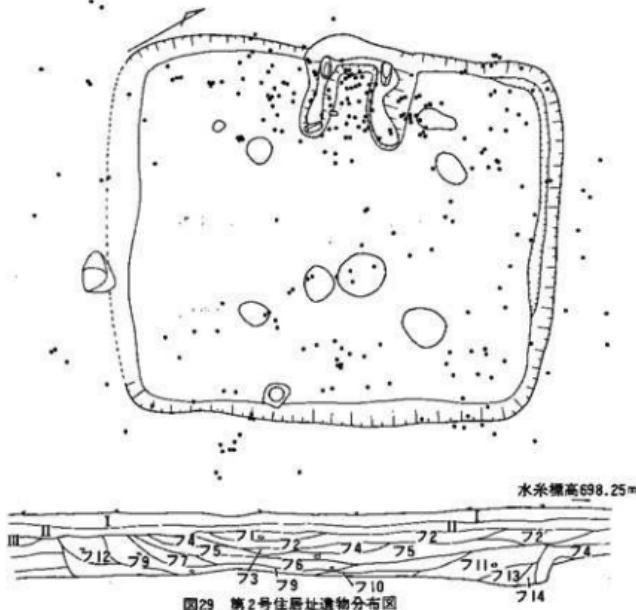


図29 第2号住居址遺物分布図

層序説明

- 第Ⅰ層〔耕作土層〕やや硬い。
- 第Ⅱ層〔褐色土層〕やや硬い。小さな炭化物を含む。
 - フ-1〔黄褐色土層〕フ-2とフ-3の間の色。
 - フ-2〔黄褐色土層〕やや柔らかい。
 - フ-3〔黄褐色土層〕フ-2よりやや黒味をおびている。フ-2より柔らかい。
 - フ-4〔黑褐色土層〕やや硬い。
 - フ-5〔黑褐色土層〕フ-4よりやや明るい。やや柔らかく微量の焼土を含む。
 - フ-6〔黑土層〕フ-7より明るい。やや柔らかい。
 - フ-7〔黑土層〕やや柔らかい。
 - フ-8〔褐色土層〕やや暗い。微量の焼土を含む。
 - フ-9〔黑褐色土層〕硬い。微量の炭化物を含む。
 - フ-10〔黑褐色土層〕フ-9より黒味をおびている。柔らかく、微量のロームブロックを含む。
 - フ-11〔黄褐色土層〕フ-2より黒味をおびている。やや硬く、微量の焼土粒とロームブロックを含む。
 - フ-12〔黑褐色土層〕フ-9より明るい。やや柔らかい。
 - フ-13〔褐色土層〕IIより黒い。やや柔らかく、炭化物を含む。
 - フ-14〔黑褐色土層〕やや硬く、ロームを混入する。

深さ10数cmのP_s、P_eがある。大きさの割に浅いことから柱穴とは性格を異にするものと思われるが、その機能は明らかでない。南壁中央や、東寄りの竪穴外にはや、大きい石があるが、本住居址との関連は明らかでない。東壁の南寄りの所からは、図31-11の大型の壺と思われる土器の底

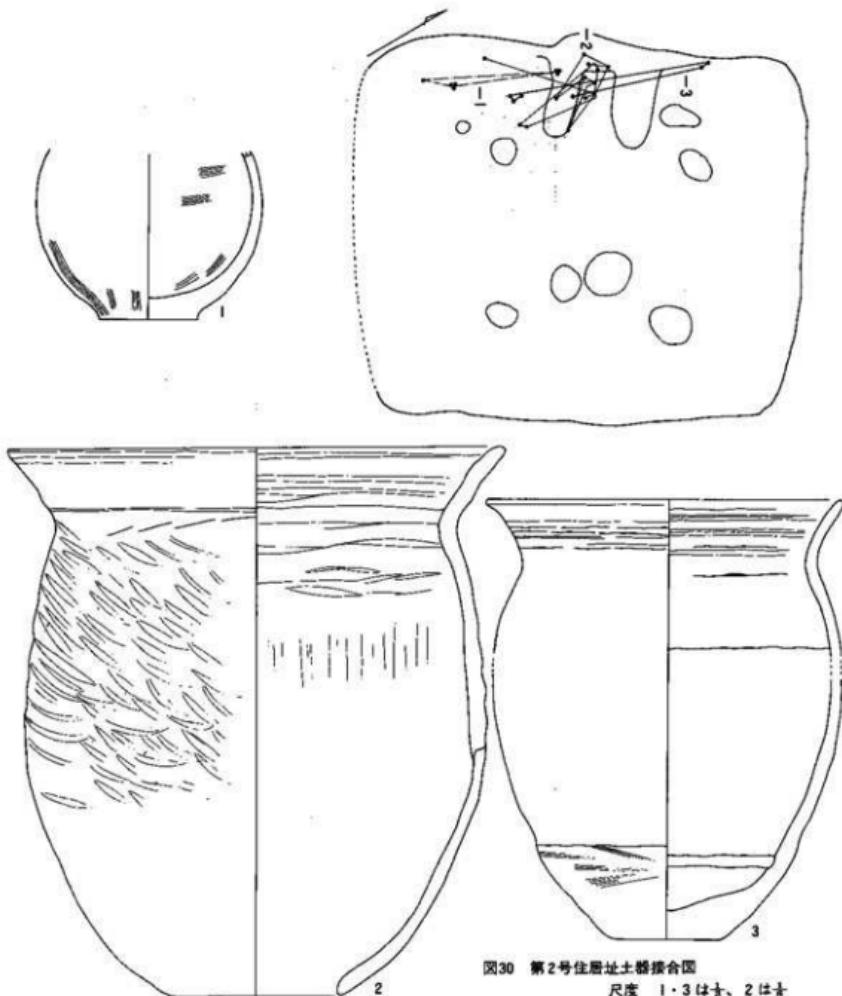


図30 第2号住居址土器接合図
尺度 1・3は寸、2は市

部が出土している。この土器は、壁際に約30°傾斜して埋まっており、この傾斜の第1次埋没過程における流れ込みの状況を如実に示している。この事は、IIの土器が大型であるにもかかわらず周辺から接合する資料がみつからず、また磨滅の程度が他の土器に比して著しいことなどからもうなづける。

カマドは、西壁や、中央北寄りにあり、偏平な石を芯に用い、その回りを粘土でかためた謂ゆる石芯窯である。プラン確認の際若干掘りすぎたため、煙道がはっきりせず、また右袖部が多少壊れているが、その他は比較的良好な遺存状態であった。土層断面をみると、天井部が焚口部・

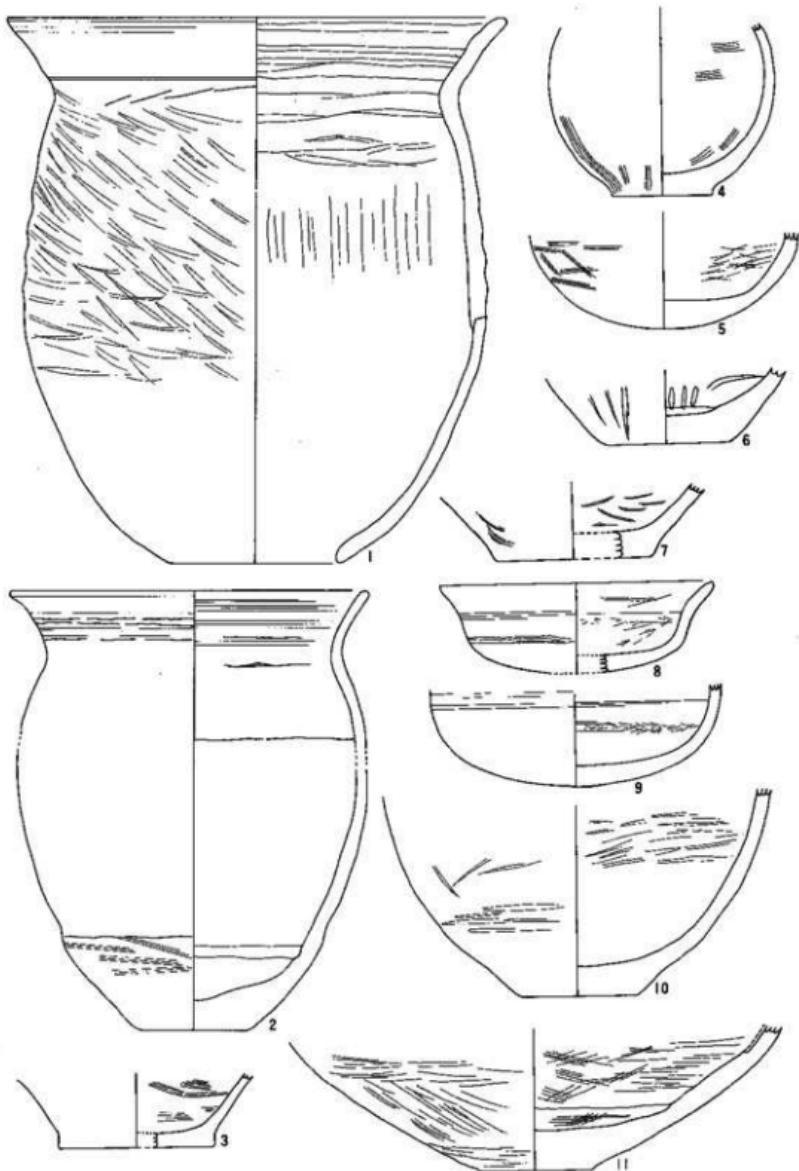


图31 第2号住居址土器実測図

火床部に落ち込み崩壊した状態
がうかがえる。カマド内出土遺物は、中央や、左寄りから図31
- 1の甕が、かなり集中して出
土している(図30)。火床部は若干掘り凹められており、焼土の
堆積が認められ、その中に木炭
が混入していた。火床の中央奥
や、右寄りには、支脚と思われ
る三角柱状の石が立っていた。
袖部の石芯及び支脚と思われる
石は、いずれもカマドの基部を
掘り込んで固定されていた。

本住居址から出土した土器は、
すべて土師器である(図31)。器
種は(図31-2、3、6、7、10)
の甕、(図31-4)の小形甕、(図
31-1)の壺、(図31-8、9)の
环、(図31-5)の椀、(図31-
11)の大型の壺がある。环・椀
はいずれも丸底であり、また甕
の底部も丸味を帯びているもの
が多い。第32図は、本住居址出
土の石器である。1は、カマド
の左側から出土した硬砂岩製の
石皿、3は砂岩製の磨石、4は
チャート製のスクレーパー、5
はチャート製の錐形鏃である。

これら4点の石器はいずれも欠
損しており、また錐形鏃などは
押型文土器との共存が知られていることから、周辺から流れ込んだ遺物であると考える。また2
については、第3号住居址から同様の石器が、多量に、特殊な出土状態で発見されているが、そ
の用途ははっきりせず、この欠損している単独出土の石器が、本住居址で生活していた人々によ
って使用されたものかどうかは明確でない。

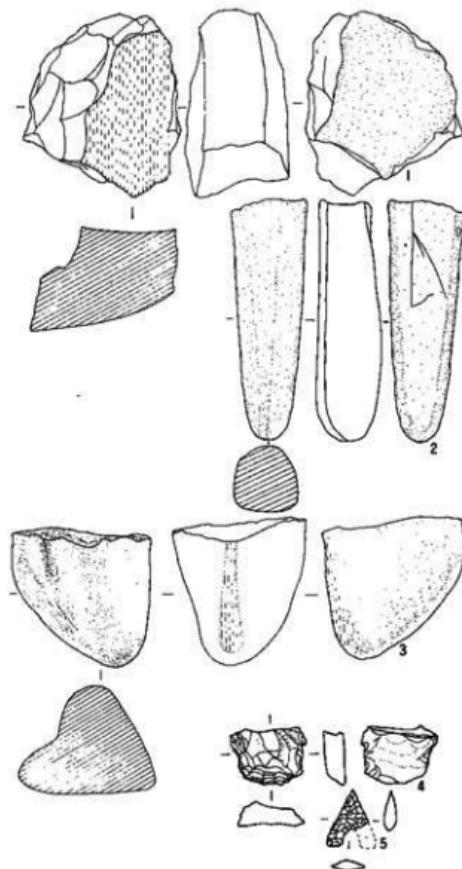


図32 第2号住居址石器実測図 尺度 1-3は昔、4・5は古

(小池幸夫)

3. 第3号住居址

本住居址は調査地区の最も北寄りのM-36、37グリットを中心に位置している。遺構は基本層序II層下において落込みが確認された。住居址の北側には小河川の浸蝕による深さ5mほどの谷ができるおり、その落込みの間近に位置している。当時はこの浸蝕谷はこれほどの深さはなかったと思う。調査区域全体の地形は東北の角が高く西南の角が低いという状態のため、第3号住居址の位置する付近は表土が自然の移動で浅くなっている。

住居址のプランは東西4.5m、南北3.7mの隅丸長方形で東壁のほぼ中央にカマドを設けている。カマドの左右には、不整円形の土括、P-1、P-2が見つかり、共にピットの中には多量の遺物が入っていた。P-1を掘り下げる途中において覆土に焼土が層になって入っており、その中には木材の炭化したものが多く含まれていた。この住居址はプランが部分的に確認される時点から、覆土中に多量の焼土と炭化物が見られた。これは生活の途中か、又は住居址の廃絶後かはわからないが、いずれにしても火を受けたものと考えられる。

図-34に示すように住居址内床面には、焼土が厚いところで10cm前後堆積しており、焼土に混入して、住居の骨組を形作っていた木材が炭化したと考えられる炭が多量に検出された。木炭を細部にわたり観察すると木目が住居址の東北の角に向っているものが多い。特にカマド左側には大きな炭化材が壁に寄りかかるようにして出土している。このようなところから、住居址が焼け落ちた時東壁に向って倒れたのではないかと想像した。又、焼土面はかなり硬くなっている、火を受けた後においても住居址面上において何らかの生活があったものと考えられる。住居址の西壁とその両角は、竪穴状遺構と交わっているためか不安定である。全体的にゆるやかな斜壁

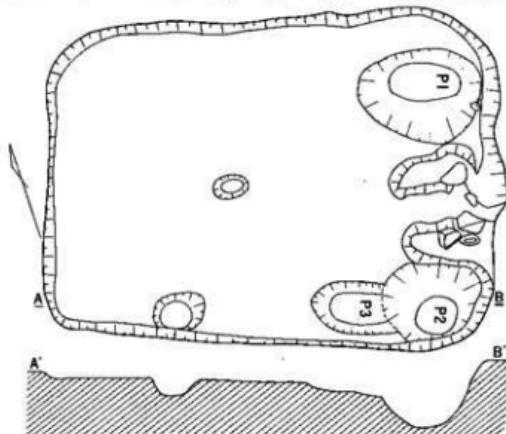


図33 第3号住居址遺構図

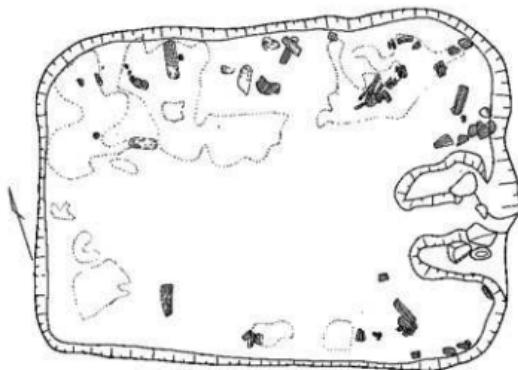


図34 第3号住居址焼土炭化物分布図

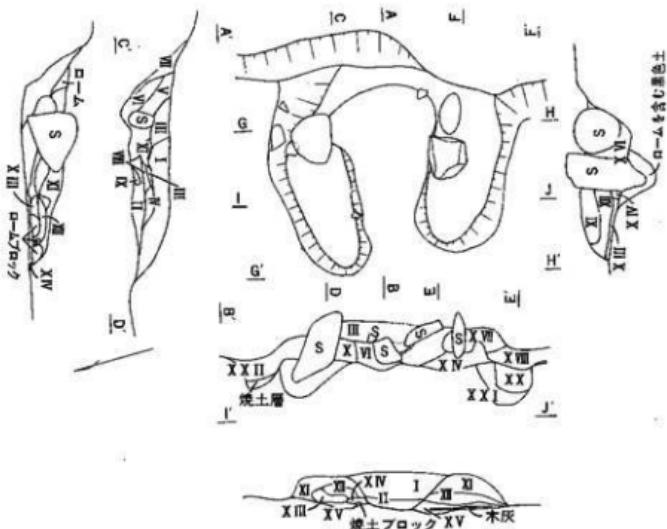


図35 第3号住居址カマド実測図

かまど CD, EF, IJ断面層序説明 (C'D', E'F', I'J'水系標高698.9m)

- 第Ⅰ層 〔褐色土層〕 焼土小粒、砂粒、木炭（小粒微量）混入。硬い。
- 第Ⅱ層 〔黒褐色土層〕 木炭大きめ混入。焼土。（極く少量）やや柔らかい。
- 第Ⅲ層 〔褐色土層〕 やや硬い。
- 第Ⅳ層 〔褐色土層〕 焼土Ⅲより多く含む。木炭・ロームわずかに含む。硬い。
- 第Ⅴ層 〔黒褐色土層〕 木炭含む。焼土わずかに混入。ロームブロックあり。やや柔らかい。
- 第Ⅵ層 〔茶褐色土層〕 焼土含む。木炭わずかに混じる。柔らかい。
- 第Ⅶ層 〔茶褐色土層〕 Ⅳより木炭多く含み黒味をおびる。焼土含む。柔らかい。
- 第Ⅷ層 〔黒土層〕 焼土がとんでいる。

かまど A, B断面層序説明 (A'B'水系標高698.9m)

- 第Ⅰ層 〔褐色土層〕 焼土小粒、砂粒、木炭（小粒微量）混入。硬い。
- 第Ⅱ層 〔黒褐色土層〕 木炭大きめ混入。焼土（極く少量）。やや柔らかい。
- 第Ⅲ層 〔黒褐色土層〕 焼土・木炭少量混入。やや硬い。
- 第Ⅳ層 〔褐色土層〕 やや硬い。
- 第Ⅴ層 〔黒褐色土層〕 焼土含む。ハサハサしている。
- 第Ⅵ層 〔褐色土層〕 焼土混入。ボロボロしている。
- 第Ⅶ層 〔黒褐色土層〕 硬い。砂粒混在。地殻か？
- 第Ⅷ層 〔褐色土層〕 焼土含む。（赤褐色。硬い。）
- 第Ⅸ層 〔焼土ブロック〕
- 第Ⅹ層 〔焼土層〕 ボロボロしている。

かまど G, H断面層序説明 (G'H'水系標高698.9m)

- 第Ⅺ層 〔褐色土層〕 ローム・木炭わずかに混入。硬い。
- 第Ⅻ層 〔黒褐色土層〕 焼土・木炭わずかに混入。柔らかい。
- 第Ⅼ層 〔黒色土層〕 硬い。
- 第Ⅽ層 〔黒褐色土層〕 燃土多量、木炭わずかに混入。柔らかい。
- 第Ⅾ層 〔黒褐色土層〕 燃土少量、ハサハサしている。
- 第Ⅿ層 〔黑褐色土層〕 木炭含む。

で、壁高も東側で20~30cmとやや深いが、他は5~15cmと浅めである。住居址の床面上を精査したが主柱穴が確認されなかったことに疑問を残した。

遺物はI、II層及び覆土中にも多く、縄文土器（早期押型文土器）中期初頭土器、土師器甕、須恵器、打製石斧、石鏃、スクレイバーなどが出土している。遺物の集中したところは、カマド両側のピット内と、カマドの周囲である。図-37に示すようにP-1、P-2、から出土した破片が接合して一個体になったものもある。又、特徴的な出土遺物として、カマド左側のP-1の上に10個の棒状自然石が重なって出土している。以前の調査においても同様な報告がなされた遺跡もあり、そこでは「トイレットストーン」の名称がつけられている。同様な棒状自然石が西壁近くに3個出土した。住居址上の覆土や床面近くから押型文土器や、スクレイバー類の出土がかなりあったが、これは隣接した竪穴状遺構のものと考えたい。P-2の中には完形の環等多数の土師器片が焼土と共に入っている。

カマドは東壁や、右寄りに位置し、その軸線は住居址の軸線と少し方向がずれており、煙道部は、はっきりしない。カマド中央部のI、II層は上部が落ちたものと思えるが、全体的には良好な遺存状態であった。図-35に示す土層断面から観察すると全体的に焼土や木炭を含んでいるが、

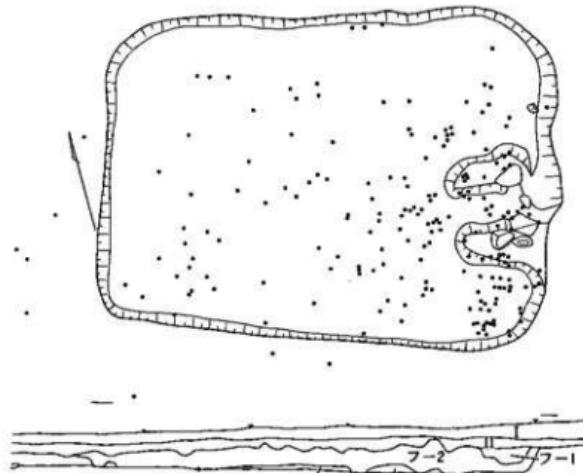


図36 第3号住居址遺物分布図

層序説明 第1層〔耕作土層〕比較的の硬い。

第2層〔黄褐色土層〕

フ-1層〔黄褐色土層〕第2層より質味が強い。炭化物を含む。

フ-2層〔黒褐色土層〕ところどころに褐色のブロックが飛んでいる。

フ-3層〔褐色土層〕焼土を含んでいる。

これは住居址が火を受けたことが影響しているのではないか。構造は両袖の中心位置に河原石を芯にして造っている。その芯石は床面下を掘り凹め石のまわりをロームまじりの褐色土で固めてあり、非常にしっかりした構造である。

火床部は掘り凹められており、火床内部は火熱で焼け赤化している。火床中央部には支脚と思われる角柱状の礫が立っており火熱を受けた状態がみられる。両袖の中心石の間隔は50cmになっており、この二つの石が器のきさえをしたものと考えるが、50cmという間隔は、第1、2号住居址においても、ほぼ同様であり、器を支脚でさえ、その両側をおさえる間隔として、50cmくらいが最も適当であったと思われる。（柴 登巳夫）

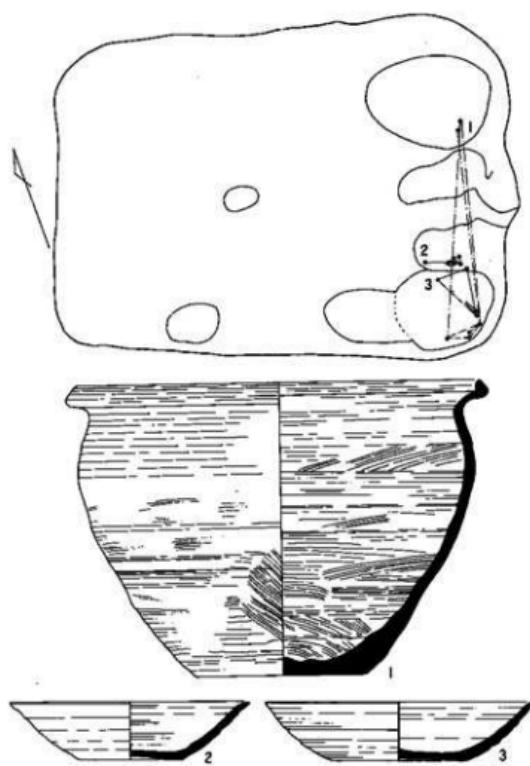


図37 第3号住居址土器接合図

表一三 第3号住居址出土土器要目一覧表

図版 番号	器種	法 量 cm	色 調	焼成	整 形		備 考
					主 体 部	底 部	
38-1	口径盤	21.4 15.7 0.6	灰白色	上	ロクロ	糸切り	
38-2	环	14.2 3.1 0.4	青灰色	上	ロクロ	糸切り	
38-3		13.6 3.6 0.5	淡褐色	上	ロクロ	糸切り	
38-4	环	13.5 4.0 0.5	灰白色	中	ロクロ	糸切り	
38-5	环	12.6 3.1 0.4	青灰色	上	ロクロ	糸切り	
38-6		— 5.9 0.8	淡灰色	上	ロクロ	高台付 内面底部に自然釉	
38-7	环	— 3.3 0.5	灰白色	上	ロクロ	高台付	
38-8		— 0.6	灰白色	上	ロクロ	糸切り	
38-9	小形甕	10.9 5.5 0.4	赤褐色	中	口縁ヨコナデ、外は椭目、内ヨコナデ		
38-10	小形甕	13.6 11.5 0.9	淡褐色	上	表面、内面とも口辺部にヨコナデ		
38-11	甕	19.6 34.1 0.8	淡褐色	中	内・外にハケ目		
38-12	小形甕	12.7 11.6 0.4	赤褐色	中	外は椭目 口縁はヨコナデ		

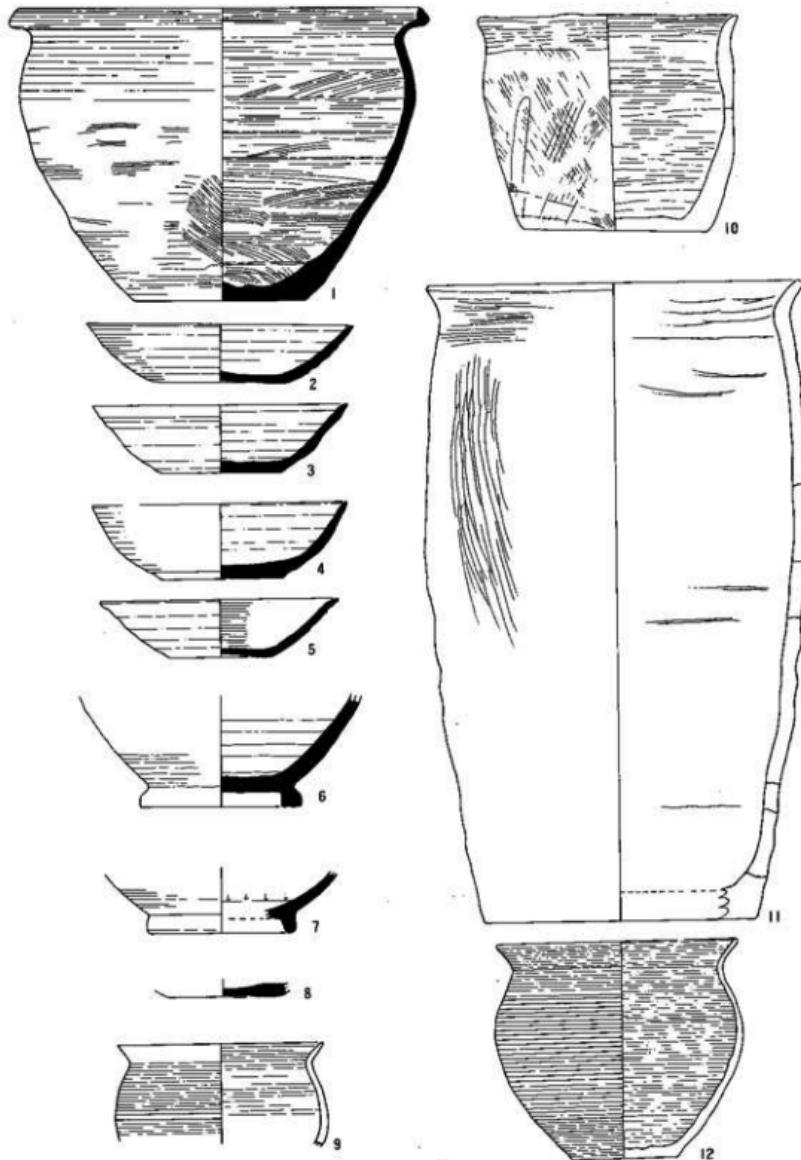


图38 第3号住居址土器实测图

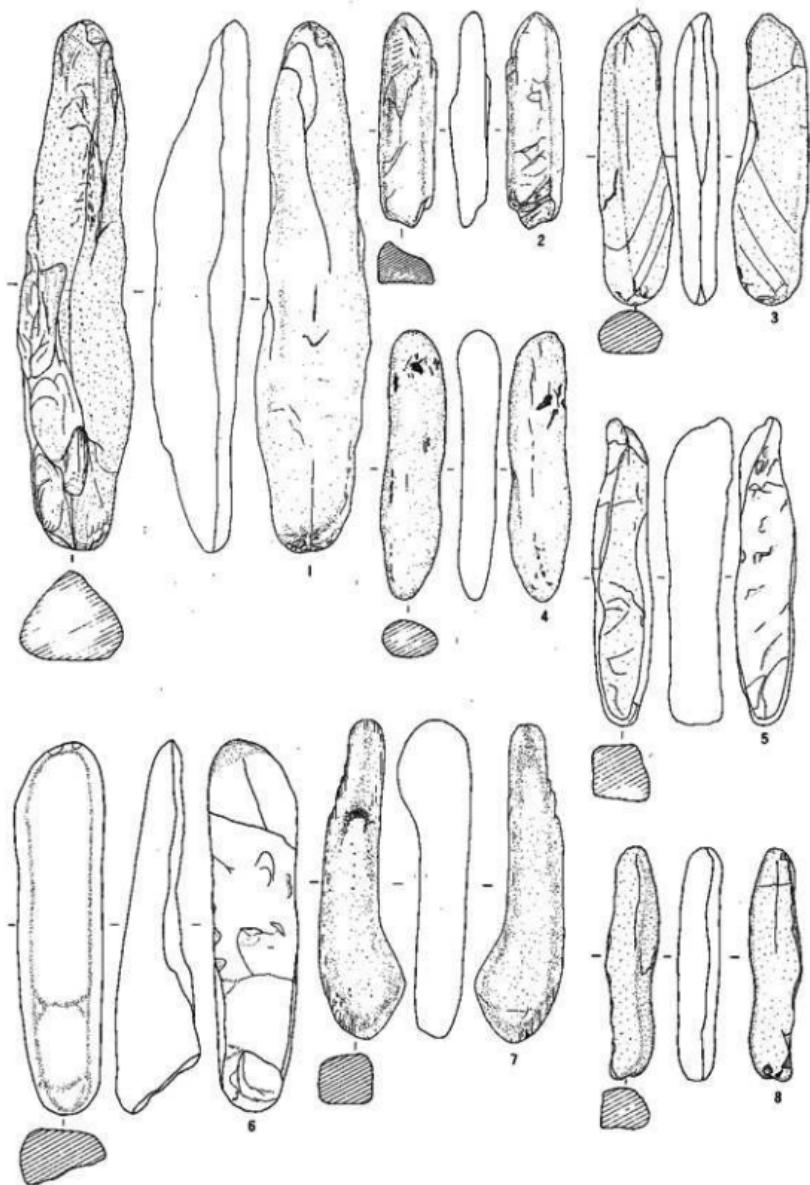


图39 第3号住居址石器实测图 I

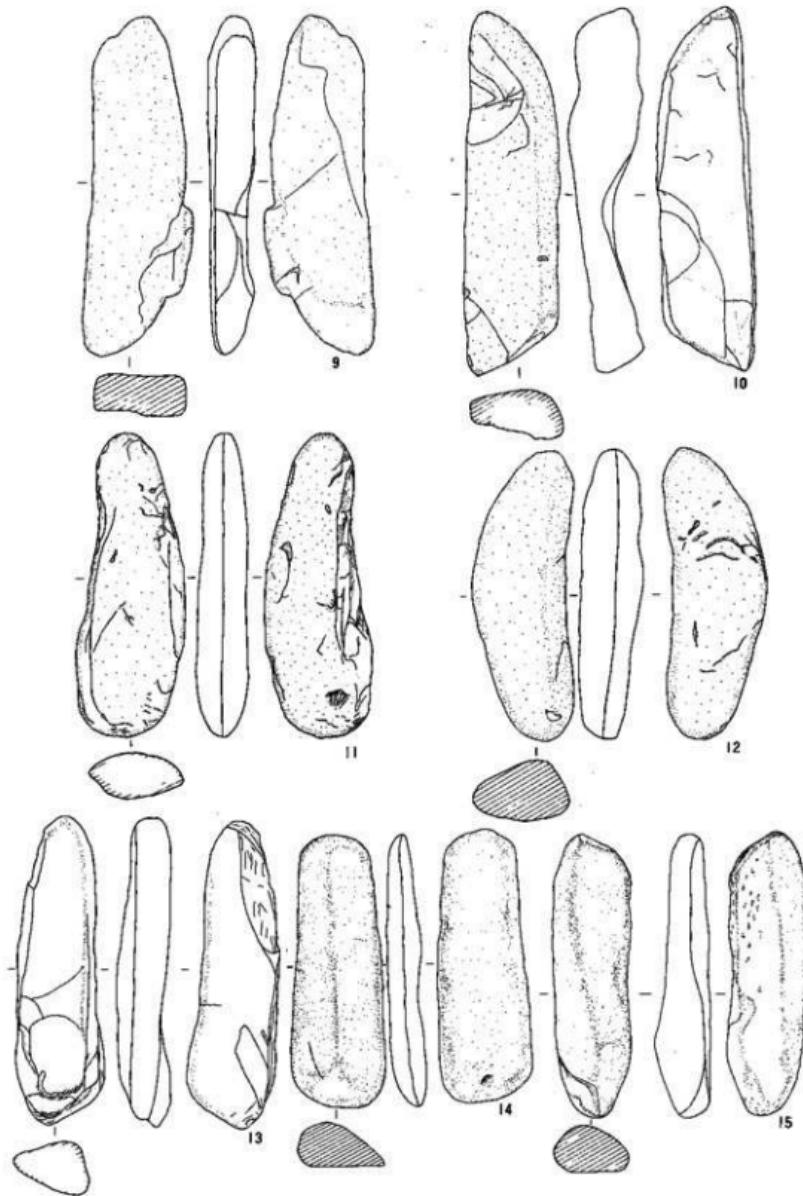


图40 第3号住居址石器实测图 II

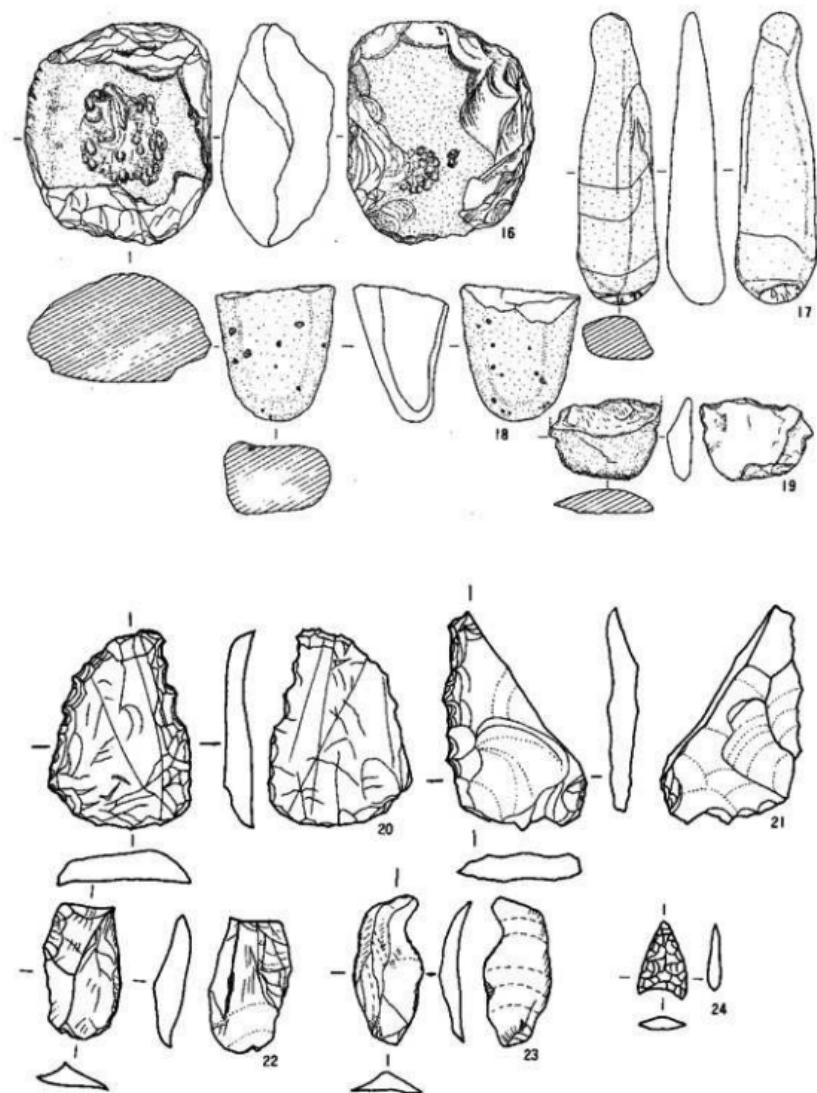


図41 第3号住居址石器実測図

尺度 16~19は $\frac{1}{2}$ 、20~24は $\frac{1}{4}$

第4節 その他の造構と出土遺物

1. ピット群と出土遺物

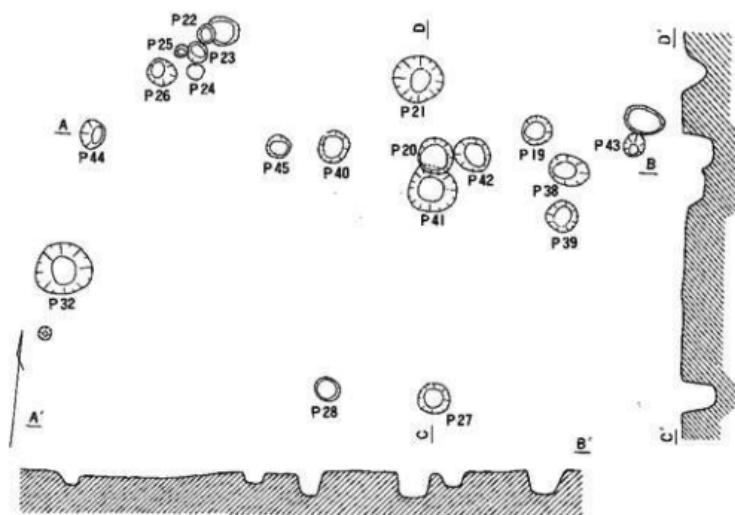


図42 ピット群遺構図



層序説明

- I 耕土。
- II 暗色土で硬く砂質である。
- III やや黒味を帯びた褐色土、IIよりも軟らかく砂質である。
- IV 黒色土で硬く粘性である。
- V 墓赤褐色土で軟らかく粘性である。
- VI IIよりも黒味のある褐色土層。

調査区の東寄り中央部に約15グリッドの広さ一面にピットの集中区域が検出された。それぞれのピットは平均して径が30~40cmで深さは落込み確認面より20~40cmのものが多い。規則的な配列は認められないが、わずかにP44、P45、P40、P20、P38が一列に並んでいるくらいである。このピット列に対比するものが東側にあるかどうか確認することはできなかった。ピットの底は硬くたたいてあるものは無く柱穴とは考えられない。

遺物はピット中からというものはほとんどなかったが、ピットの落込み確認面からは土師器の細片や、縄文中期初頭の土器片、及び砂岩製の打製石斧が4点出土している。

2. 東南部の落込み造構

第1号住居址の東にピットと土括状の落込みが検出された。ピットは10個前後で、深さは平均1個15~25cmくらいである。規則的な配列は見当らない。土括状の落込みも10cm前後と浅く遺物もあまり出土していない。

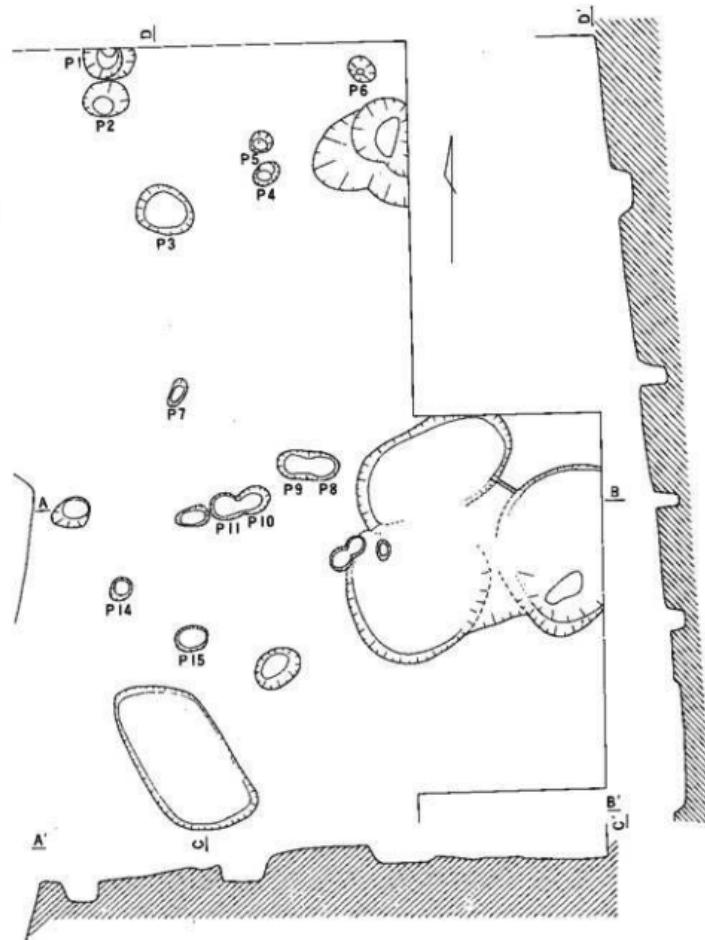


図43 東部落ち込み造構図

3. マウンド状遺構

第1号住居址南側に位置しているものであるが、プランは南北4m、東西3mほどで、中央部で約20cmの盛り上がりをした遺構である。南北に長い楕円形をなし、ロームを混じた、黒褐色土のマウンド状遺構である。ほぼ全周に巾20~40cmほどの凹みがめぐっており、遺物は確認されなかった。遺構を南北に切り断面を観察すると(図-44)のようになるが、各層が入り組み複雑になっている。全体的には砂質ロームを含んだものが多くなっている。

マウンド状遺構は最近調査される遺跡にはよく現われるが、それ等の多くは遺構の性質が不明な点が多い。本調査においても同様、不明な点ばかりで、プラン、時代など疑問点だけを残した遺構である。

(柴 登巳夫)

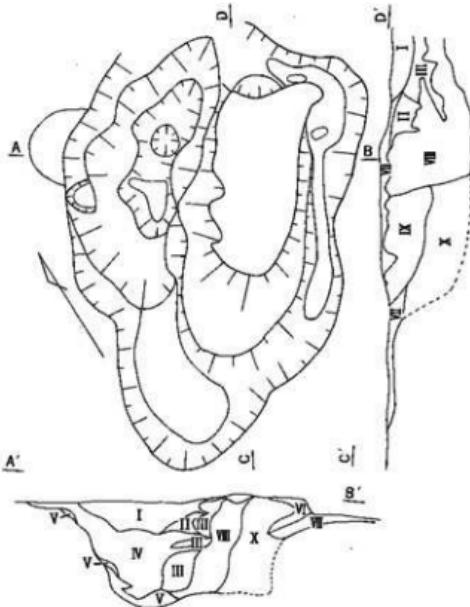


図44 マウンド状遺構実測図

層序説明

- 第Ⅰ層【黒褐色土層】硬い。バミス・砂粒混入。
- 第Ⅱ層【黒褐色土層】第Ⅰ層よりやや柔らかい。硬い。バミス含む。
- 第Ⅲ層【褐色土層】硬い。砂粒・バミス少量含む。
- 第Ⅳ層【黒色土層】硬い。バミス少量含む。砂粒混入。
- 第Ⅴ層【黒褐色土層】第Ⅰ層に近似。硬い。
- 第Ⅵ層【黒褐色土層】砂質ロームを含む。ザクザクしている。
- 第Ⅶ層【黒褐色土層】砂質ロームを含む。ザクザクしている。
- 第Ⅷ層【黄褐色土層】硬い。
- 第Ⅸ層 ロームと砂質ロームとの混合。ザクザクしている。
- 第Ⅹ層 砂質ローム、ザクザクしている。

遺構出土土器

第1群土器（第46・47図）

いわゆる回転押型文土器を一括し土器。文様の構成を中心に分類すると次の9類に分けられる。

A類 山形押型文（第46・47図）13・32・33・34・42・43・56・57・64・112はすべて非帶状施文、色調は赤褐色と黒褐色、器厚は5~6.5mm、胎土は石英粒・雲母を混じた精製土器が多い。山型文は鋭角が多く陽刻面と陰刻面は1対1の割合で施文されている。焼成は大方良好、そのうち46は波長が長い口縁部の破片である。46は陽刻が高く、山の尖端部が切れ一種の綾杉文とした方が適當かと思われるもの、これ等の土器は細久保式に見受けられる。57は波長の短い密接したもの。64は山形が横位と縱位に施文された土器。

B類 (46図) 本類は隋円文と山形文との組合せた土器。40は隋円文が左傾に施文され、その下部に尖端が切れた波長のや、長い山形文の土器。色調は赤褐色、厚さ7mm、胎土に石英粒と雲母が含まれる。111は、隋円文の下部に5mmの無文帯がおかれている山形文の波長の長い土器。

C類 (47図) 隋円文と撫糸文の組合せた土器。81は横位に施された非帶状の隋円文の下部に同じ横位の撫糸文が施文された土器。色調は赤褐色、厚さ9mmとや、厚手、胎土に石英粒と雲母を含む裏の荒れたあまり焼成の良くない土器。

D類 1は隋円文が縱方向に施された底部の破片。おそらく乳棒状の突起をもった砲弾形尖底土器と考えられる土器である。

E類 (46・47図) 本類は非帶状の隋円文の土器である。この類の土器は全体の三分の一を占める。2・4・5・6・7・9・10・15・16・17・18・19・20・21・22・23・24・27・28・31・37・38・39・44・45・47・48・49・51・53・54・55・59・61・65・67・68・70・71・72・80・82・83・84・87・88・90・92・95・98・99・100・101・103・104・106・110等の土器は横位的一般的隋円文である。色調は、黒褐色・赤褐色、厚さ5~7mm、胎土に石英粒・雲母を含む、焼成は良好。細久保式に比定される土器である。

F類 (46図) 8は甕形土器の口縁部、横位密接帶状文で下部が垂文帶の破片のため下部の文様不明の土器。色調は赤褐色、厚さ7mm、胎土に石英粒・雲母を含んでいる。諏訪の棚畠遺跡にこの

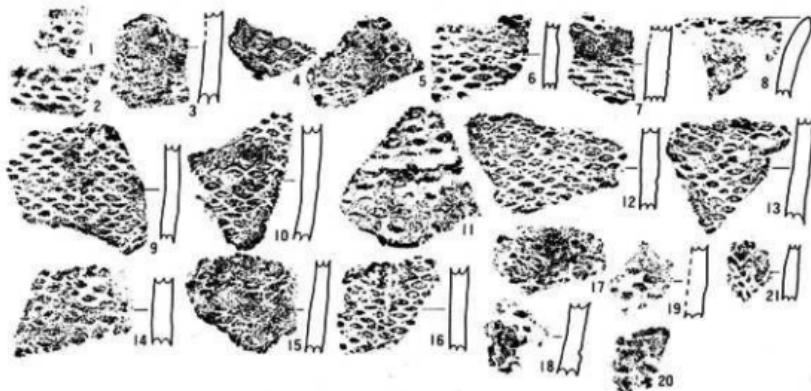


図45 第1号、2号、3号住吉土押型文土器拓影

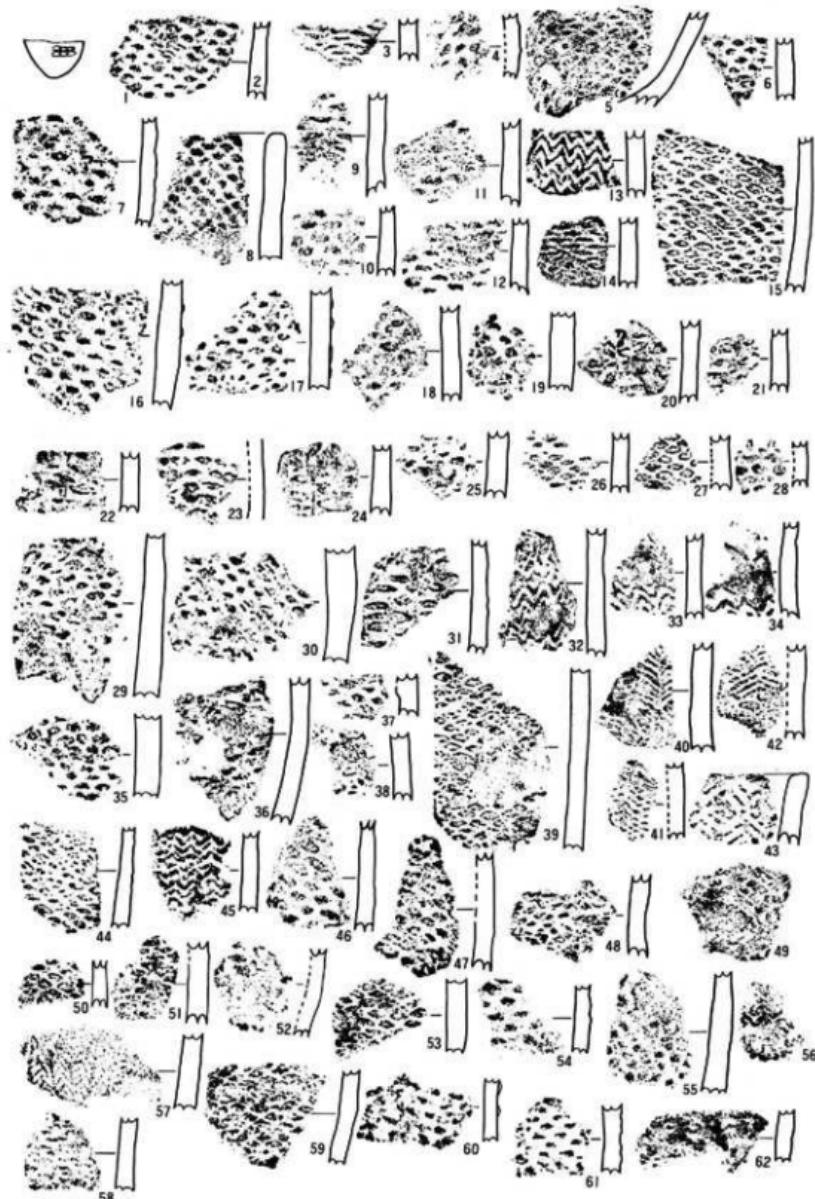


図46 遺構外出土土器拓影 I

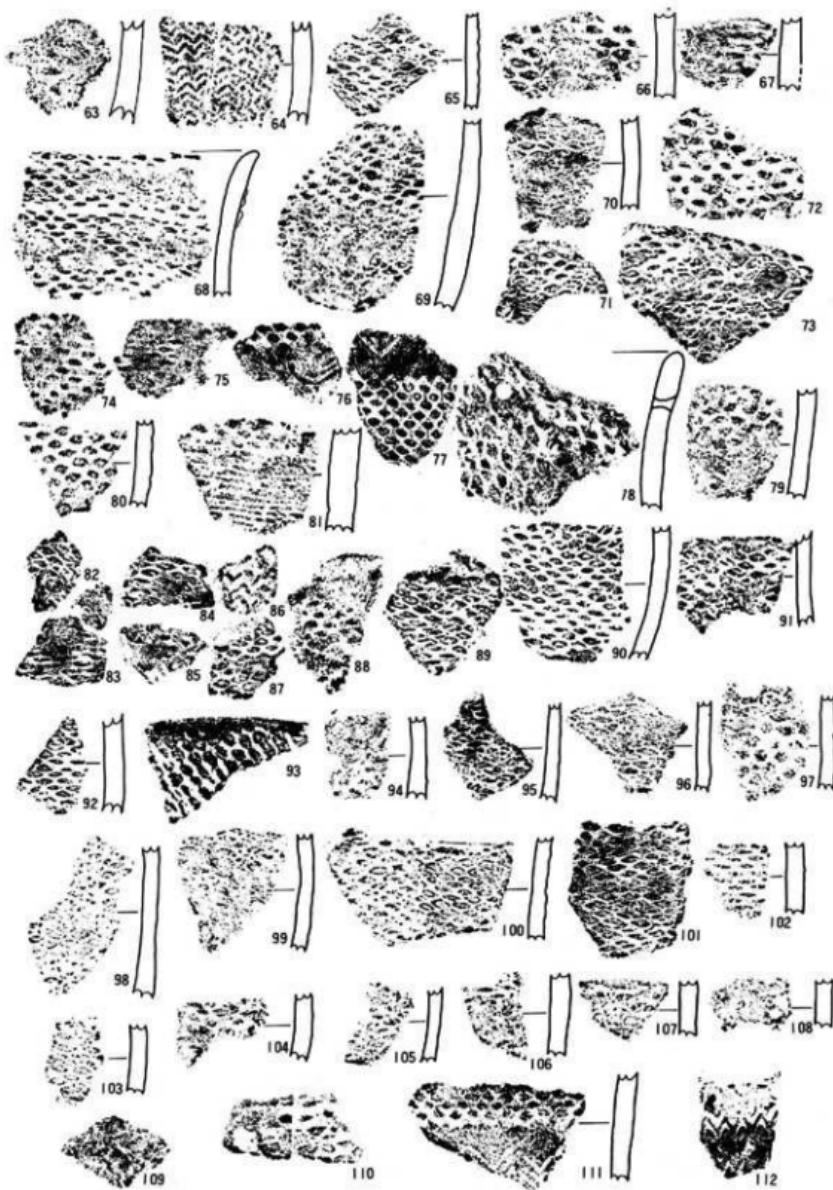


图47 遗址出土土器拓影II

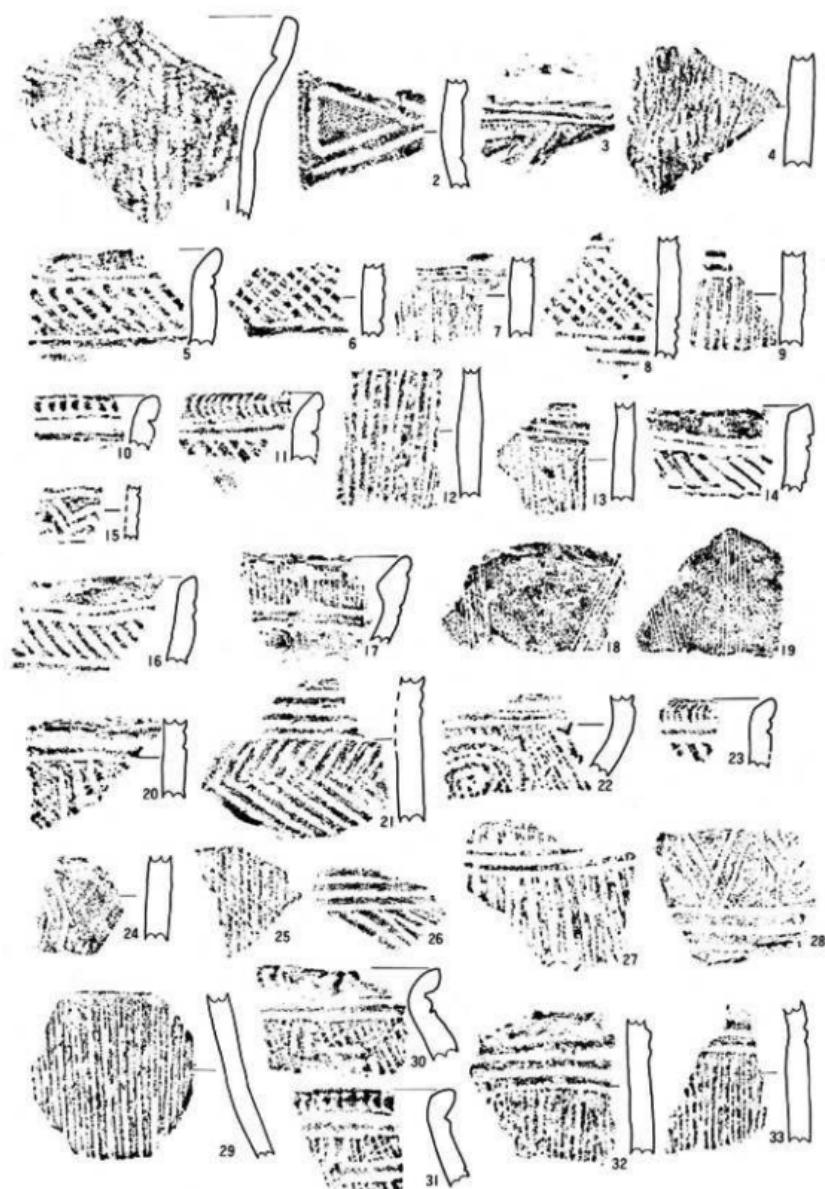


図48 グリット出土土器拓影 I

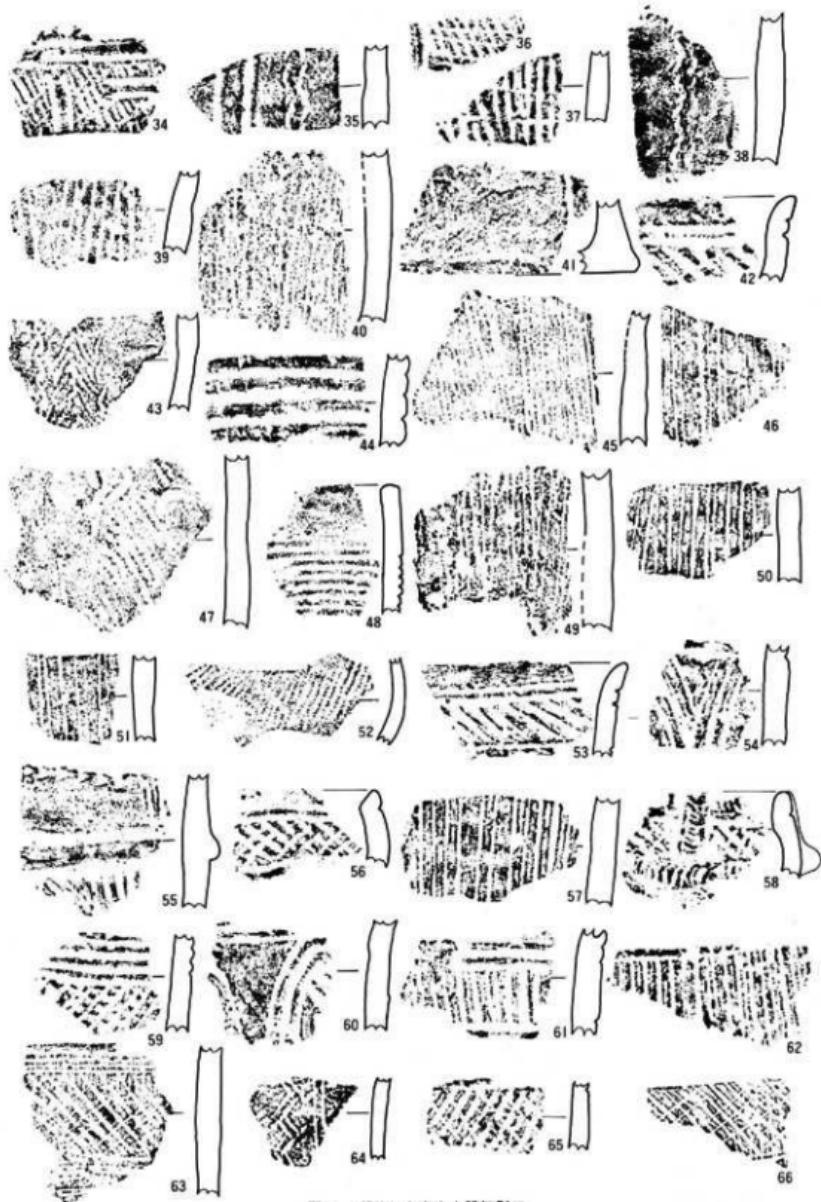


図49 グリット出土土器拓影II

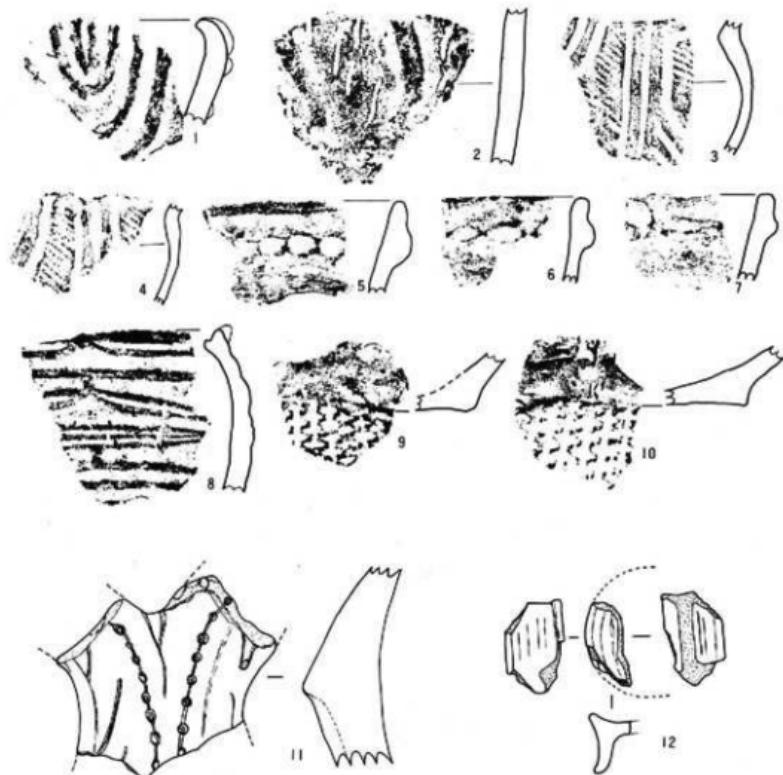


図50 グリット出土土器拓影III

類のものが見受けられる。

G類 (47図) 66・72は本遺跡出土のなかでは大形に属する階円文の土器である。厚さ6mm、胎土に石英粒と雲母を含む、焼成は良好である。

H類 (46・47図) 14・58・75・102・106の上器片、粒の巾が2mm前後で長さは8~9mmの細長い土器。厚さ5~7mm、胎土に石英粒と雲母を含む、焼成は良好。

I類 (46・47図) 3・36・62・73は、非帶状の不規則な階円文の土器。色調は赤褐色、厚さ6~7mm。

遺構出土土器

第一群土器 (45図)

1は、分類上ではH類に属する土器である。粒の巾が2~2.5mmの長さ7~8mmの粒の細長いもの、色調は赤褐色、裏面の荒れが甚しく器厚の推定は困難である。胎土に石英粒・雲母を含む。(1住) 2は、E類に属するもので、非帶状の階円文土器である。赤褐色、厚さ6mm、胎土に石英粒・雲母を含む。3は、E類に属する非帶状の階円文土器、赤褐色、胎土に石英粒・雲母を含む。(2住) 4は、E類に属するが階円が菱形状に見える土器、赤褐色、胎土に石英粒と雲母を含む。(2住) 5は、E

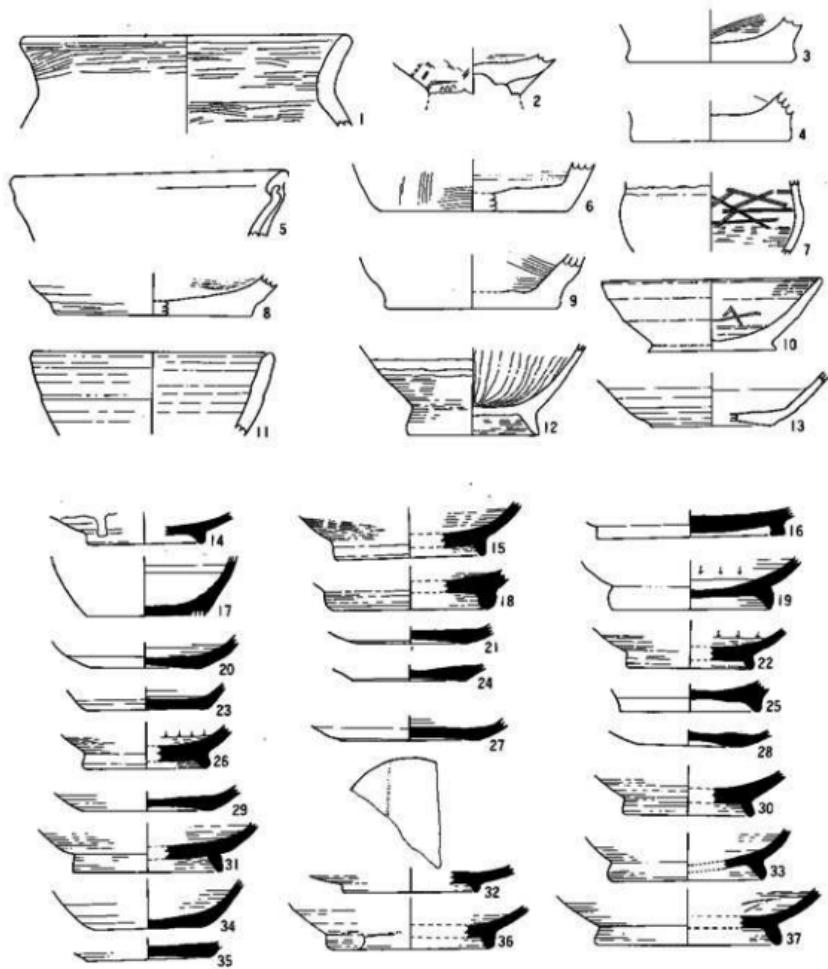


図51 グリット出土土器実測図

類に属する非帶状の土器。隋円の配列が一部不規則、赤褐色、厚さ6mm。(2住ベルト)6は、E類に属する一般的な非帶状隋円文土器。7は、隋円文の横位の帶状施文の土器と考えられるもの。8は、隋円文のE類の口縁部の土器。9は、E類に分類される一般的な土器である。10は、E類に属する非帶状の隋円文土器である。一部器面に磨滅した部分が窺われる。11は、H類に似たや、粒が細長い非帶状の隋円文土器である。12は、E類に属する非帶状の隋円文土器である。13は、E類に属する非帶状のや、粒が不規則の隋円文土器である。14は、12と同じ状態の土器。15は、非帶状の隋円文土器であるが、器面の荒で文様が不明確である。16は、9と同じ状態の土器片である。17は、

器面の荒が甚しく文様確認が困難の土器、18は、縦位の隋円文土器と考えられるが、器面の荒が甚だしく不明瞭の土器。19は、E類に属する非常状の隋円文土器。20は、隋円文の配列が不規則の土器。21は、山形密接の土器、小破片であるので詳細のことは不明。

第49図、50図における拓影65点のもののうち中期初頭のものが多く、それ等の土器でも半截竹管を用いて施したもののがほとんどで、48図の17は深鉢の口縁部で口縁に平行に半截竹管による隆起線で区画され、その内部は細かな沈線で埋めている。その上をチドリに刺突した烈点を配している。48図10・11・23のような口縁部に連続爪型文を施したもの5・6・8、49図56・65・66のように右傾、左傾の斜線の交錯による縞状の文様を表わしているもの、29・33のように縦方向の直線文様を主としたもの49図35・38のように撫糸を縦にこころがしたもの等がある。50図5・6・7は同一個体の土器と思われ、口縁部と平行して連続指圧痕を加えている。50図8は縄文時代晩期後半に比定される土器片で、口縁部に発達した工字文が施されている。上質の粘土で焼成は良く、しっかりした土器である。50図9・10は底部破片で、網代底になっている。11は中期土期の口縁部によく見る把手の一部で、直径4mmくらいの先の尖ったもので刺して連点文様を二列現わしている。胎土には大きな石英粒を多量に含み焼成はあまりよくない。12は滑車形耳飾の一部で全体の2割が残ったもので、直径は4.2cmの大きさである。上質の粘土で焼かれ、器面は黒ずんでおり丁寧に作られている。

グリッド出土の遺物（第51図版）

- 1は土師器、甕の口縁部破片。器壁7~8mm頸部から口縁部にはロクロによる整形痕がみられる。
- 肩部の器壁は荒れている。鬼高期から真間期に位置されるものであろう。2、土師器高杯の杯底部の破片。内黒磨、信濃では内黒磨の土師は真間期のごく初頭から岡分初めの頃迄で終る様である。
- 3は、土師器の底部である。4は、土師器の底部破片、アジロ底、5は、土師の鉢の口縁部破片である。6は、土師器の甕の底部破片、糸切痕が認められる。時期は真間期のものではなかろうか。
- 7は、土師器の碗、内黒磨、内は横ナデの整形痕がみえる。外部は蒐毛である。8は、土師の皿の底部、9は土師器の木葉底の破片。木葉底は真間期から出現するようである。10は土師器、平碗の破片、糸切底、器壁に太目のロクロ痕が目立つ、底部が口径に比して大きいのは岡分IIあたりか。
- 11は、土師器、器種は碗、口縁部の破片である。12は、土師の碗、付高台、糸切痕を箇で削ったあとが認められる。荒いロクロ痕が窺える。岡分の古い時期のものと考えられる。13は、須恵器の皿の底部、美濃須恵器窯のものに見られるもの。8~9世紀代と考えられる。14は灰釉皿の底部、高台は低く直立している。产地は美濃系。11世紀末と考えられる。15は灰釉の碗か、付高台で直立に近い。产地は美濃、時期は11と同じ頃。16は灰釉高台の皿ではないか。付高台11と15に類似している。17も同じ時期と推定される。18は、灰釉高台付の皿、高台はやや外方に張り出す。20・21は灰釉の皿である時期は折戸53期、美濃の産と考えられる。22は、灰釉の碗、高台はやや外方にふくらんでいる。美濃系、黒錆90号期と思われる。23、灰釉皿、直線上に開く皿で22と同年代であろう。24も23と同じもの。25は、灰釉碗の底部、高台は低いが直立している。26は、灰釉、高台付の碗、高台はや、外方に張り出している。黒錆90期から折戸35期にかけてのものと考えられる。27は、灰釉の皿、立ち上りが急のところ平安末と思われる。28、灰釉の皿の破片。29は、28と同じ時期のもの。30は、灰釉の皿の底部破片。高台はや、外方に張り出した形、美濃系。黒錆90号~折戸53期と考えている。31は、灰釉皿、焼がやや柔らかである。高台は直立に近く高い。時期は黒錆90号期と思われる。32は、灰釉の皿の底部破片、付高台で底くて直立している。32と同時期と見てよいであろう。33は、灰釉碗。この陶器も32と同じ時期と思われる。34は、灰釉の碗20と同時期のもの。35は、皿の底部23と同じ時期のものである。36は、灰釉碗の底部破片、31と同じ時期と思われる。37、灰釉皿、高台は高くやや外方に張った高台。30と同じ時期と考えられる。

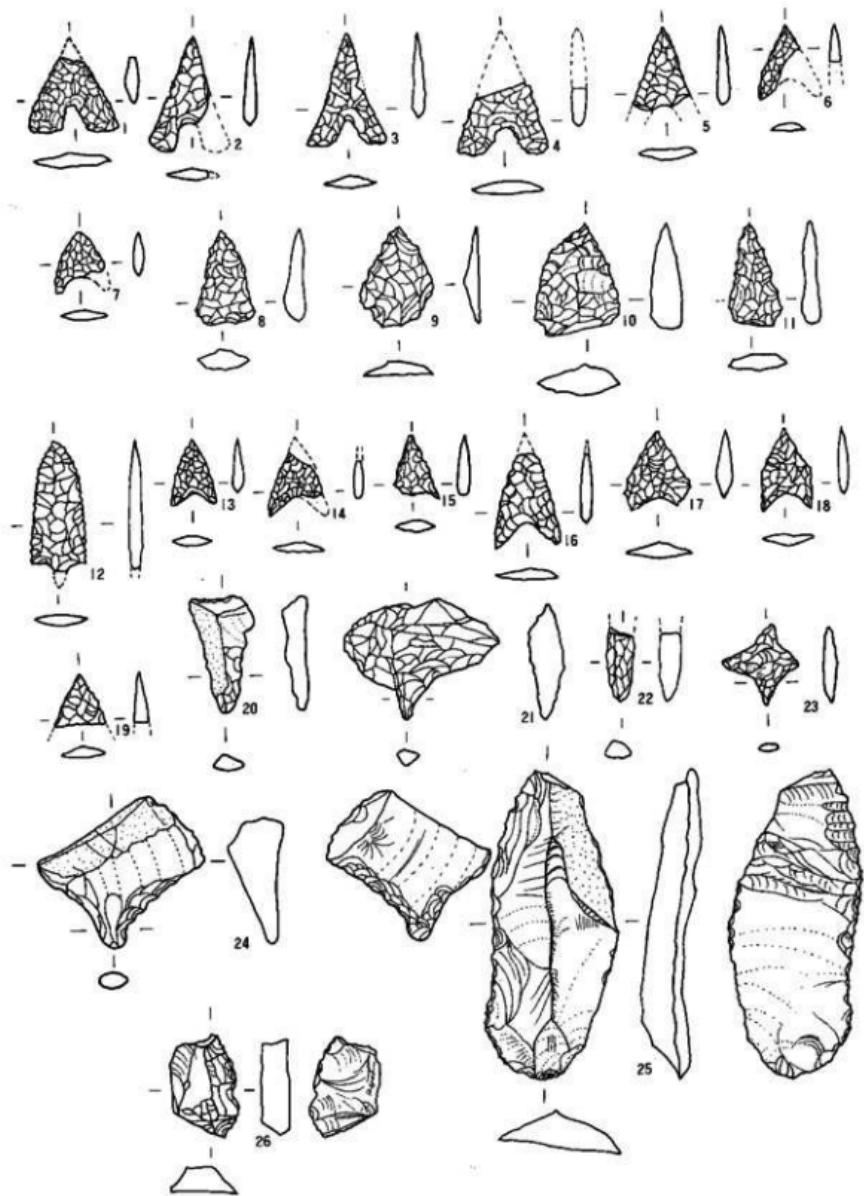


図52 グリット出土石器実測図1



図53 グリット出土石器実測図II

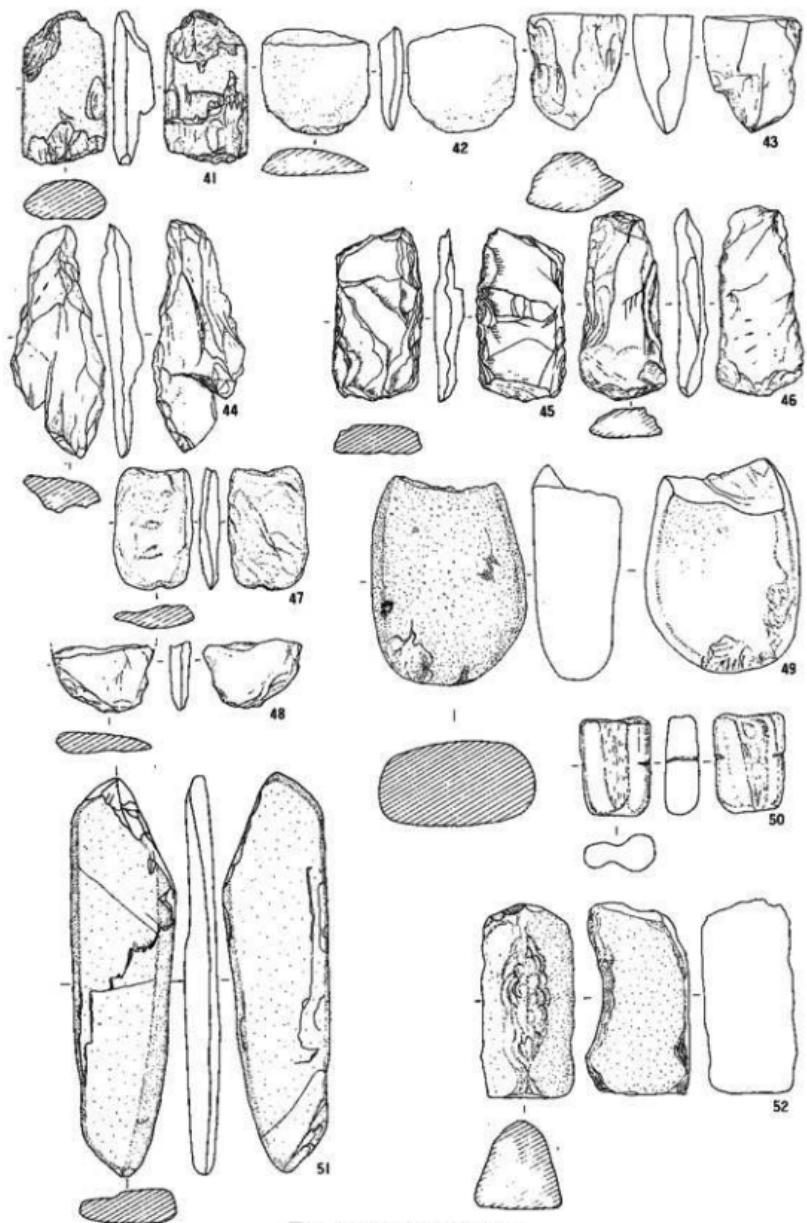


図54 グリット出土石器実測図

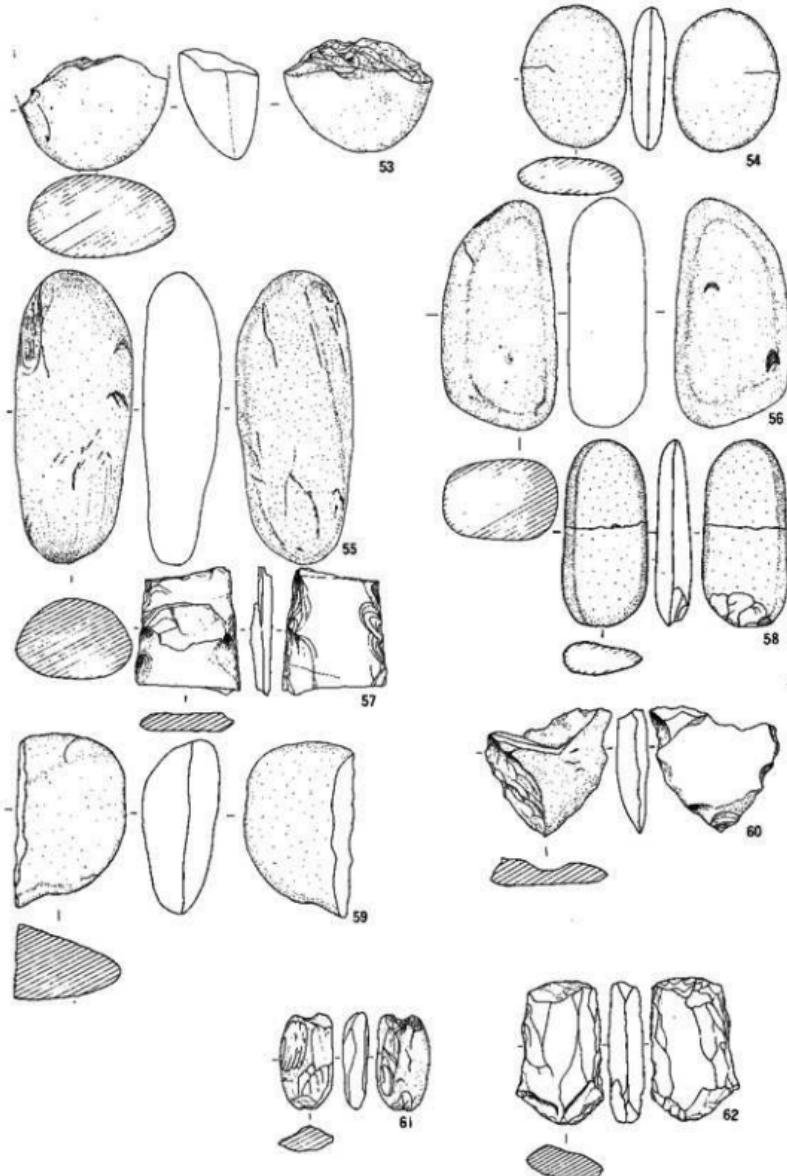


図55 グリット出土石器実測図 IV

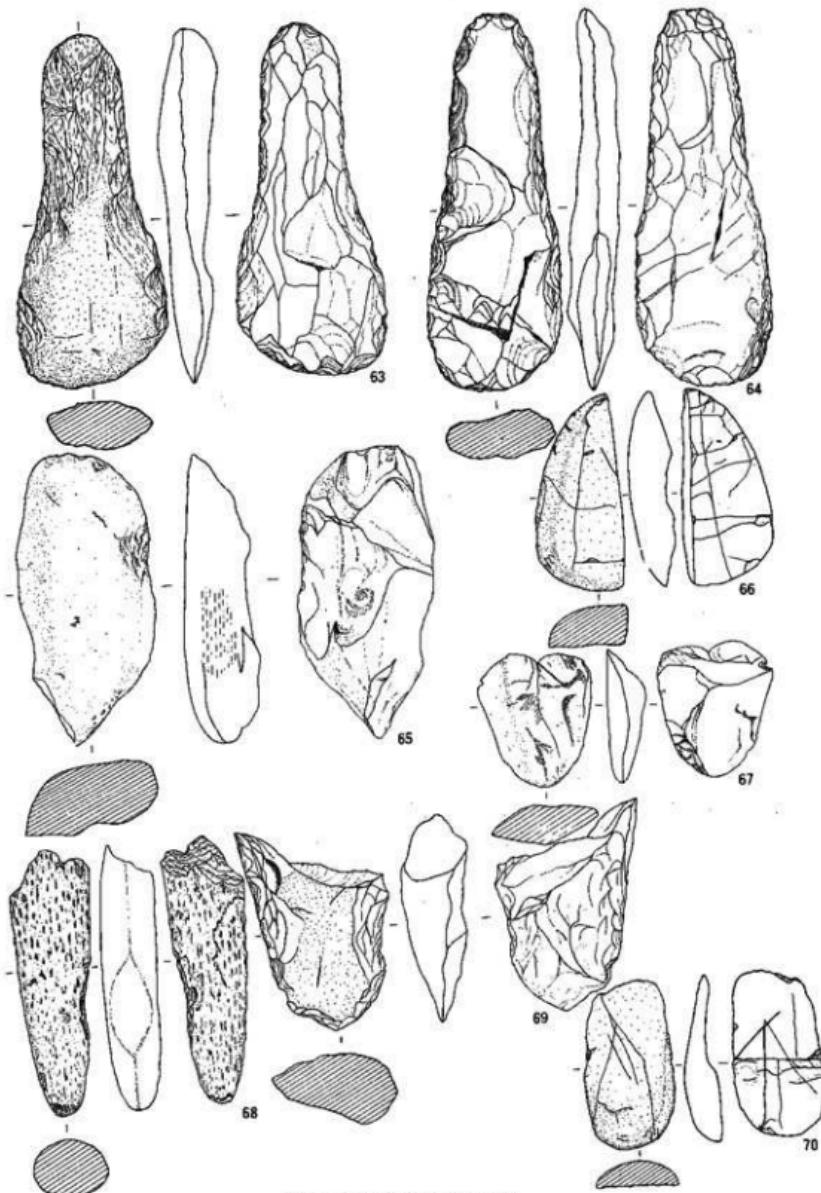


図56 グリット出土石器実測図V

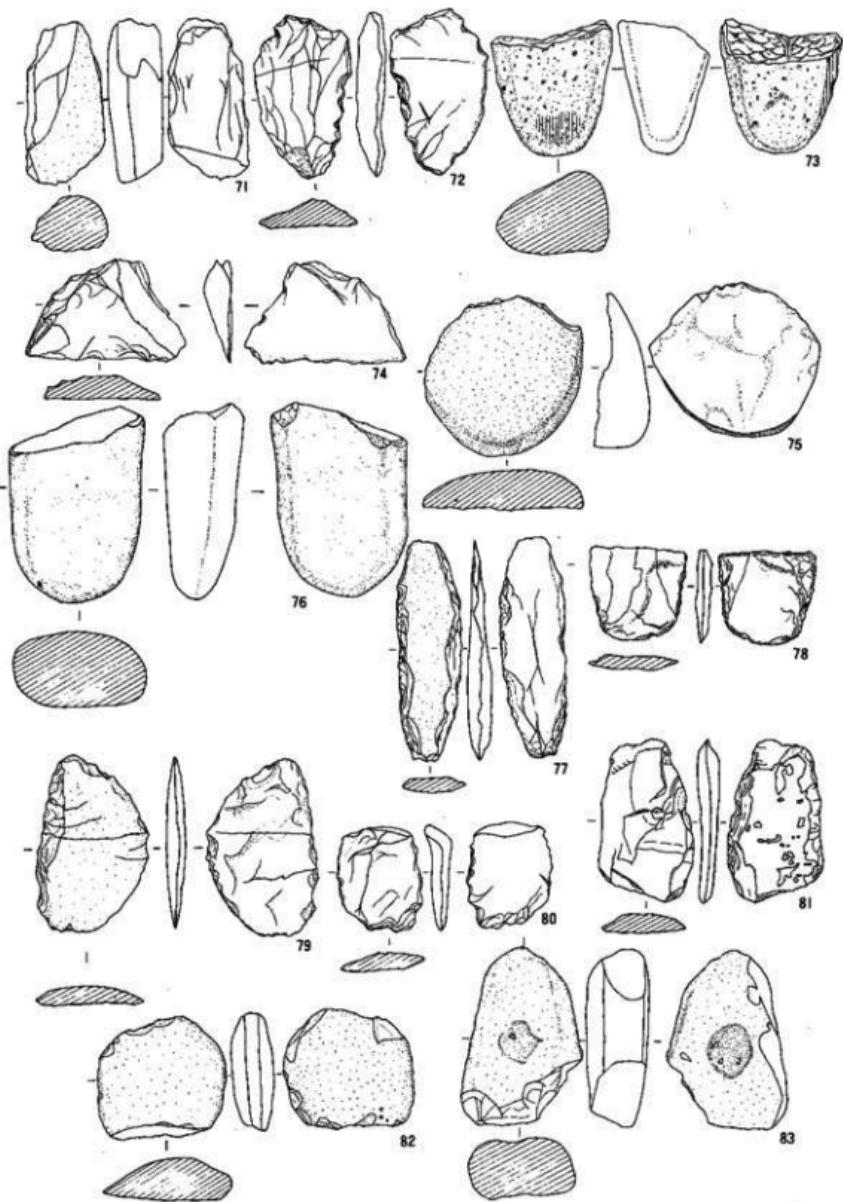


図57 グリット出土石器実測図VI

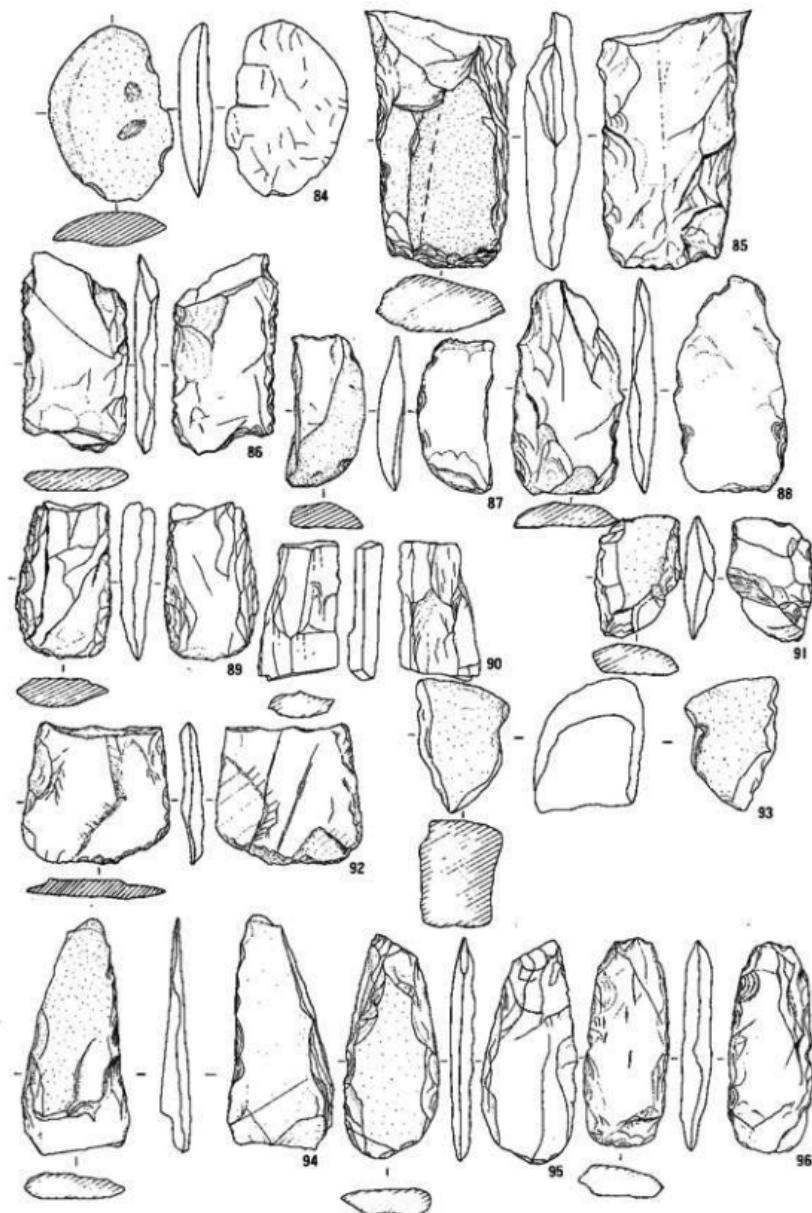


図58 グリット出土石器実測図VI



図59 グリット出土石器実測図版

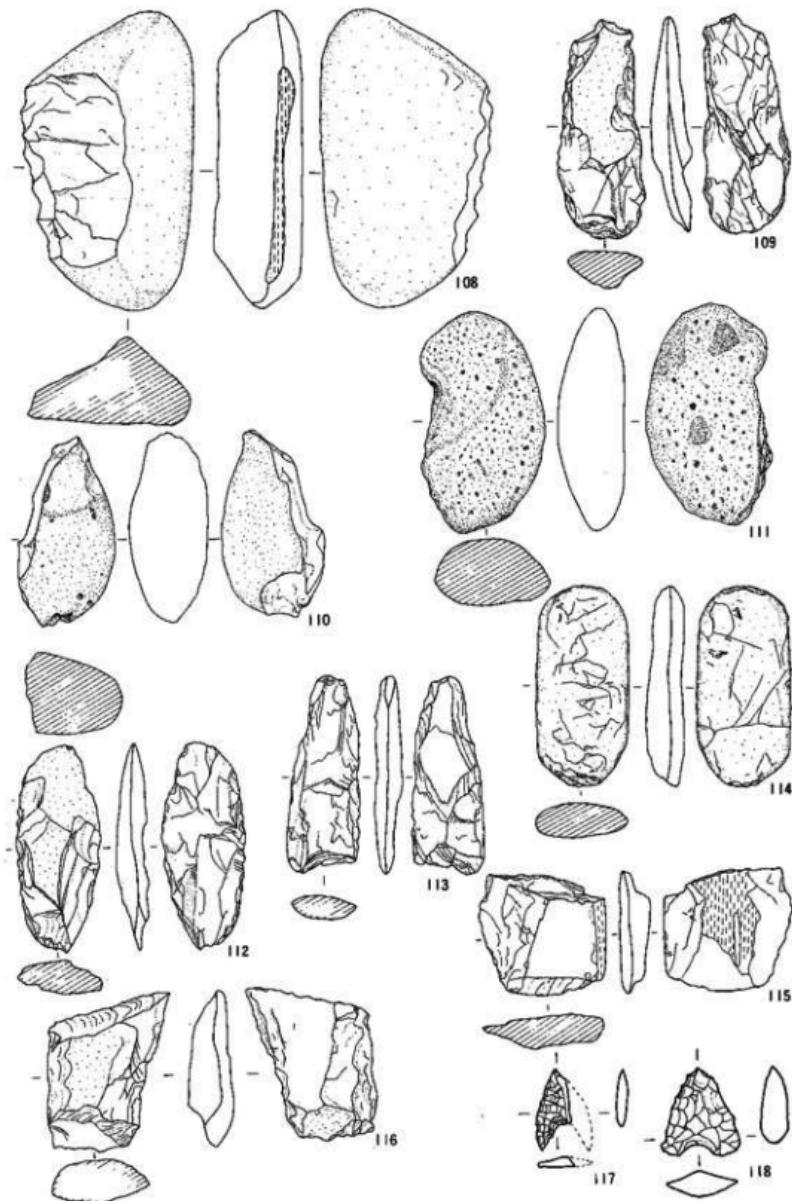


図60 グリット出土石器実測図Ⅱ 尺度 117・118は凸、他は平

4. その他の石器

本遺跡で石器として扱ったものは総数177点を数えた。その内訳は出土石器要目一覧表（66～69ページ）に各種別に分けて一覧できるようにしてある。全体を26類に分類し、それぞれに簡単な説明を加えてみた。

第1類（図32-5、図12-7、図52-1～5、図60-118）

8点のうち1点がほぼ完形であり、他はそれぞれ先端部・脚部を欠損している。形態的には全て基部に抉りがあり、抉りは全体として深く、逆「U」字形を示すのが特徴的である。両サイドが外側にやや彎曲しているものが多く、仕上げの剥離は丁寧に行なわれている。チャートを用いるものが殆どである。一般に「鍛形鎌」と呼ばれているもので、縄文時代早期の押型文土器と伴出することが知られている。

第2類（図25-17、図52-6・7、図60-117）

脚部が長く、抉りは深いのが特徴で、側縁は内側に彎曲しており、形は全体として流線形を呈している。丁寧な剥離によって仕上げられている。4点とも先端または脚部を欠いているが、大きさはそろっている。いずれも黒曜石製で、形態から「長脚鎌」と言われているものである。

第3類（図25-18、図19-6、図52-6～8）

6点がこの類に入り、そのうち2点は側縁部の長い二等辺三角形を呈している。遺構外出土のものが多く、平切してやや厚手に調整してある。1・2類に比較し調整は荒くなっている。形態が三角形をしているところから「三角鎌」と呼ばれている。

第4類（図25-16、図52-12）

有柄のもの2点をこの類とした。図52-12は全長3.2cmと長く、有舌尖頭器に近い形をしている。柄の部分を欠いているが、非常に整った形態である。調整は密で側縁はノコギリ歯状を呈し、これを使用した時の殺傷能力はかなりのものであったと想像できる。これが出土した周辺からは、後期の土器が多く出土しているが、この時期のものであろうか。一般的に「有柄鎌」とか「有脚鎌」と呼ばれている。

第5類（図41-24、図18-17、図19-59、図52-13～19）

石鋤の中で最も多く出土した部類であり、一般的な石鋤である。欠損品が7割であるが、先端を有するものみると尖鋭に作られている。側縁は直線に近いものと「く」の字状に曲がるものがある。脚部は平均して短く、抉り込みも浅くゆるやかな「U」字状を呈している。

第6類（図52-21～24）

出土した5点はそれぞれに特徴があり一定していない。形態的に珍しいのが（図52-23）で、小型であり、四週に刃部をついているかのごとく調整している。一種の糸巻状を呈している。

（図52-20・24）は先端部が摩滅し、使用が繰り返されたことを物語っている。これらは「ドリル」と呼ばれているものである。

スクレイパー

この群に入るものの15点を5類に細別した。出土地点にはかなりバラツキがあるが、竪穴状遺構周辺にやや多い。押型文土器と伴出する傾向が見られる。

第7類 (図41-21・22、図52-25)

この類に入る3点はサイドスクレイパーと呼ばれるもので、(図52-25)は最大長さ7.9cmと大きく最も一般的な形をしている。表面に一部自然礫面を残し、中央に陵線が走って断面三角形を呈している。両側縁を調整して刃部を形成したチャート製の優品である。

第8類 (図12-8、図52-26、図53-27-31)

サイドスクレイパーの類に入るが、調整を片側縁だけにしてあるものを区別した。計7点のうち、4点がチャートである。石器全体を整えることはしなくて片縁辺のみ小さな剝離で鋭い刃を形成している。ほとんどが縦長剝片の一側縁を利用している。

第9類 (図53-32・33)

調整剝離の位置が下部に集中しているもの。一般的に「エンドスクレイバー」と言われている。下部が主要作業部位で肥厚している。

第10類 (図41-20)

第3号住居址覆土中よりの出土で1点である。剝離を全縁に施し、形がややくずれた台形を呈している。作業部位は全周縁で、作業の種類により使用部位を変えたのであろう。調整は表側が主で、やや荒い。これは「ラウンドスクレイバー」と言われている。

第11類 (図32-4、図53-34)

第2号住居址覆土と、L-30グリットより各1点づつ出土している。下部と両サイドを調整している。表側からの剝離が主で、裏面は平らになっている。一般的に拇指状搔器といわれているものである。

第12類 (図41-23、図18-15、図53-35-37、図18-16)

フレイクの側縁に調整剝離の施されているものをまとめた。石器の形態は全くのフレイク状のものであるため一定せず、縦長のフレイクの側辺に刃部を設けている。この種の石器はよく観察しないと見落してしまうことがある。

第13類 コアー (図53-38)

M28グリットから出土したものである。良質の黒曜石を用いている。円筒形に近い形態をしており、周辺は5面より成り、繰り返しフレイクを剥ぎ取ったことをうかがうことができる。コアーの出土はめずらしく、本遺跡から1点のみである。

打製石斧

总数36点を数え、石器では最も多い類である。形状、大きさなどから5類に細別した。石質はほとんどが硬砂岩であり、その6割が欠損、破損品である。

第14-a類 (図19-2・4、図54-45・46、図55-62、図57-77、図58-89・91・94・96)

形態的には小型の石斧で、形は短剣型・撥型のものが主で、中には弯曲しているものもある。表面の一部に礫面を残すものが2・3あるが、ほとんどが全面を調整している。主要作業部位は先端にあるため、調整は細かに行なわれ、使用による磨耗痕がみられるものもある。

第14-b類 (図56-69、図58-85、図60-116)

厚手大型のものをこの類とした。表面にかなり多く礫面を残している。3点共に半分のところで欠損しているが、調整は荒く刃部には使用による剥落がみられる。(第14-a類)は磨耗痕のみ

られるものがあったが、厚手大型になると磨耗痕より打撃痕と思われるものが多い。大きさ、重さなどにより使用目的が分かれていたことが考えられる。

第14—c類（図54—48、図55—57、図57—78・81、図58—86・88・92、図12—2、図59—97・98、図60—115）

比較的小型で薄く、巾のあるものをこの類とする。薄い板状撥形のもので半分に折れているものが多く、使用時の欠損であろうか。器面に礫面を残しているものは少なく、製作には母石の、「芯」の部分を用いている。先端が著しく磨耗しているものがある。

第14—d類（図19—1、図54—63・65）

大型で鍔形状をしているもの3点を類別した。3点共に欠損部はなく、製作された時点の形態を保っている。1点は表面に自然礫面を残すが、他のものは母石の芯を使っている。「斧」というよりも「鍔」という感じが強く、やはり打製石器は土掘り器と見るのが妥当であろう。

第14—e類（図19—3、図54—44、図60—112）

特に調整された刃部をもたず、フレイクに近いものである。3点共に表面に礫面を有し、細かな調整はほとんどされていない。

第15類（図55—58、図60—114）

自然石の一端にわずかに刃部を形成しているもの。共に長楕円形を呈しており、石器面はなめらかである。作業目的が特殊なものであろうか。

第16類（図41—19、図54—42、図55—60、図56—67、図57—72・74・79・80）

砂岩製の小型フレイクにわずかに刃をつけているもの。形態は一定しておらず、表面に礫面を残すものが多い。刃部を側縁に施した横刃型石器の部類に入るものもある。これは打製石包丁的機能をもつ。

第17類 石皿（図32—1、図17—9）

石皿は2点確認され、いずれも住居址中である。第4号住居址出土のものは、石皿的形態がはっきり残っているが、第2号住居址のものは欠損部が多く形態推定は困難である。共に凹んだ表面は磨耗痕が認められる。

第18類 凹石（図16—5・6、図17—10、図55—56、図57—83・84）

6点認められたうち2点が第4号住居址からである。素材はバラエティーに富み一定しておらず、自然礫を利用したもの。フレイク的一面や磨石を使っているものなどがある。

両面に凹を有するものが4点、一面に2つ以上の凹をもつものが2点ある。

第19類（図54—41・43、図56—68、図57—71）

石器の一部分又は全面を磨いたり、擦り減らして形成したもの。いわゆる磨製石器の類である。4点出土したが、いずれも欠損しており、2点は棒状石器である。下端刃部を両面から研ぎ下げ蛤刃状をしたものが1点認められた。

第20類（図32—3、図41—18、図16—3・4・7、図12—6、図18—12、図17—11、図54—49、図56—65）

表面なめらかな自然石の一部分に擦った痕や、わずかに敲いた痕を残すもの（特殊磨製）という呼ばれ方をしている一群である。13点認められたが、石器にある痕は使用痕であり調整のものではない。はっきり擦った場合と敲いたと思われる痕であるが、それも強い敲き方とは思えな

い。素材の形態も一定していないが、断面三角形のものが目を引く。この種の石器の使用方法について今は研究しなければならないところである。

第21-a類（図55-53、図18-14、図12-4）

石の表裏を磨っているもので一般に「磨石」といわれている。器面全体的に使用された摩耗痕があり、下部が蛤刃状に近いものがある。

第21-b類（図12-1、図55-59、図56-66・70、図57-75・76、図58-93、図59-102・103・106・107、図60-110・111）

器面は自然面を残すものがほとんどで、わずかに打っている部分や磨っているもので、河原石が多く、われたものがかなりある。なかには火熱を受けたものもある。

第22類（図41-16）

石器の両面に凹んだ打痕が認められるもので、不整円形をしており、約1kgの重さを利用して「ハンマー」的な役割を持った石器と考えられる。

第23類（図17-8、図54-52）

2例認められたが、1点は第4号住居址床面に安定した形で座っていた。石器を加工した時に台石として使用されたものと考える。台石のまわりには剥片が多数ちらばり、使用を物語っている。他の1点は前のものよりずっと小さなものであるが、下面是平らで座りは良く、上部台面は中央がやや凹み、使用を重ねたことがうかがわれる。

第24類（図32-2、図39-1～8、図40-9～15、図41-17、図12-3、図54-51、図55-55、図59-101）

第3号住居址から集中的に出土したもので、形態は10～20cmの棒状のものが一般的である。使用痕は全く認められない。この種の出土遺物が、先年、伊那市福島遺跡から出土し、「トイレットストーン」の名前が与えられているが、どうであろうか。石の形がほぼ一定しており、使用痕の残るような使われ方をしなかった点を考えると、石の重さを利用するような使用法を推察したが不明な点が多い石器である。第3号住居址以外の出土のものも形態が似ているため同類としたが、あるいは自然かもしれない。

第25類 石錘（図54-47、図55-61）

2点出土したが、いずれも楕円形扁平な自然石を用い、上部と下部を打ち欠いて製作している。30～42gの石錘としては並の重さである。川の幸に恵まれたこの地帯では石錘のもつ意味は大きい。

第26類（図54-50）

第2号住居址の東側から出土したものである。発見時点から最も疑問視されていた石器であり現在も確定していないが、いわゆる「矢柄研磨器」と言われるものではないかと推定している。県下においてもまだ発見例が極めて少ないので、今後の検討を待ちたい。

第27類（図12-5、図18-13、図25-19、図55-54、図57-82、図58-90）

類別の範囲には入れがたいもので、その他の石器とした。石器として使用したか決定できないが、何かに使われたのではないかと思いたい。形態も一定せず、使用痕もはっきりしない。

（柴 登巳夫）

表一四 出土石器要目一覽表

番号	図版番号	分類	器種	法 量			材質	現存状態 完形欠損	出土位置	備考 (遺物番号)
				最大長さ (cm)	最大巾 (cm)	重量 (g)				
1	図32-5	1	石鏃	2.0	1.2	0.70	チャート	○	2号住居址	1536
2	図12-7	1	"	2.5	1.1	0.90	"	○	4号竪穴	3334
3	図52-1	1	"	1.9	2.3	1.25	"	○	L-30	3938
4	図52-2	1	"	3.0	1.2	0.90	"	○	L-34	1666
5	図52-3	1	"	2.8	2.0	1.05	"	○	L-34	1670
6	図52-4	1	"	1.8	2.3	1.65	"	○	M-28	4097
7	図52-5	1	"	2.0	1.5	0.70	"	○	Pt34	3878
8	図60-118	1	"	2.4	2.1	3.40	"	○	表採	表14
9	図25-17	2	"	1.5	1.7	0.35	黒曜石	○	1号住居址	2598
10	図52-6	2	"	2.0	0.7	0.30	"	○	M-30	4281
11	図52-7	2	"	1.5	1.2	0.30	"	○	Q-26	358
12	図60-117	2	"	2.1	0.8	0.40	"	○	表採	表375
13	図25-18	3	"	2.7	1.8	0.95	"	○	1号住居址	4665-2
14	図19-6	3	"	1.9	1.4	1.35	"	○	遺物集中区	4003
15	図52-8	3	"	2.4	1.5	1.90	チャート	○	K-37	3092
16	図52-9	3	"	2.5	1.8	1.35	黒曜石	○	L-32	2313
17	図52-10	3	"	3.0	2.2	4.85	チャート	○	L-32	3962
18	図52-11	3	"	2.7	1.3	1.95	"	○	M-35	4405
19	図25-16	4	"	1.6	1.3	0.35	黒曜石	○	1号住居址	3263
20	図52-12	4	"	3.2	1.4	1.90	チャート	○	K-26	2917
21	図41-24	5		1.9	1.3	0.65	黒曜石	○	3号住居址	1969
22	図18-17	5		1.6	1.1	0.25	"	○	4号住居址	3416
23	図19-5	5		1.4	1.5	0.45	"	○	遺物集中区	2800
24	図52-13	5		1.7	1.2	0.45	"	○	H-26	1000
25	図52-14	5		1.6	1.2	0.35	"	○	J-31	2286
26	図52-15	5		1.4	1.2	0.40	"	○	J-34	3913
27	図52-16	5		2.5	1.7	1.15	"	○	K-26	922
28	図52-17	5		1.9	1.6	1.00	"	○	K-26	2630
29	図52-18	5		2.0	1.3	0.60	"	○	K-27	2392
30	図52-19	5		1.3	1.3	0.35	"	○	L-29	4178
31	図52-20	6	ドリル	2.9	1.5	1.95	チャート	○	J-31	2280-3
32	図52-21	6	"	2.9	3.8	8.60	"	○	K-33	1371
33	図52-22	6	"	1.9	0.7	0.70	黒曜石	○	M-31	3837
34	図52-23	6	"	2.0	2.0	0.70	"	○	N-26	2022
35	図52-24	6	"	3.5	3.0	13.75	"	○	L-27	825
36	図41-22	7	スクレーパー	3.4	2.0	4.60	チャート	○	3号住居址	2753
37	図41-21	7	"	5.7	3.4	15.70	"	○	3号住居址	2777-2
38	図52-25	7	"	7.9	3.3	28.30	"	○	H-26	313
39	図12-8	8	"	3.2	2.2	3.55	"	○	4号竪穴	3243
40	図52-26	8	"	2.5	1.7	3.85	黒曜石	○	I-26	921
41	図53-27	8	"	3.9	2.1	7.70	チャート	○	K-26	4460-2
42	図53-28	8	"	4.1	2.6	11.50	"	○	K-33	1591
43	図53-29	8	"	3.6	2.0	4.60	黒曜石	○	L-28	1727
44	図53-30	8	"	3.7	3.2	16.50	チャート	○	L-28	1464
45	図53-31	8	"	2.0	2.2	1.80	黒曜石	○	L-30	3864

46	図53-32	9	スクレイパー	3.9	5.0	26.90	チャート	○	K-29	1783
47	図53-33	9	"	2.4	3.1	4.10	黒曜石	○	K-37	3084
48	図41-20	10	"	5.0	3.6	15.25	チャート	○	3号住居址	4794
49	図32-4	11	"	2.0	2.7	5.7	"	○	2号住居址	2543
50	図53-34	11	"	2.0	1.8	1.95	黒曜石	○	L-30	3970
51	図41-23	12	"	3.8	1.9	2.80	"		3号住居址	2302
52	図18-15	12	"	4.4	1.0	2.25	"		4号住居址	3167
53	図18-16	12	"	4.2	1.0	2.00	"		4号住居址	3603
54	図53-35	12	"	5.0	2.3	11.45	"	○	F-25	188
55	図53-36	12	"	2.0	22.0	3.10	"	○	J-32	1181
56	図53-37	12	"	3.5	1.7	4.05	"		K-30	1693
57	図53-38	13	コア-	3.4	2.7	17.50	"	○	M-28	701
58	図19-2	14-a	打製石斧	12.9	3.7	98	粘板岩	○	遺物集中区	2821
59	図19-4	14-a	"	11.1	4.3	95	砂岩	○	遺物集中区	3145
60	図54-45	14-a	"	9.4	4.5	80	緑色岩	○	○ K-25	4486
61	図54-46	14-a	"	10.0	4.7	100	砂岩	○	K-26	811
62	図55-62	14-a	"	7.4	4.4	100	緑色岩	○	K-33	1605
63	図57-77	14-a	"	11.9	3.5	65	硬砂岩	○	N-29	626
64	図58-91	14-a	"	6.5	4.7	57	"	○	N-32	1472
65	図58-94	14-a	"	12.2	5.5	100	変質粘板岩	○	N-34	3775
66	図58-89	14-a	"	8.4	5.0	100	砂岩	○	O-36	3155
67	図58-95	14-a	"	12.0	5.0	102	"	○	R-21	299
68	図59-99	14-a	"	11.9	4.9	170	変質粘板岩	○	R-25	252
69	図59-100	14-a	"	11.1	5.0	130	緑色岩	○	R-25	253
70	図58-96	14-a	"	11.0	4.4	100	砂岩	○	R-27	4265
71	図59-104	14-a	"	8.5	3.9	80	砂岩	○		2699
72	図60-109	14-a	"	11.6	4.5	120	硬砂岩	○	表 採	表66
73	図60-113	14-a	"	10.2	3.9	75	緑色岩	○	表 採	表68
74	図56-69	14-b	"	11.2	7.0	260	硬砂岩	○	M-26	635
75	図58-85	14-b	"	13.5	7.0	340	砂岩	○	O-26	490
76	図60-116	14-b	"	9.3	6.0	127	"	○	表 採	表70
77	図54-48	14-c	"	3.3	5.3	27	"	○	K-29	4062
78	図55-57	14-c	"	6.5	5.1	60	緑色岩	○	K-32	2603
79	図57-78	14-c	"	4.8	5.1	32	砂岩	○	M-33	3229
80	図57-81	14-c	"	8.6	5.0	70	変質粘板岩	○	M-34	1115
81	図58-88	14-c	"	11.2	5.8	105	砂岩	○	O-25	2235
82	図58-86	14-c	"	10.8	5.6	100	"	○	O-27	4553
83	図58-92	14-c	"	7.4	7.7	80	"	○	O-29	1703
84	図12-2	14-c	"	11.0	5.8	140	"	○	3号堅穴 Pt-34	3247
85	図59-97	14-c	"	13.1	7.8	250	"	○	Q-28	3627
86	図59-98	14-c	"	5.5	5.4	42	変質粘板岩	○	Q-33	3613
87	図60-115	14-c	"	6.3	6.8	83	"	○	表 採	表79
88	図19-1	14-d	"	14.0	5.6	160	砂岩	○	遺物集中区	2975
89	図56-63	14-d	"	18.5	7.8	355	"	○	L-27	828
90	図56-64	14-d	"	20.0	7.1	285	"	○	L-27	830
91	図19-3	14-e	"	10.0	5.0	110	"	○	遺物集中区	3098
92	図54-44	14-e	"	12.5	4.9	100	緑色岩	○	J-31	1178
93	図60-112	14-e	"	11.0	4.3	90	"	○	表 採	表63

94	图55-58	15		10.0	4.4	122	粘板岩	○	K-36	3005
95	图60-114	15		10.5	5.0	180	砂 岩	○	表 探	表69
96	图41-19	16		4.1	6.0	38	砂 岩		3号住居址	1869
97	图54-42	16		5.8	5.8	58	砂 岩	○	G-25	319
98	图55-60	16		6.5	7.0	60	砂 岩	○	L-26	4198
99	图56-67	16		7.2	6.0	90	砂 岩	○	L-34	1716
100	图57-72	16		8.8	5.3	63	砂 岩	○	M-28	643-1
101	图57-79	16		9.1	5.9	65	砂 岩	○	M-30	4043
102	图57-74	16		5.4	8.4	62	砂 岩	○	M-31	1150
103	图57-80	16		5.5	4.6	30	砂 岩	○	N-28	1760
104	图58-87	16		8.2	3.7	60	砂 岩	○	N-36	1778
105	图32-1	17	石 盆	9.7	8.5	470	硬砂岩	○	2号住居址	4679
106	图17-9	17	"	23.7	19.2	4180	花岗岩	○	4号住居址	4204
107	图16-6	18	凹 石	10.8	6.0	290	变质粘板岩	○	4号住居址	4068
108	图16-5	18	"	14.0	5.1	415	"	○	4号住居址	4069
109	图17-10	18	"	13.3	11.1	1540	花岗岩	○	4号住居址	4203
110	图55-56	18	"	12.0	6.3	520	砂 岩	○	K-35	3989
111	图57-83	18	"	9.6	6.2	276	安山岩	○	N-30	4118
112	图58-84	18	"	9.3	6.5	105	砂 岩	○	N-34	3778
113	图54-41	19	磨 裂 石 片	8.0	4.4	102	粘板岩	○	H-27	37
114	图54-43	19	"	6.1	5.2	115	砂 岩	○	J-27	554
115	图56-68	19	"	14.1	4.2	260	绿色岩	○	L-36	1981
116	图57-71	19	"	8.8	4.2	165	砂 岩	○	N-27	1788
117	图32-3	20	磨 石	7.0	7.4	330	砂 岩	○	2号住居址	4669
118	图41-18	20	"	7.7	6.3	253	砂 岩	○	3号住居址	2041
119	图16-7	20	"	11.6	11.0	510	砂 岩	○	4号住居址	4664 4676-1
120	图16-4	20	"	17.0	7.4	1210	砂 岩	○	4号住居址	4071
121	图16-3	20	"	12.6	8.3	792	砂 岩	○	4号住居址	4074
122	图18-12	20	"	11.2	8.7	1070	砂 岩	○	4号住居址	4077
123	图12-6	20	"	5.8	6.5	340	硬砂岩	○	5号竖穴	4346
124	图54-49	20	"	11.5	8.0	645	砂 岩	○	K-30	4216-1
125	图56-65	20	"	15.4	7.2	520	砂 岩	○	L-30	4114
126	图57-73	20	"	7.5	6.4	242	硬砂岩	○	M-30	4212
127	图59-105	20	"	12.3	5.6	510	粘板岩	○		4774
128	图17-11	20	"	5.9	9.1	240	砂 岩	○	表 探	表64
129	图60-108	20	"	15.8	9.0	820	砂 岩	○	表 探	表395
130	图55-53	21-a	"	5.5	7.5	240	花岗岩	○	K-31	2593
131	图18-14	21-a	"	9.1	8.0	853	砂 岩	○	4号住居址	4070
132	图12-4	21-a	"	7.0	8.5	270	砂 岩	○	3号竖穴	60
133	图55-59	21-b	"	9.0	5.7	258	硬砂岩	○	K-36	2990
134	图56-66	21-b	"	10.4	4.5	150	砂 岩	○	L-30	4238
135	图56-70	21-b	"	9.0	4.7	85	砂 岩	○	M-26	4201
136	图57-75	21-b	"	8.5	8.4	198	砂 岩	○	M-33	3484-2
137	图57-76	21-b	"	10.0	7.1	430	硬砂岩	○	M-34	1739
138	图58-93	21-b	"	7.0	5.5	220	花岗岩	○	P-21	327
139	图12-1	21-b	"	5.6	4.1	50	砂 岩	○	1号竖穴	2944
140	图59-107	21-b	"	8.6	4.6	107	砂 岩	○		4778
141	图59-106	21-b	"	4.5	9.5	268	硬砂岩	○		4799

142	圆59-103	21-b	磨 石	8.0	7.0	163	砾 岩		○		4808
143	圆59-102	21-b	"	11.0	7.8	510	硬砂岩		○		4813
144	圆60-110	21-b	"	10.0	5.3	260	砾 岩		○	表 换	表80
145	圆60-111	21-b	"	11.8	6.3	310	花岗岩		○	表 换	表135
146	圆41-16	22		11.6	9.8	880	粘板岩		○	3号住居址	3696
147	圆54-52	23-a	石器加工台	10.2	4.8	410	砂 岩	○	K-30		4216-4
148	圆17-8	23-a	"	39.6	25.6	204	鞍山岩			4号住居址	4202
149	圆32-2	24		12.7	3.9	220	砂 岩		○	2号住居址	3398
150	圆39-1	24		28.2	5.9	930	硬砂岩	○		3号住居址	2747
151	圆40-9	24		17.7	5.5	356	"	○		3号住居址	2774
152	圆39-2	24		11.2	2.9	90	变质粘板岩	○		3号住居址	2757
153	圆39-8	24		12.2	2.6	110	"		○	3号住居址	3719
154	圆40-10	24		19.0	4.7	360	砂 岩	○		3号住居址	4297
155	圆40-11	24		16.0	5.7	325	"	○		3号住居址	4298
156	圆40-12	24		15.7	5.1	342	"	○		3号住居址	4299
157	圆40-15	24		15.0	4.2	235	硬砂岩	○		3号住居址	4303
158	圆39-4	24		14.2	3.3	155	砂 岩	○		3号住居址	4304
159	圆39-5	24		16.0	3.5	270	硬砂岩	○		3号住居址	4305
160	圆40-14	24		14.5	5.3	305	"	○		3号住居址	4306
161	圆39-7	24		16.8	4.4	290	变质粘板岩	○		3号住居址	4307
162	圆39-3	24		15.4	3.7	200	石英岩	○		3号住居址	4308
163	圆39-6	24		19.9	4.4	450	硬砂岩	○		3号住居址	4309
164	圆41-17	24		15.4	4.1	215	"	○		3号住居址	4310
165	圆40-13	24		16.5	4.7	270	变质粘板岩	○		3号住居址	4311
166	圆12-3	24		11.8	4.6	120	粘板岩	○		5号竖穴	4388
167	圆55-55	24		15.5	6.0	540	变质粘板岩	○	K-32		1540
168	圆54-51	24		21.2	5.5	300	粘板岩	○			4718
169	圆59-101	24		9.5	4.3	230	"	○			4728
170	圆54-47	25	石 锤	6.3	4.2	42	"	○	K-29		1738
171	圆55-61	25	"	5.0	2.9	30	"	○	L-24		2193
172	圆54-50	26		5.1	3.8	45	砂 岩		○	K-30	4220
173	圆25-19	27		4.7	4.3	50	硬砂岩		○	1号住居址	3434
174	圆18-13	27		—	—	720	花岗岩		○	4号住居址	4073
175	圆12-5	27		11.1	6.0	165	变质粘板岩		○	5号竖穴	4593
176	圆55-54	27		7.5	5.6	125	砂岩	○	K-32		3753
177	圆57-82	27		6.4	6.7	132	花岗岩		○	N-31	1406
178	圆58-90	27		7.3	4.3	60	变质粘板岩	○	O-27		4519

第Ⅳ章 所 見

大原第1遺跡の調査結果の詳細については前述のとおりであるが、調査を通して得た二・三の問題点を記して所見としたい。

縄文早期 本遺跡発見の1~8号は押型文期の竪穴と考えられる。そのうち遺物分布で窺えるように4・6号に押型文土器が集中している。その外の竪穴は周辺から流れ込んだと考えられる押型文以外の遺物が混入していると見なされた。本遺跡発見の竪穴には住居址と考えられる面も窺えたが、住居址としての施設を備えていないと云う点で竪穴としてとりあげた。次に遺跡の所在であるが、上伊那地方では今迄山頂・山腹・平坦部の台地上に発見される例はあったが、天竜川の河成段丘上に発見されたことは初めてである。この事実により押型文の遺跡は特定の位置に占地することは考えられなくなってきた。また、押型文の遺跡には単独な遺跡はなく必ずと云うほど時期の異なる遺物や遺構が伴なうことに注目しなければならない。遺物について、押型文の土器をI群として扱うこととした。I群の中を更にA~Iまで文様の構成によって細別した。土器については前述の説明の通りである。本遺跡の押型文土器は大方細口保式に比定されるものであるが、一部種式も混入することが窺える。

縄文前期の遺構と遺物、第4号住居址は東西4.2m、南北2.8m横円形を呈している竪穴式の住居址である。炉址は中央や、南寄りにあり地焼炉である。柱穴はこの期によくある映ぎわとに設けられる例に類似している。前期の住居址は構造上いろいろの点で多くの問題点をもっている。出土遺物で特に注目されるのは、石器の加工台である。詳細については本文中に報告されているのでここではふれることにするが、最近上伊那地方の縄文早期末~前期にかけて、この種の例が見受けられる様になってきたことにより、石器加工の研究の端緒になれば幸いである。土器は図15(1~2)にある波状口縁平底無文の菱形土器であるが、当方では私の知る範囲では見かけられない土器である。波状口縁で薄手の作は前期の土器であることは相異ないと考えられるが、明確な位置付は現時点では保留しない。そのほか黒浜式・諸縫B式に比定される前期の土器と、中期の土器が発見されている。しかしこれ等に關係ある遺構は発見することができなかつた。

奈良時代の住居址、第1号住居址は西壁に石芯粘土のカマドが設けられた偶丸方形の竪穴式住居址である。遺物は遺物分布図で見るよう、カマド附近に集中していることが読み取れる。遺物の一部は住室内でかなり接合されたものもあることが注目される。本住居址は遺物の面から奈良時代~平安時代の極めて初めにかけて位置付けられよう。

第2号住居址 本住居址は遺物の分類上から第1号住居址よりや古い時期になる住居址と考えられる。

第3号住居址 本住居址は東壁に石芯粘土ガマをもつ偶丸長方形の竪穴式住居址である。床面上に多くの炭化材や焼土が発見されていることより、火災にあった住居址と考えられる。遺物はカマド附近に特に集中している。また、カマドの左側にまとまって棒状自然石が発見された。報告書には「トイレットストーン」の名称が付けられているが、使用上の点は現在のところ不明である。本住居址は第1号住居址と同様奈良時代末~平安時代初頭の時期と思われる。

グリッド出土の遺物(第51図)

1~6・9~10・12は土器で真間期に比定されるもの。7・11は国分I期と考えられる。13は須恵器、美濃須恵古窯で焼かれたもの9世紀。22・33・36・37は黒鉢90期に比定されるもの。14~15・18・23~32は折戸53期と考えられる。

石器 本遺跡発見の石器は総数177点で、その内訳は出土石器要目一覧表に示してあるように全体を26類に分類して説明した。そのうち押型文土器と伴出をするものに「鍔形鐵」、「長脚鐵」、「三角鐵」等があげられる。その外は、縄文前期・中期・後期等の遺物が出土しているので時期別に図解である。

その他の陶磁器

本遺跡出土の陶磁器は全体で50片出土したその内訳は、灰釉の皿・碗・甕・壺類で26片時期は10~11世紀、産地は美濃・瀬戸窯である。室町期のものは16片で産地は美濃・瀬戸である。青磁は1片発見されたが産地は不明である。室町期器種は、天日茶碗・甕等である。江戸時代で茶碗の破片が3片発見された。その以外は明治大正の染付である。以上本遺跡に対して問題とされる項目について若干意見を述べ所見としたい。本報告書を終るに当たり、この調査について種々の御指導をいたいたした県教育委員会の担当の各位、記録保存事業を推進された箕輪町教育委員会、報告書の編集に当たられた箕輪町博物館の柴登巳夫、竹入洋子学芸員。報告書完成まで協力をいたいたいた、赤羽義洋(辰野町美術館学芸員)、荻原茂(東京薬科大学学生)、小池幸夫(静岡大学学生)、三沢忠(立正大学学生)、伊那北高等学校歴史研究部各位の献身的な御努力に対し篤く御礼を申し上げる次第であります。

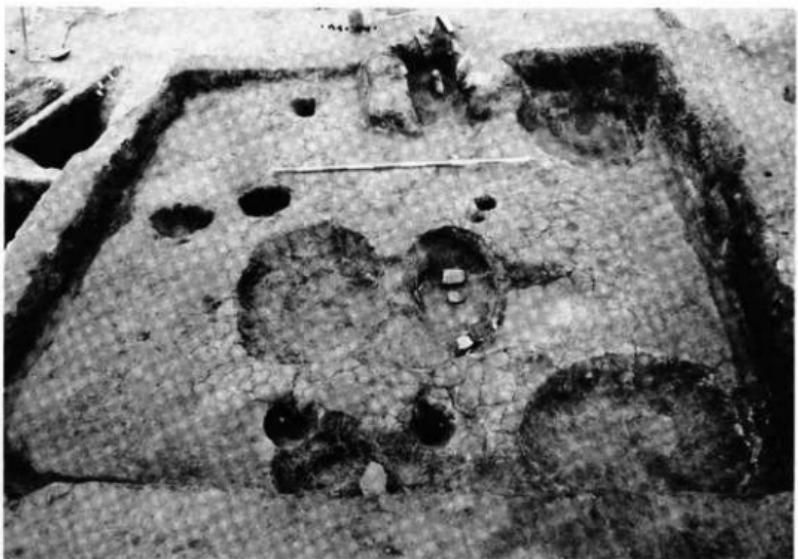
(調査団長 友野良一)



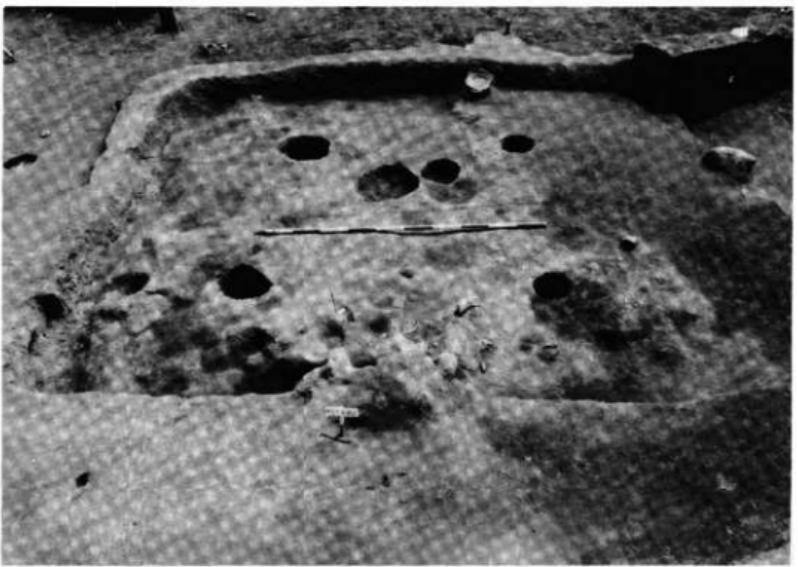
遺跡地近景



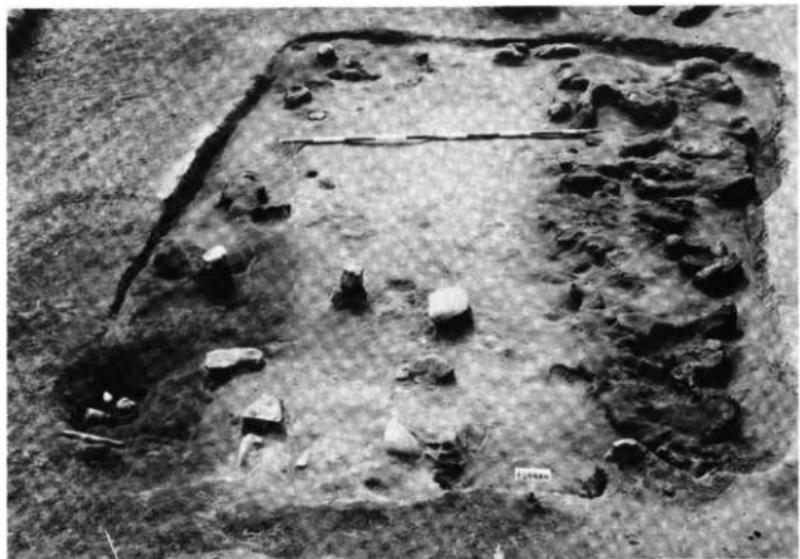
遺構全景



第1号住居址



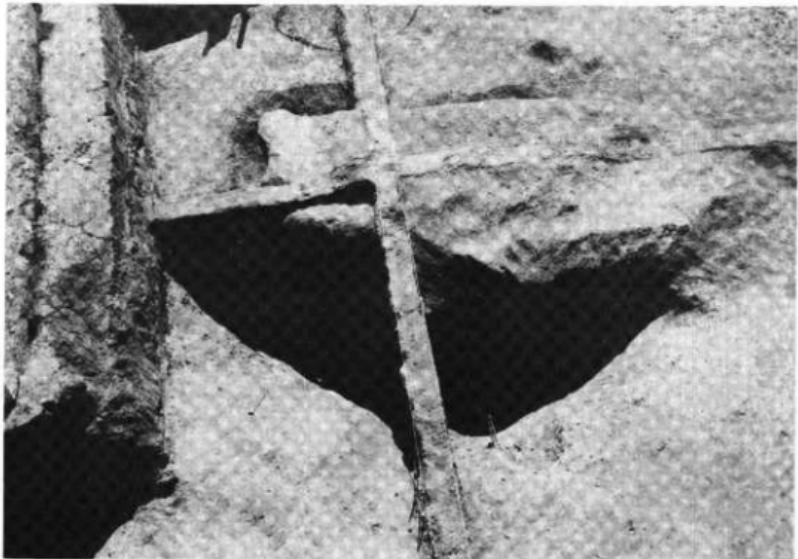
第2号住居址



第3号住居址



第4号住居址



マウンド状遺構



ピット集中遺構



1. 町議会議員視察



2. 教育委員、文化財調査委員視察



3. 調査状況



4. 若手調査団



記念撮影



1. カマド全景



2. カマド内遺物出土状態



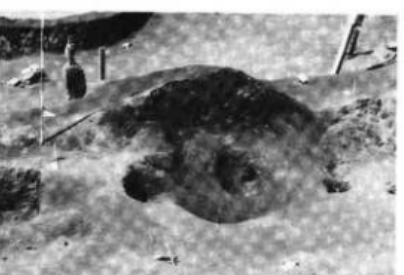
3. 支脚及び抽石



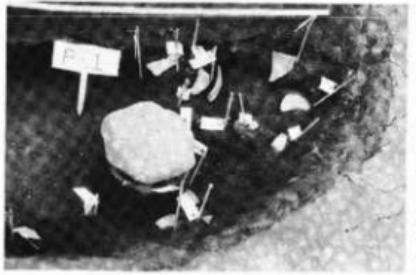
4. 左側断面



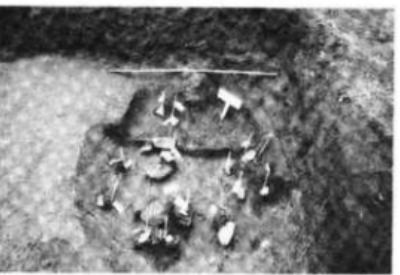
5. 火床及び抽石



6. カマド完掘状態



7. ピット1内遺物



8. ピット2内遺物



1. カマド全景



2. カマド内遺物出土状態



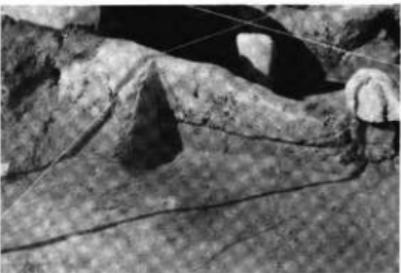
3. カマド内遺物出土状態



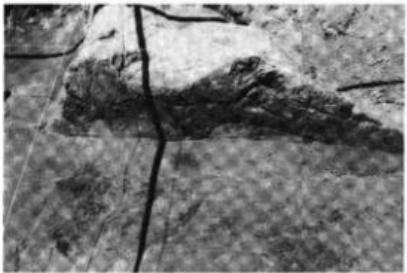
4. 尖床及び支脚



5. 油石出土状態



6. 右油断面



7. 左油断面



8. 正面奥断面



1. カマド全景



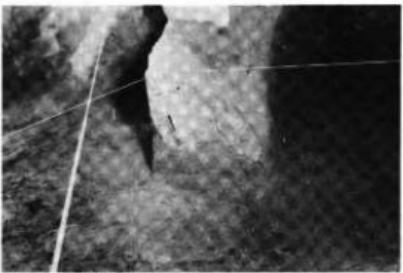
2. カマド中央断面



3. カマド右袖断面



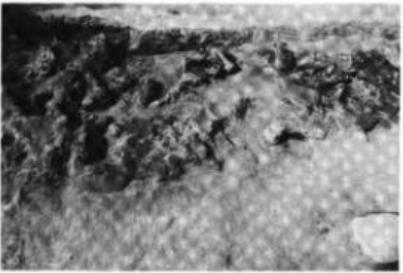
4. 支脚と袖石



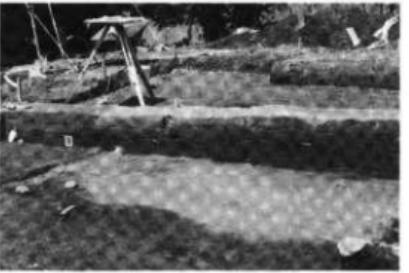
5. カマド右袖断面



6. 石器及び炭化物出土状態



7. 床面上焼土



8. 遺構上土層断面



1. 第2号住居址遺物



2. 第2号住居址内土器



3. 第3号住居址内石器



4. 第3号住居址内土器



5. 第4号住居址内土器



6. 第1号住居址内刀子



7. コアー出土状態



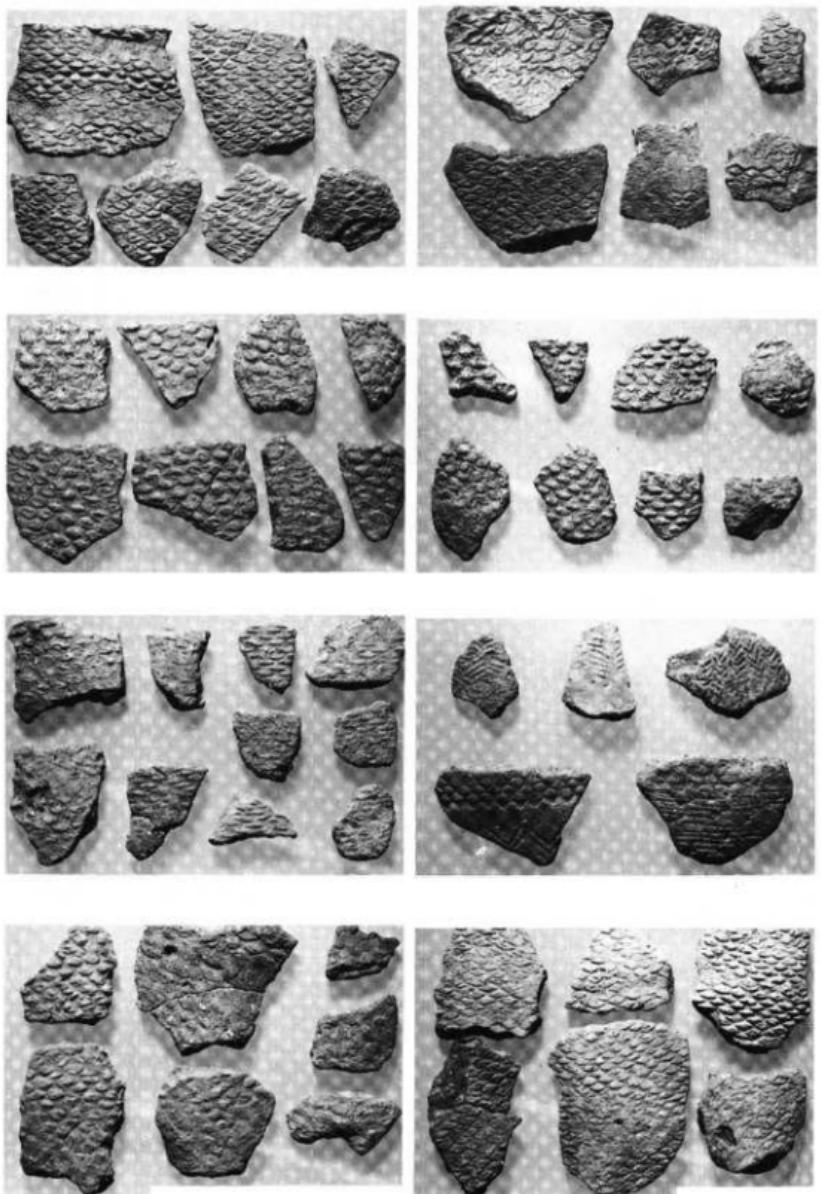
8. 矢柄研磨器出土状態



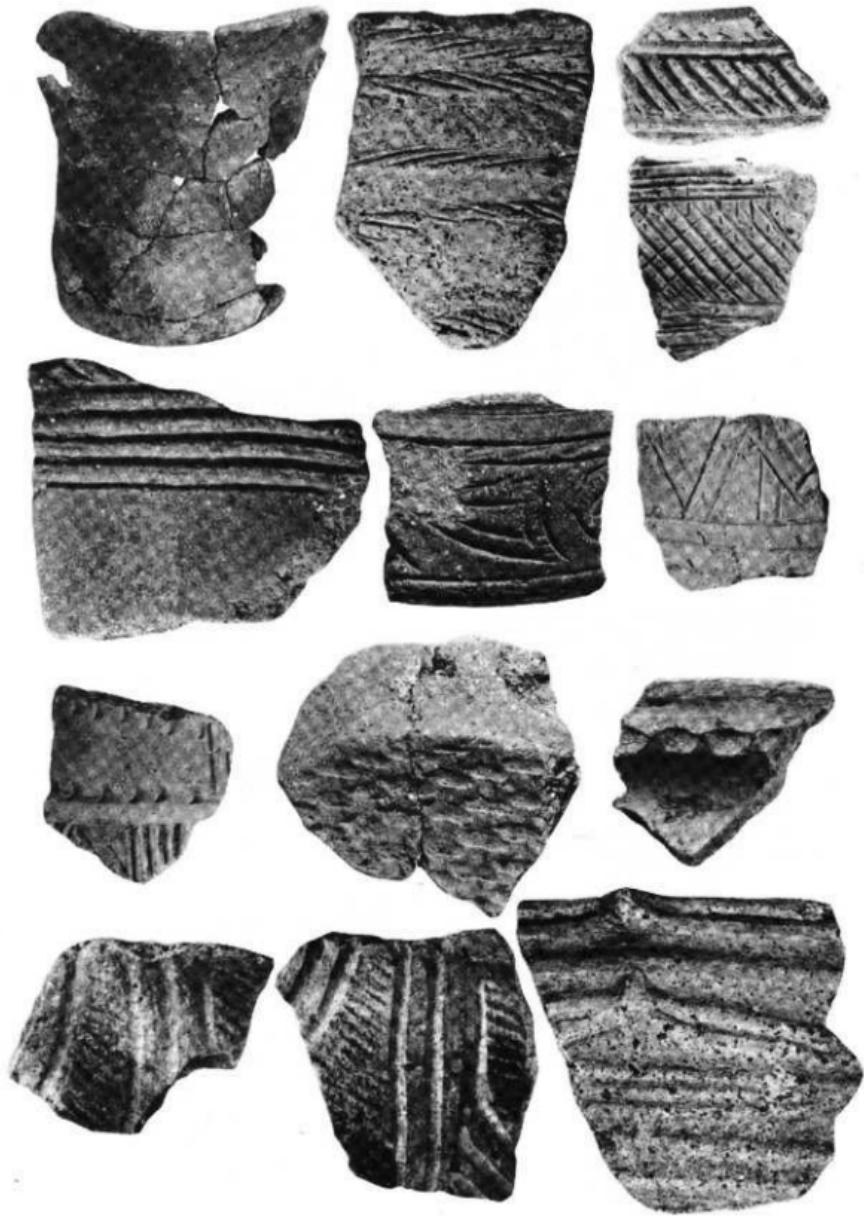
第10図版 出土石器 I



第11回版 出土石器 2



第12回版 出土土器 1



第13図版 出土土器 2